Fate/Zero -Irregular shuffle-

もぐ愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ　－Ｉｒｒｅｇｕｌａｒ　ｓｈｕｆｆｌｅ－

【Ｎコード】
Ｎ１９２８Ｘ

【作者名】
もぐ愛

【あらすじ】
ウェイバー・ベルベットは征服王を召喚する直前に意識を失い、目が醒めた時には触媒を奪われたことに気付く。右往左往の葛藤を経て、やけくそ気味に召喚した結果、現れたのは――紅い外套を身に纏う、白銀の髪に赤眼が特徴的な少女のサーヴァントだった。

序：召喚

ウェイバー・ベルベットは自身の真価を見誤り、見損ない続ける魔術協会の総本山である時計塔の魔術師どもに、日々苛立っていた。

確かに己の血に宿る魔術師としての歴史は、まだ三代しか積み重ねていない。それゆえに歴史が“浅い”という評価は、彼も認めざるを得ない、揺るぎない事実である。

魔術師をして最も価値のある財産である魔術回路と魔術刻印。魔術師の愛人であった祖母が偶さかの運びで習得し、祖母から母へ、母より自身へと受け継がれたそれは、なるほど倍の時間を掛けたものに負けるだろう。

しかし、だからこそ彼は代を経て積み重ねる魔術師としての絶対の価値を否定し、当人の努力と才能で埋めるという持論を提唱したのだ。

魔術師とは最終的には根源に辿り着くことを目的とし、そこへ至るために魔術の秘奥を成そうとする人種である。

そのための神秘、そのための奇跡、そのための魔術だった。

そして彼ら魔術師をして、魔術をもってそれをなすのは至難の道

程に他ならない。
魔術師は根源への道筋として選択した魔術の秘奥の完成を目指す。しかしそれは、一代では到底成せる業ではなかった。
だからこそ魔術師はその生涯を通じて蓄積した研究の成果を子へ孫へと子々孫々に引き継がせ、膨大な時間を用いて成し遂げるのである。

その一助として、代を重ねることで開拓されてゆく魔術回路の本数は多ければ多いほどいい。
その本数が生まれながらにして持ち合わせる量が決定づけられるのならば、本数の多い血統と血を交えればいい。
そうした優生学的な方法すら当然の如く冷徹に取り入れられ、その手段を取った魔術師の家系は遺伝的に優れた資質と本数を先天的に得ることとなる。

こうして歴史ある家系と侵攻の家系の間で、生まれながらの地力に格差が発生し、魔術師の巣窟である時計塔においての優劣が決まってゆく。
畢竟、古きものは優れ、歴史と血こそに価値が見出される異界となっていった。
そうして現在、時計塔ではそうした魔術師業界における絶対的な価値観に裏打ちされ、血統をことさらに誇り優待される生徒たちが我が物顔でのさばり続けるという環境が完成していた。

新興の家系であり、新参者であるウェイバーはこれらの考えが嫌いだった。
同時にこうした考えの下、自身よりも桁違いに優遇される連中、それを当然のごとくする講師陣、（本人の認識において）鳴り物入りで招聘されたにも関わらず自身に不当にして不遇の扱いをする時計塔全体に憤懣せずにはいられなかった。

であるからこそ、魔術師の業界に蔓延る歴史と血統を重んじる不可侵の通念を否定した、己の理論の正しさを知らしめねばならないのだ。

ウェイバーは自身の才能と同じく、己が抱くこの考えを信じて疑わなかった。

しかし、現実はとても非情だった。

彼の信じる自身の才能――魔術師としての実質的な才能――は、窮めて非才という他ない、お粗末なものでしかない。

彼が周囲から軽んじられるのは、その点を見抜かれているという事情もあったのだろうが、当人はそれに全く気付くことなく、胸で息巻く至高の持論を唯一無二の真理として提唱してやまなかった。

そしてウェイバーは自身の師事する降霊科の講師へと、会心の出来と自画自賛する一年かけて仕上げた論文を提出した。

その講師は極めて魔術師的な人物であり、生まれた時から全てに恵まれて成長を遂げ、時計塔における当代有数のエリートであった。

エリート。そう、時計塔でのエリートとは、ウェイバーが嫌悪し唾棄すべき旧態然とした価値観によって選別された存在である。

名門中の名門であるアーチボルト家の嫡男であり、時計塔内では尊貴と崇敬の念を込めて『ロード・エルメロイ』と呼ばれる稀代の魔術師、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。

よりにもよってケイネスは、ウェイバーの渾身の論文を軽く流し読みした後にあっさりと破り捨て、愚者を見下す賢者の態度で注意をくれたのである。

そのケイネスの言動は当然ながら褒められたものではない。少な

くとも真っ当な人間社会においては。
しかし彼らのいる場所は時計塔であり、ケイネスはそこに君臨する有数の講師であった。
権威も、実績も、実力も、全てが周囲から劣等生と認識されるウェイバーなどとは較べるべくもない高みに坐す存在。
ゆえに、人間的に多少の問題のある人格であろうと、奇矯な人物など掃いて捨てるほどいる時計塔の中では許されるのが現実である。

もっとも、被害者であるウェイバーだけはケイネスのその行為、その態度を許すことはできなかった。
日々の鬱屈で溜め込まれ続けたやり場のない怒りは、この時一つの方向性を得たと言っても過言ではない。
ケイネスを筆頭に魂の芯まで腐りきった魔術協会の連中に、いつか己の真価を思い知らせてやる。
そうなれば、至高の頂を踏み締める自身の輝きに全ての者がひれ伏すこと間違いなしだろう。

しかし、そう意気込んだは良いが、肝心の手段が一向に思い浮かばない。
魔術だけでなく政戦両略に関する才能にも恵まれていないのか、これといった良策が降って湧いたように出てくることもなく、ウェイバーは青臭い怨念を心中に募らせていた。
やがて煩悶と日々を過ごしてゆく内に、面憎きロード・エルメロイが極東のとある儀式に参加することを知る。

その儀式の名は聖杯戦争。
参加者である七人の魔術師はマスターとして各々一騎の英霊を己のサーヴァントとして召喚し、あらゆる願いと望みを叶える願望機である聖杯を得るため、七組のマスターとサーヴァントが最後の一組となるまで戦い抜き、殺し合う。

なるほど、儀式の名に戦争と銘打つだけある内容だった。
聖杯戦争の詳細を知ったウェイバーはこの儀式を、ようやくケイネスを始めとした時計塔の腐敗した者たちの眼を覚まさせる千載一遇の好機だと考えた。

そして時を置かずにウェイバーにとって幸運な、ケイネスにとっては不幸な事故が起こる。
なんと管財課の手違いにより、ケイネスの下へ届くはずだった英霊召喚のための触媒の入った荷を、形式的にはケイネスの弟子であるウェイバーが引き継ぎを頼まれてしまったのである。
ウェイバーは懈怠な管財課の不手際に感謝した。善は急げとすぐさまその荷を奪取し、自室で狂喜乱舞するほどの浮かれ振りだった。
荷の中身はある偉大な英雄が生前用いていた外套の切れ端である。
この触媒で召喚される英霊は一人しかいない。
その知名度や逸話から、不遇の天才たるウェイバー・ベルベットは聖杯戦争に参戦するに辺り、最強のパートナーを得たに等しい――

――そう、等しい、はずだった。

ウェイバーは朦朧とする意識に活を入れ、大して多くはない魔力

を消費し、初歩的な魔術で冷えた身体に暖を取る。
そうでもしなければ凍える身体の痙攣が治まらなかったのである。

「あぁ……ちくしょうっ、なんなんだよっ！」

目覚めたら地面に倒れていた。それが今現在、ウェイバーに判る自身の状況だった。

時間はいまだ寒風吹き荒ぶ深夜であり、もう少し覚醒するのが遅ければ、ひどい風邪をこじらせていたことだろう。
次第に鮮明となってゆく思考の歯車に油を差し、その回転を急がせ、ウェイバーはひたすら現状の把握に努めた。

ウェイバー・ベルベットは時計塔の腐った有象無象を見返すため、聖杯戦争に参加を決意した。
開催地である日本の冬木市に潜伏し、無事に参加権である令呪を右手の甲に授かった。
そして今宵、最強のサーヴァントを召喚するべく、冬木市深山町の某雑木林の奥で、儀式を行おうとした。
召喚に必要な魔方陣を描くため、すわ鶏三羽に引導を渡す段になって、なって……

「ま、まさか――っ！？」

英霊召喚の寸前で意識を失うなど、自然にあり得るはずもない。
ウェイバーは慌てて周囲を見回す。

彼が坐り込むのは、雑木林の空き地から離れた場所で、近くにはリードで繋がれた鶏三羽が段ボール箱の中で今もなお生きていた。陣を描くための生き血は問題ない。ならば、肝心の触媒は――

「な……ない……」

世にも情けないか細い声が、白い吐息とともに夜の森に解けて融ける。

二重三重に梱包して肌身離さず持って来た触媒、征服王イスカンダルの外套の一部が紛失していたのだ。

状況証拠的に推理して、奪われたとみて間違いないだろう。

そこまで思考が推移した結果、衝撃の事実のあまり大量に血の気が引き、ウェイバーの顔は蒼白を通り越して真っ白になっていた。

この時、ウェイバー・ベルベットを襲った絶望と恐怖と焦躁は筆舌に尽くしがたいものだった。

必勝を確信するほどの英霊を召喚する術をこうもあっさり失った現状、聖杯戦争を勝ち抜くのは困難を通り越して、その可能性は一気に勝率ゼロにまで急転直下した。

最悪なことに、すでにマスターとして令呪を授かった以上、すぐさま冬木から逃げ出すでもしなければ、敵性存在として他の参加者に狙われることは請け合いである。

四半刻前までは得意絶頂、まさに有頂天の心持ちだったというのに、今の精神状況はまさにどん底、ウェイバーの短い生涯において最低最悪の状態だった。

あのロード・エルメロイと謳われるケイネスですら、時計塔の講師という権限を最大に発揮してようやく手にした触媒だというのに、

今さら同格の物を用意するなど、ほとんど裸一貫のウェイバーには無理な話だった。

同格どころか、英霊縁の品を得る伝手すらそもそも持っていない。結論は、触媒なしと相成った。

あれほど彼を歓ばせ、まるで天使の翼の如き軽快さを錯覚させた令呪は、不思議なことに今や己の死刑宣告書のごとく重く感じ、禍々しい呪いのようにウェイバーの瞳には映った。

「ちくしょうちくしょうちくしょうっ、なんでっ……こんな……誰が盗ったんだよぉ、くっそぉ！！」

自身も他者から盗み出したことを棚に上げ、涙と洟を垂らして悪態を吐く。

幼稚な慟哭は喉が嗄れ、八つ当たりで痛めつけた拳から血が流れ出すまで続いた。

喉と手の痛みで次第に悲愴感の滲む癇癪も沈静化し、なんとか正常な思考が出来るまでに落ち着いたところで、今度は現状という名の非情な現実が、鉛のように肩にのしかかる。

その重さたるや、ウェイバーの脆弱な矮躯を押し潰さんばかりだった。何しろ掛かっているのはプライドもあるが大部分が己の命である。

彼は否が応にも聖杯戦争に参加するべきか、尻尾を巻いて逃げるべきかの選択を、この場で余儀なくされた。

命が惜しければ今すぐにでも逃げ出せばいい。タクシーを掴まえて空港に向かい、すぐさまチケットを購入して海外へ逃亡すれば、

まだ助かるかもしれない。
しれないのだが、仮にそうやって逃げたとしても、ウェイバーには無事に逃げ出せる自信を持つことはできなかった。

そのような思考には当然理由がある。
まず始めに認めなければならないのが、少なくともマスターの一人にウェイバーが参加者、それもマスターであることがバレているということである。
召喚間際に襲って触媒を奪い取るなどというピンポイントな犯行を成し得る時点で、ずっと監視されていたのだろうと容易に推測できる。
この時点でウェイバーとしてはこの戦争、もはや詰んでいた。触媒を奪った者には当然ながら拠点も判明していると思った方がいいだろう。
身寄りのない異境の地で、寄る辺たる根拠地を失ったに等しい。ウェイバーの絶望感は考えれば考えるほど増していくのは気のせいであろうか。

そうして負の感情を沸々と増大させていく内に、どうして自分が今ここで生きているのかという疑問が生じた。

ウェイバーはマスターである。そして、触媒を奪ったのもおそらくマスターか、参加者と係わりのある人物なのだろう。
バトルロイヤルという完全な殺し合い形式である聖杯戦争の性質上、対立陣営の参加者を生かしておく理由はまずないのである。
くわえ、マスターという存在は生きているだけで脅威である。令呪を持っているというだけで、英霊を召喚する権利を得ている上に、例え令呪を失ってもマスターを失ったはぐれサーヴァントとの契約も可能であるのだから、触媒を奪った者（乃至者たち）は、当然のこととしてウェイバーをその場で殺害するのが最もスマートな戦略

であろう。
だというのに、ウェイバーはいまだに生きている。令呪も奪われておらず、仮に奪う方法がないならば腕を切断でもすればいいのにも関わらず、五体満足に右手は健在のままとなっている。

おかしい。この状況はセオリーに反していると言っていいだろう。
そもそも令呪そのものも価値のある存在である。マスターの肉体表面に一度顕現すれば、消費型フィジカル・エンチャントとしては破格の効果を発揮する。
触媒を奪われたならば、令呪を残す必要もないはずである。

となると、残す必要があったということか？

考えられる理由として、マスターとしてウェイバーを生かしておく方が下手人（たち）の利となる可能性。もしくは、戦争開始前にマスターの殺害を忌避した可能性。
これらはあまり信憑性のない理由だろう。そもそもマスター権そのものを奪ってしまえば、自分たちで英霊を召喚してマスターとなることができるのだから。
次に思い浮かぶのは、甚だ不本意でプライドの塊とも言えるウェイバーの自我に大ダメージを与える可能性。
そう、「ウェイバー・ベルベットごときマスターは別に殺す必要性もなく、令呪を奪って脱落させる価値もない」と見逃された可能性である。

ぎりっと奥歯が噛み合う。
ウェイバーとしては非常に認めたくないことだが、こう考えた方が自然、あり得るであろう理由となってしまっている。
そも、征服王イスカンダルの触媒がない以上、どんな英霊を召喚するかは神のみぞ知るというやつだ。

もともと戦争なんて野蛮な行為の初心者たる一介の魔術師に過ぎないウェイバーが、仮に並の英霊を召喚して参戦した場合、勝ち上がれるものだろうか？

ウェイバーは自信を持って勝てるとは断言できなかった。いや、思うことすらできなかった。

そして忘れてはいけない問題がある。

即ち、ウェイバーを襲った下手人が征服王イスカンダルを召喚するという可能性。

いや、むしろ征服王イスカンダルの召喚を狙ったがためにウェイバーを襲ったのではないか。

となると下手人は、ウェイバーがそれを持っていると事前に知っているということになり、そんなことを知っているのは、本来その触媒を手にするはずだったケイネスぐらいしかいないだろう。

しかし、あの陰湿で粘着な（とウェイバーは疑っていないし事実その通りである）ケイネスという男が、ウェイバーを生かしておくとは考えられない。

……嬉々として最大級の苦しみを与えることだろう。そして凄惨な死を迎えるはずだ。

ケイネスに敗北した後の未来を、ウェイバーは恐ろしく鮮明に想像できた。

もともと絶望的な事態であるため、思考はどん底の底辺を掘り進むように奈落へと沈んでいった。

「死にたくは、ない。けど……勝てるのか、僕は……」

このまま参加したとしても、最悪自分が必勝を確信したイスカンダルという大英雄と戦わなくてはならない。

もし負ければ監督役の聖堂教会の下へ逃げ込めばいい、などと楽観的には考えられない。敗者の逃走を見逃す物好きなど、そういないからだ。おそらく辿り着く前に殺されるだろう。

仮に冬木から逃げ出せても、誰とも知らないマスターに正体を知られている以上は、地の果てまでも追ってきて息の根を止められるかもしれない。

まさに征くも死、退くも死という状況――。

ウェイバーは意識を失う前に引導を渡すはずだった鶏たちを一瞥する。

そもそも、ウェイバーは自分を見下し、蔑む時計塔の連中を見返すために参加したのだ。まだ戦争は開始されていないが、参戦の証はすでに手にしている。

ここで逃げ出し、仮に逃げ延びたとして、どうするというのだろうか。逃げ切れた場合、少なくとも命だけは助かったという事実は残る。しかし、それだけだった。

魔術師として大成するという望み、己の真価を知らしめる好機、自分を他者に認めさせるという意志をもって、そのためにこの命懸けの殺し合いに参加すると決めたのだ。

言ってみればプライドを優先し、命をチップに博打を打ったのである。

ここで逃げ出せば、自分はただ単にケイネスの嫌がらせをして時計塔から逃げ出した、取るに足らない虫螻として認知されることだろう。

誰にも認められない不遇から行動を開始したウェイバーに取って、

それは意地でもできない選択だった。

だから選んだ。それは彼に残った最後の意地だった。ちっぽけな矜持であろう。そんなもので選択するのは馬鹿げた行為だろう。

そして、その行為は他者に認められぬことを許容できない、怯懦の末の選択でもある。

しかし、だからどうした。

生来ウェイバー・ベルベットの在り方は、後ではなく前を向く者であり、下ではなく上を目指す者であり、途中で道に迷おうとも、時には一旦退がろうとも、とにかく目指す場所へと進む者なのだから。

それは今も変わらない。ゆえに――

「だから……やるしかないじゃないか……」

ウェイバーはこの絶望的な状況において、戦う道を選択した。

陣の染料として用意した鶏たちに引導を渡し、その生き血が熱をもっている内に召喚用の魔方陣を描いてく。

手順も忘れておらず、大幅に疲弊した精神状況にも関わらず、確実に条件を満たしていく。

「閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。繰り返すつどに五度、ただ、満

たされる刻を破却する――」

詠唱を紡ぐ中、ウェイバーは不思議と自身の精神が落ち着いていくのに戸惑いを覚え、儀式に集中しつつも、なんとかその理由を類推してみた。

そして気付く。考えて見れば、触媒なしで召喚をするなど、己を信じて疑わないこのウェイバー・ベルベットの真価が問われるのと同義ではないか。

自覚した瞬間、武者震いがしたウェイバーは、知らず不敵な笑みを浮かべていた。

「――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ――」

つまり、これから召喚される英霊こそ、真なる自身のパートナーなのだ。そしてこうなった以上、彼が喚び出すのは征服王イスカンダルを凌駕する存在でなければならない。

――いや、それこそ最強のサーヴァントを招くつもりでやらなきゃならないんだっ！

期待と興奮と少しの不安が綯い交ぜになった感情で意識が高揚し、自然、呪文を詠唱する声に力が込められる。

そうしてようやく、ウェイバーの特質である、ひたむきに上を目指す意志の熱量が爆発した。

内面は儀式を行うために冷静を保ちつつ、燃え盛る情熱が意思と感覚を明敏にする。

「――汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よっ！！」

最後の呪文を詠唱し、魔方陣の中央で魔力が循環と寸断を繰り返し、エーテルの暴風が巻き起こる。陣の文様が赤く紅く朱く、夕陽のように、血のように、燦然と輝く。

「さぁ来いっ！　僕のサーヴァントっ！！」

陣の内側が外界と繋がった。英霊の座と呼ばれる時間と切り離された領域に。人の身で精霊と同格となり、人を超越した最強の霊長たちの集う場へ。

そして具現化する。聖杯が設けた七つの匣（クラス）に英霊がその存在の格を象られ、七騎の内の一騎として、マスターの相棒たるサーヴァントとして顕現した。

「――問おう。君が私のマスターか？」

ウェイバーの眼前には、赤い外套を纏う白髪赤眼の可憐な少女が静かに佇み、透き通るような玲瓏な声音で誰何の言葉をかけてきた。

序：召喚（後書き）

気付いた誤字などをちまちまと修正したりちょろっと加筆したりしました。

※以下前書きより移動。

ＴＳ魔改造エミヤンはちょっと強いです。「ぼくのかんがえたさいきょうエミヤン」的な感じに。

ただ、Ｆａｔｅ本編と同じく「サーヴァントはすごいけどマスターがヘボいから足手纏い込みでバランス取れてる」的な路線を目指したいなぁ、と。

ＺＥＲＯ原作の方でも実力的に征服王の力を十全に発揮させることができないウェイバー君、士郎よりショボいですネー、これぞチートなしの凡人キャラ。

一：契約

ウェイバー・ベルベットは放心していた。

彼が今いるのは、見た目の豪華さを安上がりな素材で演出し、恥じないレベルでまとめようとして、何とかそれを成功させたと言える内装の部屋にいた。

床、天井、壁紙の色調は白を基本としたモノトーン構成で、調度品に木製品を多用して暖かみも持たせている。

ただ、設置されている電気製品は清潔感はあれど、どうにも雰囲気を壊さないギリギリの値で揃えられた感が否めない。

そんな部屋の中央に位置する一見豪奢なキングサイズのベッドの上に、ウェイバーは湯上がりで暖まった身体に備え付けのバスローブを身に纏い、所在なげに腰を下ろしている。

全身は熱い湯のおかげでリラックスしていたが、わずかな緊張と思春期特有の後ろめたい興奮に支配されていた。

通常の宿泊施設ならば、ウェイバーもここまで無様な体を見せなかっただろう。

彼と一緒にチェックインした――無論、その時は霊体化してもらっていた――サーヴァントが女性、それも外見上は年頃の少女であり、思わず溜息を吐くような美貌を備えていたのも原因の一つである。

しかし、一番の原因は、

「なんで、ラブホテルなんだよぉーっ！！」

もはや現状のもどかしい空気に我慢ならぬと言わんばかりに、ウェイバーは泣きそうな――というか涙目であった――声音で咆吼をあげた。

不本意な仮宿となった部屋の中に響くその声の情けなさが、なんとも小動物のような印象を他者に与えることに、当人は全く気付いていなかったのはご愛敬であろう。

◇◆◇◆◇◆◇

深山町の雑木林の奥で、ウェイバーは触媒なしでサーヴァントの召喚に成功する。

詠唱によって次第に魔力の暴風が巻き起こる中、座との現世の境界軸を繋ぎ止め、己が求める至高の英霊の気配を掴み取り、招き引き寄せた感覚にかつてない確信を覚えた。

そして見事、人外の存在である英霊を召喚し、サーヴァントとして現界を成し遂げたのは、天才と日々自画自賛しているウェイバーの自信と自負をより強固なものとした。

この時点で、一時的とはいえ征服王の触媒を失った焦りと落胆も、なにもなさずに敗北し、死して脱落することへの恐怖も、かなり希薄なものとなっていた。

むしろ全身、爪先から頭の天辺まで歓喜と昂揚に満たされ、血の滾りを抑えるために身体に大きく震えが奔ったほどである。

しかし、陣の中央で現界を果たした超越存在たる己のサーヴァントの外観は、彼の予想を大きく裏切るものだった。

驚くべき事に、招かれた彼のサーヴァントは、小柄なウェイバーよりもなお華奢な矮躯を持つ可憐な少女だった。

月明かりに照らされる長い白銀の髪は青く輝き、紅玉を思わせる眸は折れることのない鋼鉄の意志に煌めいている。

容貌は可憐でありながらも毅然とした凛々しさを兼ね備え、醸し出す雰囲気が非人間的なまでの美貌に等身大の人間らしさを与えていた。

体格は美の女神に祝福されたかのような均整の取れた体躯、ただし凹凸は年の頃を思えば若干控えめなもので、さりとて寸胴ではなく女らしさを確かに描き、その身とすらりと長い四肢の五体を、紅い外套とその下に纏う黒衣に包み込んでいる。

ウェイバーとて魔術師の端くれであり、時計塔の降霊科に在籍していたため、英霊にまでなった古今東西で活躍した英雄豪傑の史料は多数目にすることができた。

一薙ぎで山を断ち割る壮烈無比の戦士、神話の魔獣をも単独で討ち滅ぼす生粋の勇者、百万の軍勢を統率した時代の覇者など、神話や伝承、史実に名を残す偉人たち。

彼らは死後、時間と次元の切り離された“座”と呼ばれる領域へと世界より召し上げられる。

その中には、男もいれば当然ながら女もいる。やはり大多数は男であるが、それでも女性の英霊というのも少ないわけではなく、おそらく三、四割の割合で座中には存在しているのではないだろうか。

それゆえ、女性の英霊がウェイバーの召喚に応じても、何ら不思議ではない。不思議ではないのだが――

「僕より背が低い……」

現れたのサーヴァントは、ウェイバーの予想を裏切って、彼よりも短躯で――と言っても３ｃｍ程度だったが――目元に幼さを残す可愛らしい少女だった。

この時、ウェイバーは事前に精神的に追い詰められ、それを四苦八苦しながら克己して召喚に臨んだため、まだまだ平静さを欠いていたのは否めない。

そもそも、ウェイバーが直前まで認識し、想像していた“使い魔”としてのサーヴァントと、眼前の存在はあまりにも懸け離れていた。

“使い魔”という魔術師に１００％依存した傀儡などとは一線を画した圧倒的な存在感。人間を逸脱した格を持つ甚大な魂の霊体が、膨大な魔力で虚像ではない肉体を形成する光景に、ただの魔術師に過ぎないウェイバーははっきりと気圧されていた。

そうした精神的衝撃に加え、実体化した己の究極至高のパートナーの容姿と、さらには類希な美貌に驚き目を奪われた末、つい茫漠とした思考の間隙が発生し、うっかり口を滑らせてしまったのだ。

身長にコンプレックスを持つウェイバーだからこそなのか、気圧

されつつも己がより高い身長差の事実に安心感をもったため、つい漏らしてしまった本音である。

もっとも、そんな彼の第一声は、対峙したばかりの主従の荘厳で緊迫した空気をしたたかに凍らせる威力を発揮することとなった。

「――――背が低いのは自覚している。しかしこちらの問いに答えないばかりか、開口一声にわざわざそれを指摘されるのは、あまり気分の良いものではないのだがね」

柔らかい輝きを称えていた双眸は細められ、視線と声は変わって刺すような凍てつく冷たさを放っていた。

ただでさえ圧倒されていたウェイバーは、それだけで危うく気絶するところだった。

例えそれが目の前の少女の中ではほんの少し睨み据えた程度の行為だっただけだとしても、魔術師でありながら常人と大差ない人格を有するウェイバーにとってそれは、文字通り魂消るほどの高圧のプレッシャーであった。

しかし、膝をガクガクと震わせつつも、なけなしの根性で意識を繋ぎ止め、非を認めて慌てて己が従者に謝罪する。

「ご、ごご、ごめごめんな、さい……僕も、あぅ……さっきからいろいろあって、混乱してて……その、不快なことを言っちゃって、悪かった……本当に、悪かったよ……」

頭を下げて重圧につっかえながらもただ謝るウェイバーの殊勝な

態度に当てられ、その魔術師らしからぬ光景に彼女は自身の大人げない言動を鑑みた結果、サーヴァントの方も己の非を認め自嘲したようだった。

紅い外套の少女は小さく息を吐くと、苦笑して軽く頭を下げ、ウェイバーの耳朶へと優しく届く、安心させ包み込むような声音で謝罪する。

「いや、私も子供みたいな真似をして悪かった。それで、君が私のマスターであっているのかな？」

「あぁ、僕が、いやワタシが、んんっ、君――でなく！　貴女のマスターっ！　ウェイバー・ベルベットだぁっ！」

すでにマスターとしての威厳など欠片も存在しないウェイバーであったが、たとえみっともなくとも精一杯に主張し、立場をはっきりさせなくてはならない。

聖杯戦争のルールに則り、主従関係ではこちらが主で、彼女が従。それは絶対不変でなければいけないのである。

なんとかそれをアピールするため、虚勢を張ってしまうのは仕方がなかった。

そんな若気の至りとしか思えない態度を貫こうと、気炎を上げる未熟なマスターに微笑ましいものを感じ、少女は誓いの言葉を口にした。

「諒解した。ならばここに契約を完了する。サーヴァントキャスター、真名をエミヤ・シロ。我が弓と剣、魔術をもって、マスターウ

エイバー・ベルベットに勝利を捧げることを、ここに誓おう」

錬鉄のごとき意志と覚悟の下、主従の間に誓約が結ばれ、こうして彼と彼女は七組目のマスターとサーヴァントとなった。

ウェイバーは歓喜と寒気にさらに身を震わせていると、サーヴァントはマスターに異常を発見した。

「む。マスター、手に怪我をしているな。少し失礼するぞ」

「え？　ぅわあっ！？」

思春期真っ盛りのウェイバーの両手を、キャスターの白魚のような繊手に包み込まれた。

――お、落ち着け、落ち着くんだ僕！　でも暖かい、それに柔らかいっ。

先ほどとは違う意味で、年頃の若者としては至極真っ当な反応により総身が昂揚して体温が高まり、動悸が激しくなる。

そんなウェイバーの状況など一切構うことなく、キャスターは己のみが用いる短い呪句を紡いだ。

「同調、開始（トレース・オン）」

それは高等な神言ではなく、魔術師が魔術を使用する際に用いる自己暗示の言葉。

詠唱に応じて発動したのは、ありふれた治癒魔術だった。時計塔でも平均的な位階持ちであれば使用できる、複雑さが微塵もない単純な術式の魔術。

しかし流石はキャスターのサーヴァントというべきか、時間を巻き戻すようにみるみる内にウェイバーの傷めた両手は癒えていき、すぐに元通りとなった。

そこでするりとキャスターの手が離れ、ウェイバーは慌てて手を握ったり広げたりして調子を確かめる。

「っあ、ありがとう」

「大したことではないし、当然のことをしたまでだ。私がしなくとも、すぐにマスターも治したのだろう？」

「あ、あぁ」

「どのみちマスターの魔力を使用することには変わりないのだから、気にしないでくれ」

それでも非才にして未熟な――本人は決して認めないだろうが――ウェイバーがするよりも遥かに高効率で魔力の消費を抑えられた

含蓄ある治癒魔術である。
　今のウェイバーには到底真似のできない洗練された高みの技量に、やや劣等感を持たないでもなかったが、人間と英霊を比較するのも馬鹿らしいという結論に達し、気にしないことにした。
　そんなことを考えていると、キャスターが夜空の月を見上げて提案してくる。

「さて、この寒空の下にいつまでも立ったままというわけにもいくまい。取り敢えずは、マスターの拠点に場所を移しはしないか？」

　ここでギクリとウェイバーの身体が震えた。ぱくぱくと口を開閉して焦ったように目を泳がせるなど、いかにも困り果てたような挙動不審な態度を露見させた。
　その様子から主の窮状を正確に推察し切れるものではなく、大凡の見当を付けつつも、キャスターはウェイバーに訊ねないわけにはいかなかった。

「マスター？」

「あ――ぅ――……そ、そのことなんだけど……」

　確認の意味を込めて呼ばれ、ウェイバーは言いにくそうにもごもごと、言葉を舌に乗せるのに容易ならざる努力を強いられる。
　キャスターは急かすでもなく、静かにマスターの発言を待つべく、右往左往するウェイバーと視線を合わせて待ち続けた。

「……ないんだ」

「――ふむ？」

「だから、僕には、今、拠点が、ないんだよぉーっ！」

か細い声の告白に間の抜けた声音を返され、羞恥と悔恨に満ちたやけくそ気味の絶叫が雑木林に木霊した。

本来ならば暗示によって寄生中である行きずりの民家を真っ先に挙げるのだが、現状が現状のためウェイバーはそこへ戻るという選択肢もなく、どうやって自身の窮状を召喚したばかりのサーヴァントに説明するべきか、まとまらない思考にすぐさまテンパってしまい、泣きそうな顔を真っ赤に染める。

キャスターはそうした葛藤を読み取るぐらいの人生経験は積んでおり、なかなか厄介な状況に陥って確保していた拠点が使えなくなっているのだと、信頼する直感に頼らずとも簡単に現況を推察することができた。

しかし、これから魔術師などという左道を往く外道たちが命を賭して行う血みどろの戦争に赴くに辺り、戦の規模に関わらずそれに参加する上で拠点がないというのは、いかにも不味い事態である。

なにより、先ほど物申したようにいつまでも寒風吹き荒ぶ深夜の外気に当たるのは、目の前の脆弱かつ未熟なマスターにとっては毒であろう。

暫しの気まずい静寂を挟むと、キャスターはウェイバーに建設的

な提案を献じる。

「ではまず宿を取ろう。私を召喚したせいで魔力もかなり失っているのだろうしな。今のマスターは心身共に疲れている。一先ず、人心地着けることが先決だ」

進言が終わると同時に、ウェイバーは小柄な体躯のサーヴァントの両腕に軽々しく持ち上げられる。

そして驚く間もなく、いわゆるお姫様抱っこで抱え上げられるや、魔術師のサーヴァントの主従は雑木林を後にした。

森から出ると彼を抱えるサーヴァントは、まるで周囲の地形や建造物の配置を元から熟知しているかのように、人々の死角から死角へと常軌を逸した速度で跳躍し続けて移動する。

その間の時を、ウェイバーはあまり憶えることができなかった。

周囲の景色が彼の動体視力以上の速度で目まぐるしく移り変わっていく上に、見た目が同年代の見目麗しい少女に密着して体温を共有する事実に、内心の動揺が許容限界値に達していたためである。

ウェイバーの印象に残っているのは、彼女の後を尻尾のごとく華麗に流れる三つ編みのお下げ髪のみだった。

キャスターの言う通り体力的にも魔力的にも、そして精神的にも限界に近かったウェイバーは気が付けば、少なくとも男女二人で利用するのが最も正しい用途である宿泊施設の入り口に辿り着いていた。

そのまま霊体化したキャスターの指示によって前払いで個室へ入り、冬の外気で疲労していた五体を熱い湯船に浸ける。

そこでまたも締まらない事態が発生した。

血行のよくなったウェイバーの未成熟な肉体は意識を巻き込んで次第に弛緩していき、そのままうっかりと微睡みの淵に傾き、力を抜いて転げ落ちてしまった。

あわや眠気に負けて湯船で溺死寸前という、聖杯戦争史上最も惨憺たる死を迎えそうになったところ、ラインを通じて主の生命の危機を感じ取ったサーヴァントに救い出される。

助けられたという事実には、ウェイバーとして感謝の感激の念が湧かずにはおれない。しかし、それと同時にキャスターのような少女に裸を見られるという事態に、年頃の少年の羞恥心は奈落の底へと落ち込み、召喚からこっち、サーヴァントを前に醜態を晒し続けた己のさらなる痴態に、まさに踏んだり蹴ったりの思いで意気消沈してしまった。

そしてひったくるようにして受け取ったタオルに身体の水気を吸わせると、用意されたバスローブを身に纏って足早に浴室からベッドに直行した。

そのまま横になることもできずに辺りを見回すと、内装の所々で自覚させる宿泊施設の正しい用途に気付かされ、そこからキャスターほどの可愛らしい少女とその一室にいるという事実に思考が直面し、やがてはその夜何度目かの絶叫をすることとなった。

マスターとしての威厳は、ウェイバーの矜持ごと木っ端微塵に砕け散っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「落ち着いたかね？」

「うん。どうにかね……」

心持ち言動が素直になったというか、幼児退行を起こしかけていたのは、羞恥で憤死寸前という状態を乗り越えたためか――。

あの絶叫の後、キャスターは文字通り泣き叫ぶウェイバーの羞恥心などお構いなしに彼を宥めると、甲斐甲斐しくもマイペースにあれこれ世話を焼き、まず食欲を満たすことを勧めてきた。

ウェイバーは注文したルームサービスと備え付けの冷蔵庫にあった飲み物、さらに召喚のために用意したあの鶏たちを調理したキャスターの料理をたらふく平らげ、幸せな満腹感に身をゆだねていた。

現金なもので、湯で暖まった肉体に、疲弊した分適量となったやや多めの食事は、ウェイバーの心身を覿面に癒してくれた。

何よりウェイバーの肉体、主に舌に感動を与えたのがキャスターの手料理だった。

いつの間にか用意していたが、魔術でも味付けに使用したのではないかと疑うほどにその鶏料理は美味であり、素材の新鮮さと持ち味を遺憾なく活かされている。

食後の幸福な心持ちにトドメの一撃を加えたのは、どこから調達したのかフルセットで準備され、ゴールデンルールに則って淹れら

れた紅茶の一杯。
　至れり尽くせりの従者の供応に、ウェイバーは情けなくも感涙してしまった。それを知るのは、当人ではなく彼の側にて仕える近習の少女が一人。

「はぁー……」

　すっかり落ち着き、いまだかつて飲んだことのない美味しい紅茶に口を付けて、ウェイバーは呆けたように人心地つく。
　そこまで来てようやく、己の喚び出したサーヴァントを子細に観察する余裕が遅まきながら生まれていた。
　キャスターは現在、ソファとテレビに挟まれたテーブルで、余った鶏料理を透明なタッパーに包んでいた。
　英霊がするにしては、なんとも庶民的で身近過ぎる光景に、ウェイバーは口を呆然と開けて黙ったまま、何から突っ込めば良いのか判らなかった。
　まるで五つ星ホテルのＶＩＰ専門セクションのサービスマンか、旧弊な名家に長年仕える熟練の執事か、その板に付いた従僕ぶりと、あれよあれよとどこで調理したのかウェイバーが引導を渡した鶏たちを主菜として有効活用する所帯じみた行動力など、あらゆる意味でウェイバーの予想の限界を突破していた。

　――こいつ、本当に英霊なんだろうか？

　などと、失礼極まりない疑問が鎌首をもたげたとしても、それはウェイバーの責任では断じてないだろう。そう主張する。

疑われた当人にこの思考がバレれば、コメツキバッタのように土下座をして謝ることになるのだろうとも。

顧みるまでもない情報であるが、ウェイバーの参戦する聖杯戦争では、参加する七人の魔術師――マスターが一人一騎、降霊の儀によって英霊の座から英霊を召喚する。

招かれし最高位のゴーストライナーたる英霊は使い魔として、マスターの使役する最強の武器の役割を担う。

そもそも人の身を超え、別次元の高みへ昇華された英霊たちは、魔術よりも上に位置する存在である。それを召喚して、己が使い魔として使役するなど、人の身に余る大それた行為である。

しかし、その難事を成し遂げるものこそ、聖杯戦争の勝利者が手にすると言われる願望機“聖杯”であった。

ただし、聖杯であろうとも英霊をそっくりそのまま現世に招き寄せることは不可能らしく、そのため英霊の総数七つ分の役割を設定した匣（クラス）を用意し、その器へ召喚に応じ、戦う事を承諾した英霊を納める。

クラスは様々な側面、多様な属性を持つ英霊の能力と方向性を現世に固定する鋳型であり、英霊はクラスに即し、応じた役割と制限を持つことで、史上最強最高位の使い魔――サーヴァントとなる。

英霊の一面をクラスによって限定させることで、役割から逸脱した固有の能力を減衰させ、クラスに合わないと判断される英霊のシンボル“宝具”の現世への持ち込みを制限されもする。

だが、その分世界の外である英霊の座より彼らを召喚することも、

マスターがサーヴァントの存在を維持することも、そして自身の駒として使役することも、より容易となる。
さらに矛盾を嫌う世界から現世に招かれし英霊たちの存在へ加えられる負荷干渉を最低限のものとしてくれる。

その聖杯の寄る辺を用いて起動する大規模術式――サーヴァントシステムによって予め用意されるクラスは、以下の七つ。

あらゆる性能が一定水準以上でなければ該当しない最優のクラス、“剣の騎士（セイバー）”。

槍手として最速の敏捷性とそれを活かす戦闘技能が求められるクラス、“槍の騎士（ランサー）”。

射撃・投擲能力に優れ、基本的な地力の低さをスキルと宝具で補うクラス、“弓の騎士（アーチャー）”。

何かに騎乗することで絶大な機動力・戦闘力を発揮するクラス、“騎乗兵（ライダー）”。

理性を奪い狂乱させることで性能を底上げするクラス、“狂戦士（バーサーカー）”。

潜入・暗殺技能に特化した歴代の山の翁を召喚するクラス、“暗殺者（アサシン）”。

そして、最後が魔力の扱いに長ける魔術師のクラス、“魔術師（キャスター）”。

クラスには厳密な優劣など存在しないとも言われるが、召喚した英霊に新たに与えられるクラス別スキルを考慮すれば、やはり多少どころではない明確なクラスの利と差が存在した。

聖杯より高い対魔力スキルを付与される基本にして外れのない三つのクラス。三騎士と称されるセイバー、ランサー、アーチャーの三騎。

三騎士の括りからは外れるが条件次第では三騎士と同格の対魔力スキルを与えられ、なおかつ強力な宝具を複数所有するライダー。

この四騎の対魔力スキルが曲者であり、魔術師のクラスであり魔術を主体とするキャスターとの相性は非常に悪い。

特にセイバーのクラスは概ねＡランクの対魔力スキルを保有するため、キャスターの天敵と言っていい。

そのため、キャスターのクラスは聖杯戦争において、『最弱のクラス』と呼ばれハズレクジ扱いされるほどである。

彼、ウェイバー・ベルベットが招き寄せたのは、その『最弱のクラス』として招かれたサーヴァントだった。

いかな魔術師の英霊であり、魔導の業をもってして歴史に名を遺すほどの偉業を成し遂げた存在であろうとも、聖杯戦争に勝ち残るのは厳しいと言わざるを得ない。

もっとも、それを補うのがキャスターのクラス特性たる陣地作成スキルだった。

このスキルで自分たちに有利なフィールドを築き上げ、そこに他のサーヴァントを誘き寄せることができれば、十二分に勝率はあるのであるが――。

ウェイバーはキャスターを召喚してすぐ意識に流れ込んできた情

報を呼び出す。
　脳裏に像を結ぶ己のサーヴァントのステータスは、キャスターというクラスとは思えないほどに高いものばかりだった。

クラス：キャスター
真名：エミヤ・シロ
属性：中立・善
マスター：ウェイバー・ベルベット

■ステータス■

【筋力】：Ｂ　【魔力】：Ａ
【耐久】：Ｃ　【幸運】：Ｃ
【敏捷】：Ｂ　【宝具】：―

　不本意ながら、ウェイバーは魔術師としては“血が浅い”と、当人も最大限の努力を払って認める厳然たる事実がある。
　魔力回路もおそらく他の参加者と較べて少ないだろうその事実は、そのまま彼の魔力貯蔵量の値も少ないという現実に直結する。
　当人としては技量にこそ自信を持つのではあるが――それもまた参加するマスターの中でも低いものだった――、以上の事実からキャスターのパラメータは十全とは言い難いだろう。
　それでも、である。

――身体能力値がこれだけ高いのって、どういうことなんだ？

耐久はともかく、特に筋力と敏捷の能力値はアベレージを超える上等なものだった。

目の前のサーヴァントは彼以上に細身で、その華奢な体躯にそれだけの力が秘められているのだとしたら、本当にキャスターのクラスなのか疑わしい。

そしてもし、ウェイバーが充分に魔力供給のできる身であったのならば、この三つのパラメータはそれぞれ1ランクずつアップするのではないだろうか？

そして気になるのがスキル欄である。

■クラス別スキル■

【陣地作成】：A－

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。小規模な”工房”の形成が可能。

生前は意識して自身の工房などは終ぞ持たなかったが、未経験ながら作る術は生前の知識と聖杯からの供給で可能となっている。

【道具作成】：B

魔術的な道具を作成する技能。多くの手間暇を惜しまなければ、■■魔術を用いなくとも宝具級の道具を再現することができる。

■保有スキル■

【直感】：B
戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。
視覚、聴覚に干渉する妨害を半減させる。

【魔力放出】：B
武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって、能力を向上させる。

【千里眼】：B
鷹の眼の異名を持つ視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上に加え、透視を可能とする。

【心眼（真）】：B
修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す“戦闘論理”
逆転の可能性がわずかでもあるのならば、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

【カリスマ】：D
軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。
カリスマは稀有な才能で、一軍のリーダーとしては破格の人望である。

【魔術】：B
オーソドックスな魔術の大半を取得。

やはりキャスターらしくないスキル構成だった。
キャスターのクラス別スキルはともかく、生前から備わっている固有スキルは到底魔術師のものではない。
いや、魔術のスキルはあるが、あくまでそれはBランク止まりであり、しかもスキル欄の最も下、重要度の低いスキルとして記載されているのである。
さらに同じくBランクである直感、魔力放出、千里眼、心眼（真）の四つのスキル。
千里眼を除けば、いずれも三騎士乃至バーサーカーに該当する英霊が持つような、直接的に白兵戦に用いられる戦闘系技能ばかりである。
また、千里眼のスキル自体はアーチャーのクラスに該当する射撃補助のものだろう。
無論、広域・長射程の魔術の補助にもなるであろうが、最も適しているのはアーチャーのクラスである。

これならば、まだ未見であるために記載されていない宝具欄の方も、明かされ後に一体どういうものが記載されるのであろうか。

宝具とは英霊それぞれがを生前に使用していた「伝説の武装」であり、あるいは築き上げた伝説を形にした「具象化された奇跡」そのものである。
完全に物質として形を持つものの他、概念として括られる能力として発現するものが存在する。
キャスターのスキル構成から、仮に伝説の名剣魔剣の類が登録されていても驚くには値しない。

ウェイバーは思考をフルに回転させつつ、眉間に皺を寄せてキャスターに視線を注ぐ。

キャスターのサーヴァント、エミヤ・シロ。

契約の誓いの場でクラスと真名を申告されはしたが、目の前のサーヴァントがどういった英霊なのはか、まだ全く知らない段階である。

少なくともウェイバーの知識ではそんな名前の英霊は存在しない。

キャスターだから年頃の少女でも不思議ではないという偏見から、キャスターの外見年齢に関しても納得はしていたが、外見に似合わぬステータス情報から、詳細な素性を知りたいという欲求は次第に強くなっていった。

先ほど頑是無い癇癪を起こし、宥められている内に心持ち互いに気を許したのか、キャスターはウェイバーのことを名前で呼ぶことを提案して来るなど、過程は些か不本意ながらも着実に信頼関係を築いていると、言えなくもない、はずだ。

今訊ねれば、きっとすぐにでも教えてくれるだろう。しかし、ウェイバーはキャスターが話すのを待っていた。

落ち着いたらちゃんと教えてくれると、赤面するほど駄々をこねた時に伝えられたためである。

思い出す度に顔中に血が集中して熱くなるその約束のため、ウェイバーは今のところ待つことしかできないでいる。

必然、手持ち無沙汰となって、家事をする英霊の図という、魔術師からすれば珍妙な光景を暫く見続けていた。

やがて疲れについに心身が白旗を上げたのか、ウェイバーは睡魔に敗北して柔らかいベッドに沈み込むこととなった。

◇◆◇◆◇◆◇

草木も眠る丑三つ時、今宵最も彼女に適した時間帯。
場所は人払いの魔術によって全ての人間が排された冬木市民会館。
そのホールにて、拡げられたシートの上に彼女の血を混ぜ込んだ特性の顔料で描かれるのは、サーヴァント召喚の陣だった。

すでに詠唱は最後の一節を残すのみ。陣の紋様が銀色に輝き、床面からホール全体を照らし出していた。
輝きによって露わとなる彼女の容姿は年の頃は二十歳過ぎか、切り揃えられた長い黒髪と黒曜石を思わせる深い色をした瞳が特徴的な、混血らしき日本人離れした、それでいて歴とした日本人を思わせる容貌の女性だった。

服装は黒一色のタートルネックのセーターにジーンズ、スニーカー。しかし防寒着は一転して白亜のファー付きレザーコートであり、被る帽子はダークグレイのハンチング。
深窓の令嬢を思わせる容姿に活動的な装いを纏い、表情には現在、期待と興奮の色がうっすらと浮かび上がっていた。

「――汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り

手よ――」

完成する詠唱。聖杯の配分によって、エーテル塊に充分な初期魔力が注ぎ込まれる。

大英雄級の霊格が実像を結ぶために陣の内では乱気流が巻き起こり、旋風がホール内を掻き回す。

その暴風の中心部へ、おそらくこの第四次聖杯戦争に参加するマスターの中で最大の貯蔵量を誇る女性の魔力、その大半を吸い上げられる。

招かれる英霊と喚び込んだ魔術師、彼らを繋ぐ不可視のレイラインを通じて、マスターの格に比例するサーヴァントの最大スペックが決定される。

クラス：ライダー
真名：イスカンダル
属性：中立・善
マスター：ベアトリス・クロフォード

■ステータス■

【筋力】：Ｂ　【魔力】：Ａ
【耐久】：Ａ　【幸運】：Ａ＋
【敏捷】：Ｃ　【宝具】：Ａ＋＋

「やったっ！」

彼女――ベアトリスは、前世の知識にある征服王イスカンダルよりも高いステータスに、思わず指を打ち鳴らしてさらには小さくガッツポーズを取る。

――そりゃそうよねっ！　同じ時計塔で学ぶ者とはいえ、ぶっちゃけあたしのが素養も下地も環境も時間も恵まれてるんだから、こうなるのは当然ってもんよ。

特に魔力値が2ランクアップしているのに嬉しい悲鳴を上げた。

これならば、元々の貯蔵量と今失った魔力の今後の回復率、さらに非常用として外部に日々溜め込み続けた魔力電池たる礼装を考慮すれば、イスカンダルの最強宝具は三度、いや四度は確実に使用できるだろう。

切り札の使用数の多さはそのまま戦争での有利さに繋がる。

それでも、遠坂邸にてすでに喚び出されたであろう黄金の英雄王相手には、彼女の知識通り真っ向勝負でぶつかっては、敗北を喫する可能性が究めて大きい。

しかし、敗因は判っている。事前にセイバーとかち合って“神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）”を失ったということ。

その上、マスターが三流魔術師たるウェイバー・ベルベットだったのだから、令呪を用いたブーストの重ね掛けがあったとしても、いわばハンデを背負った状態とも言える。

おそらく自分とこのライダーならば勝敗は五分五分、いやそれで

も四分六分だろうか？
事前に彼女の知識と裏付けを取るべく情報戦に徹せねばならないが、それが終わればあとは臨機応変に補佐することで、自分がこの王を勝たせてみせよう。
目指す道は困難で、危険と予想外に溢れた茨の道であろうとも、目の前の征服王の傍らにいれば乗り越えられるという自信が、どこからともなく身体の内に溢れて出てくる気がした。

と、ここまでのわずかな時間――具体的に言えば、ガッツポーズと悲鳴の後、思わず子宮が疼くほどに漢前なライダーと視線が交差し、誰何の言葉をかけられるまでのおよそ二秒半――でそこまで思考し、ついに、漢の中の漢の口から精力的な塩辛声で訊ねられた。

「問うぞ。貴様が余のマスターで相違ないか？」

「その通りです、征服王イスカンダル。あたしの名前はベアトリス・クロフォード。今世で貴方の妻となる女ですっ！！」

ベアトリスは満面の笑みで豊満な胸を張り、朗々と旗幟鮮明な言葉をもって、そう宣言した。
征服王たるイスカンダルをして、いきなりの破天荒な返答と自己紹介に、威風堂々と佇む赤毛の巨漢は一瞬目を見開いた。そして、次の瞬間に破顔した。

「ぐぁっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ！
魔術師なんぞという陰気な輩に召喚されて窮屈になるかと思って

おったが、お主のような女子がマスターで、その上余の妻になるとなっ！？　面白いのう。こりゃあ此度の戦も先が楽しみであるな。
うむ！　よかろう、気に入ったぞベアトリスよ。契約をここに完了する。さぁ、余とともにいざ征かん英雄豪傑の集いし戦場へっ！」

呵々大笑する征服王の胸に飛び込み、前世のミーハーな性格が全く衰えることなく人格形成されたベアトリス・クロフォードは、余計な言葉など一切選ばず、ただ胸から込み上げる気持ちをぶつけた。

「何処までも離れずお付き合いしますっ！！」

一：契約（後書き）

加筆修正してみました。毎話これぐらいの長さにするべく頑張りますー。

二：誓詞

未熟な少年、数日前まで素人同然だったその魔術使いの命は、もはや風前の灯火となっていた。

腹部から下の半身と右腕を肩から失い、今や彼の身は五体を成すことがない。

同年代に比較してやや低い身長に不釣り合いな大きさの褐色の左腕も、あり得ない方向に曲がりひしゃげ、元々の太さに見合った力強さはもはや微塵も感じさせず、ピクリとも動かなかった。

それだけでも彼の死を決定付けるに充分過ぎる負傷であったが、朽ちかけた肉体には更なる死の因由が湧き起こっていた。

その身に剣が生えていた。

外側より衝き刺したなどという“真っ当な致命傷”では当然なく、剣は彼の内側から皮膚を突き破って無数に生えており、部位によっては鱗のようにひしめいていた。

剣の鱗の群れは今もなお鋸で金属を削るような甲高い音を響かせて湧き続け、彼の残り少ない命を確実に削ってゆく。

そこへ、音に届くかという速度をもって、二人の少女が駆けつける。

一人は青いドレスに銀色に輝く鎧を身に纏う、金髪碧眼の少女騎士。

もう一人は騎士に抱き上げられた形で同行する、銀髪紅眼の幼い少女。

彼女ら二人は自分たちの知る彼の姿とあまりに懸け離れたその様に息を呑み、血の気を乱し慌て駆け寄った。

彼の傍らまで近づき、少女騎士の直感をして彼の死が、既に覆せない事実であるという状態を突きつけられ、騎士は力なく膝を崩した。

彼女の内に今あるのは、己の力不足に対する深い憎悪と悔恨、そして剣を捧げる主への思慕と恋情、それに比例する余りにも大きな喪失感。

砕ける心身を叱咤して、騎士は震える唇を開いて、詫びと己の咎の告白を言葉にのせる。

『シロウ……すみません……私はあなたを、守れ……なかった』

『――そうね。あなたはシロウを守れなかった。でも諦めるのは許さないわ』

少女騎士の言葉に返されるのは、彼の残った左腕を縋り付くように抱き締める幼い少女の、揺るぎない意志を秘めた静かな宣言だった。

少女は荘厳な装飾を施されたドレスが血の朱に染まるのも構わず、血よりも濃い瞳を煌めかせて視線が騎士を射貫く。

『ですがイリヤスフィール……すでに彼の命は……』

『いいえっ、間に合うわ！　まだ間に合うんだからっ！　絶対に、シロウを助けるんだからっ！！……――――ねえセイバー？　あなた、シロウのために身も心も、その魂も捧げる覚悟があるかしら？』

数多の戦場を駈け抜け、数多の敵を斬り伏せ続け、数多の敵味方に関わらずその様々な死の姿を見てきたセイバーと呼ばれた少女は、主の姿を眼にしてすでに諦観の境地に両の脚を踏み込んでいた。

しかし、イリヤスフィールと呼ばれた少女は、確乎たる自信を滲ませる凛とした声で問いかけるのだ。その眼が語るのだ。助ける方法があるのだと。

セイバーは逡巡も躊躇も、一切しなかった。

たとえそれが一縷の望みだとて、主を救う手立てがあるのならば、試さないという選択しなど取るわけがない。

それにセイバーはイリヤスフィールの言葉を、霊的第六感の閃きによって希望と信頼に足るものであると察知していた。

『愚問です。私はシロウの剣。そう誓いました。たとえこの度の戦で三度主が代わろうとも、それだけは変わりありません』

望まぬ主代えによって、シロウと呼ばれる少年――衛宮士郎から裏切りの魔女へ、さらに騎乗兵の主たる黒聖杯の少女に、そして狂戦士の主であった白聖杯の少女と、およそ半月程度の戦争で複数の主に仕えることを強制されはしたが、最初に誓い、剣を捧げたのは

あくまでも彼女の愛する士郎ただ一人である。
その忠節と寵愛は不変。必要ならばセイバーは己が存在の全てを以て、主の少年を救おう。

『うん。なら、なんとかなるわ。いえ、してみせる』

『……ではイリヤスフィール、あなたに全てを託します。如何様にでも私を使って下さい。だから必ず――』

『えぇ。必ず助けてみせるわよ。なんたって私は、シロウのお姉ちゃんなんだから』

イリヤスフィールという少女にとって士郎は当初、彼女から父を奪った憎き敵対者であった。
しかし、出会ってみて、話してみて、同じ一時を過ごす内に憎悪はするすると彼女の身内から霧散していった。
戦争に参加しているというのにその自覚のない大馬鹿者。敵であるはずの自分の心配をする底抜けのお人好し。義父の理想を受け継ぎ、そのために全身全霊を傾ける救えない愚者。

しかしその在り方全てが愛おしかった。
バーサーカー――彼女の守り手が敗北した時、颯爽、とまではいかなかったが、死に物狂いといった必死の体で駆けつけ、自身の命を省みずに護ってくれた男の子。彼女の弟にして、彼女を守護する騎士。
思えばそれからずっと、この戦争では士郎に守ってもらってばか

りだった。
だから、盛大にお返ししないと恩知らずだなんだとキリツグとお母様に叱られてしまうのではないか。それとも、これからすることを馬鹿なことはやめろと止めるだろうか。

しかし、聖杯となったイリヤスフィールの身体は、どのみちこの戦争が終わるまでを保証された先の窮めて短い命。
ならば、決着のついた今この時、愛する弟――男性を救うためにその身を捧げるのも悪くない使い道だろう。
それにこれより彼女たちが行うやり方ならば、それは死ではない。決して死ではないのだ。

『今のシロウは、あなたの鞘とアーチャーの腕で何とか保っている状態。私たちから鞘に供給される魔力も無限じゃないし、この剣群のせいでそれもどんどん消費していってる……終わりは近いわ。器である肉体がこれじゃあ、第二・第三要素まで欠損するのは本当に時間の問題――』

『――そこで、私とあなたの存在そのものを用いて、彼に新たな器を与えるのですね』

『アーチャーの腕の暴走もちゃんと抑えた上でね。こんな反則も、聖杯に溜まった魔力を令呪と“天のドレス”で使えば可能になる。でも出来るからって簡単なわけじゃないし、やっぱり奇跡って無茶は相応の等価交換から逃れられないの。
だから、私たちはこれから融け合って結果的にシロウの一部になるんだけど――どうする？　個我の喪失が怖いのならやっぱり止め

ておくかしら？』

イリヤスフィールは双眸を小悪魔的に吊り上げ、でセイバーに問いかける。

その悪戯心の含まれた視線に対し、揺るがぬ決意を胸に据え、セイバーはその本心を吐露した。

『いえ、私はもう間違った望みを抱かない。だから彼を救うために私が私でなくなることに、未練も迷いもありません。それに騎士として、主と一つになれるというのならば、それはいっそ本望というものでしょうしね』

内心、騎士と主の部分を女と男と置き換えていたが、イリヤスフィールはそれに対してからかうことをしなかった。

むしろ共感し、恋敵ながら天晴れと嬉しく思っていた。

『そう。ふふふ。お互い残された時間は少ないわ。ならせめて、最期はシロウに新たな命をあげちゃいましょう』

少女たちは頷き合った。これは死ではない。ただ、彼と同じ一つの存在となる。ただそれだけ。

セイバーは彼女を止めるべきだったのかもしれない。士郎の器となるのは己一人でいい、それより聖杯の魔力を使ってイリヤスフィールの寿命を延ばせないのか――。

しかし、血のように紅い瞳が語っていた。そこまで勝手はよくな

い、そんな都合の良い結果は得られない。
　不完全な英霊であるセイバーと、人間とホムンクルスの混血児。
彼女らのどちらか一人が欠けては、この試みは成功しないのだと。
　ならば、セイバーに出来るのはイリヤスフィールとともに、士郎の未来を創る一助となるだけである。

『シロウ、強く生きて下さい。そして叶うなら、どうか幸せに――』

『その辺りは凛がどうにかするでしょ。……すっごく嫌だけど、任せられるのはあいつしかいないし』

『おやおや、未練ですか？』

『ふんだっ。もういいでしょ、始めるわっ！』

　不機嫌そうに頬を膨らませるイリヤスフィールに苦笑し、セイバーは最初で最後の褥以来、現在の仮初めの主に譲っていた、愛しい本来の主と唇を合わせる。
　それに負けじとイリヤスフィールは幼い身体でセイバーを力いっぱいに押し退け、士郎の唇を独占する。
　妹のように慕う小さな少女の微笑ましい行動に、セイバーはかつて己が仕えた彼女の母親のような、慈愛に満ち溢れた笑みを浮かべた。
　同じ男性を愛し、同じ男性に抱かれ、そして今これより、同じ男性のために身を捧げる。恋敵でありながらも本当に憎めない、愛す

べき家族だった。

――アイリスフィール、あなたは私を許さないかもしれませんね。それでも構いません。ただ、あなたの娘はその身と引き替えに最愛の男性を救おうとしているのです。同じ女として、同じ道を進んだ先達として、イリヤスフィールの気持ちを解ってあげて下さい。

イリヤスフィールは満足したのか、士郎から唇を離し、視線でセイバーに問いかける。

その問いかけに首肯し、セイバーはイリヤスフィールの片手と自身の片手を合わせ、もう片方の掌は士郎の胸へ、剣の鱗の生え揃う部分へと這わせた。そこへイリヤスフィールの掌が重ねられる。

イリヤスフィールの身に纏う“天のドレス”が淡い燐光に包まれ、礼装から覗く彼女の肌には令呪そのものとなる魔術回路が浮かび上がり、紅く輝く。

融け合い、薄桃色となった光がイリヤスフィールだけでなくセイバーに広がり、衛宮士郎の残った半身をも包み込んだ。

『シロウ、いつかまた逢いましょう――』

『シロウ。私たちのこと、忘れないでね――』

光は眩い純白の輝きに変わって燦然と閃いて、彼らのいる空間を光で満たし尽くす。

そうして彼と彼女たち三人は、エミヤ・シロという一人の新たな

少女となった。

◇◆◇◆◇◆◇

ベッドの枕元に設置された暖色系の室内灯に照らされる一室で、主に寝床を譲ったキャスターは、現界した肉体の調子を精確に看ながら、瞼を閉じて生前の過去を振り返っていた。

魔術使い衛宮士郎が錬鉄の騎士エミヤ・シロとなってからその生涯を終えるまで、彼女は己の義姉と騎士によってもたらされた命を決して粗末に扱うことなく、されど平穏に身をゆだねることもできずに、ひたすらに戦い続けた。

その行為の原動力は、切嗣から受け継いだ正義の味方としての理想だけではない。

最愛の女性二人からもらった命を無駄にしたくはないと思ったのだ。そして、彼女らに恥じない生き方をしたかったのである。

愚直なまでのお人好しという在り方が、彼女たちの愛した衛宮士郎であると信じて――。

戦地に足を踏み入れる前に、生涯の朋友“赤いあくま”から「自

分を大切にできない者に他者を救えるはずがない」と忠告された。
エミヤ・シロは衛宮士郎のように己の命を無価値として、命の勘定から度外視することはできなかった。
それは彼のために彼女と一つとなった二人の想いに対する侮辱だった。
だからこそ、その言葉を真摯に受け止め、歪な理想ではなく、ただ救いたいという想いを胸に、朋友とともに戦場を駆け巡った。
騎士王から形見分けされた肉体の保有スキルのせいか、それとも二人の慈母のごとき愛情の賜物か、どこから集まったのか次第に同志が増え、彼女らを後援する理解者が幾人も出てきた。
そしていつしか、戦場の聖女として表の世界にまで名が知られるようになってしまった。

聖杯戦争でマスターだった頃に移植されたアーチャーの腕。そこから視た英霊エミヤの生涯とは大きく懸け離れた人生だろう。
肉体、容姿も借り物ならば、その魅力もカリスマ性も借り物であるエミヤ・シロ。
扱う魔術は模倣し、複製することに特化した贋作者。しかし同じエミヤでありながら、背負う命は常に三人分である。その重さを力に換えて、ひたすら前へと突き進んだ。
そうした彼女の生涯において、セイバーとイリヤスフィールへの罪悪感が消えることは結局はなかった。

だが、エミヤ・シロとして戦場をかけてから、終生彼女の裡に後悔はなかった。
決して己を許せないという罪悪感がある。それと同じく決して癒えぬ喪失感もある。“あの場”で意識があったのならば、迷わず自害を選ぶほどに大切な少女たち。
しかし、彼は彼女たちによって、新たな生命として生き残った。
だから後悔だけは決して抱かない。抱いてはならない。

彼女たち二人に救われた衛宮士郎にその資格はなく、それでもなお後悔するということは、彼に命を託した二人への冒涜でしかない。だから、エミヤ・シロは後悔だけはしない生き方を選んだのである。

やがて、アーチャーとなった英霊エミヤ同様に、エミヤ・シロも死後を対価に世界と契約した。

“抑止の守護者”として災害を殺戮をもって解決する掃除屋となることも承知の上だった。

セイバーとイリヤスフィールがいれば間違いなく止めただろう。だが、その時エミヤ・シロは目の前の誰かをどうしても救いたかったし、そのために必要ならば、死後の対価は惜しくなかった。

それに、彼女にはある思惑があった。その思惑が成功するかどうか、その先にある悲願が成就されるか否か、それは死後にしか判らない。

望みが叶う可能性は窮めて低かった。それでも、一縷の希望に委ねるしかなかった。

そうして、エミヤ・シロはその寿命が尽きるまで戦地で活動し続けた後、様々な者たちと笑顔を交わして看取られ、英霊の座へと昇った。

さんざん覚悟していた“抑止の守護者”としての役割は予想外にその機会は訪れなかった。

原因として考えられるのは、生前不覚にも容姿と名前がマスメディアによって世間に露出し、一般の幼子にまでその名が広まった影響で、それなりの認知度を得てしまったことであろうか。

結果、守護者の中でも比較的星寄りの位置に据えられてしまったらしく、掃除屋の任を務める役目から除外されたようである。

幸か不幸かは、エミヤ・シロには判じかねる情況であった。

ただ、英霊エミヤの立場を思うと、素直に喜べなかったが。彼の

分の仕事を幾らかでも肩代わりしたいという望みもあったのだ。

それからどれだけ時が経っただろう。なにせ英霊の座は時間軸から切り離された特異点である。主観時間など当てにならない。

それでもさほどの時を待たずに、彼女の望みが一つ叶った。

聖杯戦争にサーヴァントとして召喚されるという望みが。

もっとも、第五次聖杯戦争で“赤いあくま”辺りに召喚されるのが最も望ましい環境だったのであるが、こうして現世に喚び出されただけマシというものだろう。

そう、仮に第五次においてキャスターとして現界していたメディアのマスターなどに引き当てられていたらと思うと――。

「――――っ！！」

あまりにもな想像に、生理的嫌悪感で鳥肌が立ってしまった。

生涯守り続けた操を、あの裏切りの魔女をして最低と言わしめる下劣卑賤の輩に奪われるなど、考えるだにおぞましい可能性である。

しかしもしかしたら、己とは違うエミヤ・シロが第五次のキャスターとして召喚されたかという『ｉｆ』を思い、暗澹たる気持ちとなった。

絶対にあり得ないということは、絶対にないのである。彼女の今ある自我は有限だが、同時に座に存在する彼女は可能性世界とともに無限に等しいのだから。

キャスターは陰鬱な内氣を吐き出すように溜息を吐くと、自身を喚び出した疲労のせいで深い眠りに陥るウェイバーの寝顔を観察した。

――まぁ、このマスターにそんな欲求は無さそうで助かったな。

事実、年頃の少女の姿をしているとはいえ、サーヴァント相手に無理矢理に関係を迫ろうなどという性欲も根性も胆力もウェイバーは持ち合わせていなかったし、そんな動機に令呪を使うほど馬鹿でもなかった。

思えば、第五次キャスターのマスターとワカメを連想する髪型の元親友が品性下劣だったというだけであろうか。

愛し合い、合意の上とはいえ、セイバーと交わったキャスターは、我がことのように遍く並行世界の女性サーヴァントの貞操に憂い、淡い吐息を漏らした。

窓から外を眺めると、空が白み始めている。じきに日の出だった。

◇◆◇◆◇◆◇

冬木市一等の霊地の一つに構える遠坂邸の地下、蝋燭の灯りに照らされる仄暗いそこ魔術師の工房にいたのは二人の男性だった。

一人は遠坂家の現当主であり、始まりの御三家の一角として、今回の聖杯戦争に参加する遠坂時臣。

もう一人は、彼に師事し、現在は表向き決裂してはいたが、その実、裏ではしっかりと繋がりを維持して時臣の補佐をするべく暗躍する言峰綺礼の二人がいた。

時臣は揺るぎない信頼を向ける綺礼の口から、彼の父である言峰璃正から伝えられた、ある報せを聞いていた。

璃正は聖杯戦争の監督を務めるために聖堂教会より派遣された司祭であり、遠坂時臣に深く肩入れするという公平をむねとする監督役にあるまじき人物でもあった。

しかし、彼には彼の信じる道があり、当人が聖杯戦争の勝者に与えられる願望機を託せるのは時臣をおいて他にいないと考える以上、表向きには公平を謳いつつも遠坂陣営に荷担するのは自然な流れであった。

その彼の手元に預けられる魔導器――現界を果たしたサーヴァントの数とクラスを知らせる霊器盤は、ある変化を示していた。

「まったく、偶然というには些か出来過ぎだな。そうは思わないかね、綺礼」

「えぇ。まさか導師がアーチャーを召喚した昨夜の内に、残り全てのサーヴァントが一斉に喚び出されるとは……人の身ならぬ存在の稚気を感じずにはおれません」

人ならぬ存在を討伐する経験を幾度も経てきた殺戮者は、神の実在を一切信じていないかのような虚ろな瞳で諧謔を語る。

そこに信仰心が本当にあるのか疑いを持つ者は彼の身近にはおらず、言峰綺礼の本質を理解することもまたしない、できない。

当人ですら己の本質に理解が及んでいない現状、周囲の眼に映る

彼は不器用で物静かな、それでいて真摯な青年に過ぎなかった。

そうした綺礼の本質を見誤りつつも愛弟子として彼に信を寄せる者、正当な精神と一流の実力を兼ね備える生粋の魔術師である時臣は、その諧謔を好意的に汲み取る余裕をもって、今後の方針を語った。

「それもまた聖杯の意志によるものかもしれないな。もっとも、今回の聖杯戦争で最古の英雄王であるアーチャー以上のサーヴァントは流石にいないだろうがね」

優雅たれ、という家訓の実践を裏付けるのは絶大なまでの余裕であり、その余裕を保証するのは彼の喚び出た古代ウルクの王ギルガメッシュだった。

こと英霊というカテゴリーにおいて、他を懸絶した最高位の英雄こそが時臣の召喚したサーヴァントである。

さらに、時臣の魔術師としてのポテンシャルによって決定されたアーチャーのステータスも、聖杯戦争に参加した遠坂家の歴代マスターたちが記した記録に比して安定した高さを示していた。

これほどの戦力を得ておいて、自信を持たないマスターはそうはおるまい。そして歴代マスターの中で時臣ほど勝利のための布石を撒いた者もまたいないだろう。

油断も慢心もなく、ただ事実として勝利に手の届く距離まで詰めていたのは、紛れもない事実であった。

しかし、足下を疎かにする己の悪癖を彼はまだ知らなかった。

「さて、すでにサーヴァントが出揃った以上、此度の聖杯戦争は始

まったも同然。と、言いたいところだが、下賤の暗殺者（衛宮切嗣）はともかく、ロード・エルメロイが未だ冬木の地に足を踏み入れていない現状、残念なことに開戦はまだ先のようだ。
綺礼、そちらは何か変わったことはないかね？」

いかな魔術師とて、現代社会において海外渡航に際しては、表向きの手続きは取らねばならない。
そして極東の島国への外国人の入国に関しては、時臣と盟友である璃正が聖堂教会を使って眼を光らせている。
また、時臣の伝手で時計塔に潜入している者からも情報は入ってくる。
そうした事前の情報収集の結果、時計塔の花形魔術師であるケイネス・エルメロイ・アーチボルトの来日は元より、ロンドンの地より出発したという報せもいまだ届いていなかった。

対して衛宮切嗣も今や魔道の名家たるアインツベルンに連なる者となりながらも、そこに加わるまでの経歴が経歴だけに、正々堂々たる入国を期待するのは薄い望みであろう。
裏の業界では魔術に関係のない方面でも悪名が轟くほどの人物なのだ。それこそ密入国ぐらい容易に行い、すでに市内に潜伏している可能性もある。
国外と入国に関係する関連施設へは時臣と璃正の人脈で事足りる。その網に掛かってくれればよいのだが、やはり大した期待はできなかった。

だが、網に掛かるにしろ掛からないにしろ、問題はない。
なにせ戦争の舞台である冬木市内においては、

「全てのアサシンを放っておりますが、今のところは何も」

彼が監視の網を一手に担っていた。正確には、彼のサーヴァントが、である。

時臣の指示によって綺礼が早期に召喚したサーヴァントは、気配遮断スキルという、こと潜入・諜報において脅威的な真価を発揮するアサシンのクラスであった。

そして彼が召喚したアサシンこそ、紛れもなく間諜として望みうる最高の能力をもっていた。

それこそがアサシンの宝具“妄想幻像（ザバーニーヤ）”である。最大八十人にまで自己の存在を物理的に分裂させるこの特殊能力は、戦闘力という面では他六騎のサーヴァントに大きく劣る。しかし、それを補ってあまりある物量を具えていた。

「ふむ。ならば今しばらくの間は待ちに徹するとしよう。そしてロード・エルメロイの来日後、一日の時をおいて聖杯戦争の幕開けとする」

「心得ました」

◇◆◇◆◇◆◇

意識は唐突に覚醒した。普段は低血圧で寝覚めが非常に進まないウェイバーは、この日に限っては未だ冷めやらぬ興奮が身体に残っているのか、慣れないベッドの柔らかさと清潔なシーツを恋しいと思いつつも上体を起こした。

自分がいつの間にか眠ってしまったというのはどうでもよかった。冷静に、冷徹に、時には冷酷な魔術師として、ウェイバーは現状を正しく認識するべく努めた。

ここ二日、いやすでに三日になる内に癖となった、右手の甲を確認する作業。

翼を拡げる紋章のような意匠の令呪を穴が空くほどじぃっと眺め、次の瞬間にへらとだらしのない笑みを浮かべる。

「おはよう、ウェイバー。よく眠れたか？」

「うわあぁっ！！？」

軽い悦に浸っていると、突然横から声が届く。起き抜けの彼にとってはあまりに効果的な不意打ちだったらしく、ウェイバーは不覚にも度肝を抜かれて飛び上がり、大声で悲鳴を上げてしまった。

その驚きの様子を気にもせず、キャスターは白磁の水差しから揃いのカップへ白湯を注ぎ、音もなくソーサーを主の手元へ差し出してくる。

「まずはこれを飲みたまえ。私は朝食の用意をする。風呂を沸かし直しているので、その間に入って寝汗を流してくるといい」

ウェイバーは醜態に関して無かったこととしてくれたサーヴァントに感謝をしていいのか、自身を驚かせた張本人に怒るべきなのかを百面相のごとく表情を変えて悩みながら、結局は素直に従うことを選択した。

内臓に優しい適温の白湯を一気に飲み干すと、言われた通りに朝風呂に浸かる。

湯上がりの彼を待っていた朝食は、昨夜の鶏肉の余りを用いたチキンサンドとコーンスープ、目玉焼きにサラダ、そしてコーヒーが用意されていた。

食欲を刺激する香ばしい薫りを差し引けば、寄生していたマッケンジー宅で食べていた朝食で目にするメニューと概ね同じ。

舌が肥えるどころか、口が傲るほどに美味な食事を堪能しながら、ウェイバーはもはやマッケンジー夫妻と一緒に過ごす食事のない事実に、一抹の淋しさを感じないではなかった。

ことある事に口やかましく構ってくる夫妻に魔術師としての彼は辟易していたが、年頃の少年として考えて見ると、孫への愛情が溢れる二人の好意は新鮮で、暗示によって騙していたとはいえ、マッケンジー宅で過ごした時間は嬉しさを感じるものであった。

だからこそ、マッケンジー宅から離れる必要が生じた現状は、好い機会であったのかもしれない。

考えてみれば、全く関係のない老夫婦の家を潜伏するというのは、これから非情な戦争に参加する者として、あまりにも杜撰で無責任に過ぎる行為だろう。

もし拠点として襲撃を受ければ、魔術師とは全く関係のないマッ

ケンジー夫妻に累が及ぶ可能性は極めて大きかった。

たとえ実質的に魔術の世界と係わりがないといっても、自分があそこで寝起きをしていた以上、何らかの疑いを持つのは自然な考えである。

幾ら真実が全くの無関係とはいえ、拠点を狙うような輩の前に夫妻の身の安全が保証されるだろうか？　答えは、残念ながら否であろう。

その無関係であるという事実を証明する手間を、わざわざ殺し合いに参加する魔術師が行うであろうか。

殺した方が手っ取り早く、何より後腐れもない。それが非情な現実だった。

無益な殺生を極力控える理性的なマスターならば話は別だろうが、敵陣営の人格や理性、温情を期待するなど全くもって馬鹿げた考えでしかない。

――後で荷物を回収するついでに、あの二人から僕のことをきっちり忘れさせないと……。

さっさと引き払ったとなれば、触媒を盗んだ輩もわざわざ二人に手を出すまい。

そう願いつつも、あの優しい老夫婦を軽率にも巻き込んだことに対する拭えきれない罪悪感に顔を顰める。

ウェイバーは胸中に篭もる湿った空気を振り切るように、サンドイッチに手を伸ばした。

そうした表情と所作に表れる主の感情をつぶさに見届るキャスターは、その対象が不明ながらも概ねウェイバーの思考を正確に見抜いていた。

そして思う。甘いと。

これから七騎のサーヴァントが覇を競い殺し合う戦争に赴くにあたり、目の前の少年の精神は甘いとしか言いようがない。

魔術師である以上、冷徹になることは及第点レベルでこなせるだろうが、冷酷さを求められる場面でその感情――機械のように理性と利己の思考の下に行動する事態では期待を抱けないだろう。

その冷徹に関しても、一度情を寄せた誰かを切り捨てることは、裏切られるか完全に敵対でもしない限りおそらくできまい。

また難儀なマスターに招かれたものだ。と、率直な意見として思ったのがこれだった。

得手とする解析の魔術を用いずとも、キャスターのサーヴァントとして現界した彼女には、他のサーヴァントより詳細に自身のパラメーターを鑑みることができる。

おそらく生前に彼女の隣で戦場を駆けた“赤いあくま”がマスターならば、パラメーターの基礎能力値が1ランクずつアップし、魔力もA＋とまではいかなくとも、Aの平均値から最高値となっていたのではないか。

魔術師として見たウェイバー・ベルベットの能力は、生前の彼女が彼であった頃、未熟なマスターであった時分の実力に毛の生えたようなものである。

それでも比較すればウェイバーの方が総合的に勝るのであろうが、あまり鍛えられていない体つきを見れば一目瞭然。魔道の世界で生きてきた学徒である彼に戦闘能力は無いに等しいと断じる他ない。

聖杯戦争は各陣営の総力戦である。そしてサーヴァントはその最強戦力。

しかし、サーヴァントは己と契約し、現世の依代となるマスターが生きていてこそ、世界に現界し続けられるのである。

ならばマスターの殺害こそが、最も効率的な勝利手段となるのは必然の流れであり、自明の理。マスターへサーヴァントを差し向けるのが一番である。

そしてどのマスターもサーヴァントより自身が最優先で狙われるのは百も承知しているため、サーヴァントに対してはサーヴァントをもってこれを迎撃するだろう。

結果として戦闘はサーヴァント対サーヴァント、マスター対マスターという様相を呈することとなる。

それを踏まえて、戦力として見たウェイバーの力は魔術師としての実力同様、毫ほどもないという事実。この情況から、後の戦局は攻守ともに厳しいと言わざるを得ない。

そもそも、サーヴァントは一騎のみであり、マスターは一人であっても、主従に組する戦力は幾らでも準備ができるのである。

さらに聖杯戦争は勝ち抜き戦。各陣営は最終的に自陣営以外の全てを駆逐する必要がある。

しかし、潰し合いの過程で他陣営と共闘することもあり得るし、最悪一組を他六組で粉砕する状況もあり得ない事態ではない。

仮に厳格且つ公正なルールを設けて一対一乃至二対二の状況を作り出せても、マスターの実力はおそらくこの戦争でも最弱レベル。逆に完全な公正さは仇にしかならない。

そしてルール無用の戦争においては、弱いというだけで真っ先に潰され、淘汰されるのが戦場の掟であり常であった。

おそらく、最初に淘汰するべく狙われるのはウェイバーとキャス

ターだろう。それこそ、自分たち以外の陣営全てを同時に相手取るという最悪の事態も想定する必要があった。

以上が、彼――ウェイバー・ベルベットをマスターとする上で否定できない厳然たるデメリットである。

それを踏まえて出したキャスターの結論は――だからどうした。というものだった。

なるほど、能力として評価すれば、ウェイバーは悲惨なまでに未熟である。

仮にキャスターの知らない切り札を用意しているという可能性もないではないが、それにしては彼女を召喚してからの浮つき具合が半端どころのものではなく、いっそ情緒不安定といっても過言ではない態度を取っていた。

さらに拠点のない現状から、この戦いに向けての準備についても、さほど期待はできそうにないだろうと推量していた。

無論、召喚されたばかりであるし、昨夜のウェイバーの精神状況が特別おかしかったという線もある。

しかし、キャスターは長年かけて培った観察眼から、ウェイバーの人柄を概ねすでに掴んでいた。

魔術師でありながら感情に左右されすぎて、すぐに内面の思考を言動に表す。

それはある意味で素直――偽ることを不得手とした、魔術師としてあるまじき馬鹿正直さであるということで、見た目通りの未熟さと経験不足を隠す器量も狡猾さもない。

さらにプライドは高いがそれに実が伴っていないという自覚にも乏しく、命懸けの戦争に参加するというのに、その態度から殺し殺される戦場で命の遣り取りをする覚悟も、やや薄いと言わざるを得ない。

口に出してあげつらえば、ウェイバーの針金のように細い精神がゲシュタルト崩壊するほどの酷評をするが、欠点など人間探せば幾らでも出てくるものである。それはキャスターとて例外ではない。

そしてキャスターことエミヤ・シロは相手の欠点より美点を、短所より長所に重きをおく。

彼女は生前の生涯で積み重ねた経験から、生粋の魔術師という人種を嫌悪していた。

惻隠の情に乏しいあまりに利己的な彼ら特有の思考は、いかに“赤いあくま”やその“終生のライバル”が変わり種であったか、貴重にして尊敬に足るものであることかを、嫌と言うほど思い知らせてくれた。

そうした意味で、ウェイバーは彼女が知る魔術師の中でも負ではなく正の評価を得る精神の持ち主であろう。

確かに未熟である。自意識過剰でもある。マスターとしても足枷以外の何物でもない。

しかし、重要性の低いと思われるであろう誰かの安否を気遣う、その人間性は好感が持てた。

無論、キャスターの庇護の下、人心地着いたという余裕が無ければ起こらなかった情動かもしれない。

それでも、おそらくこの脆弱なマスターならば、その誰かが危機に直面した時、どのような場面においても駆けつけるのではないか。

たとえ、決して間に合わないと理解していても、罠が張り巡らされていたとしても。

そうした危うい無謀さも彼の中に見て取っており、延いては憎めない潔癖さとして彼女の眼には映る。

良くも悪くも若いのである。ウェイバー・ベルベットという人間は。

なにやら彼女のマスターとして、成熟した魔術師たらんと格好を付けたがっていたようだが、いまだ染まりきっていない精神性は隠し通せてない。

キャスターはその漠たる心の在り方そのものに、ともに戦う上で信頼に足ると思わせる輝きを見出していた。

長所となり得ぬ短所はなく、短所となり得ぬ長所もなし。

結果としてウェイバーとキャスター双方にとって幸運なことに、ウェイバーの欠点こそキャスターに改めてサーヴァントとしての誓いを立てさせる要因となったのである。

――まったく、いつの間にか彼個人に肩入れしたくなってきたではないか。

未熟大いに結構。むしろこれから幾らでも成長できるということである。

元は非才凡人の窮みから多事多難の曲折を経て、結果的に英霊とまでなったキャスターも多少なりとも導くつもりだ。

それに足りない戦力は他で補えばいい。余所から調達してもいいし、おあつらえ向けにキャスターのクラスで現界している以上、スキルを駆使しない手はない。

そうとなれば、開戦まで忙しくなりそうだ。創る者としての腕が鳴るというもの。手間など惜しんでいられない。

全ては、このマスターを生き残らせるために。

どのような縁によって己を喚び出したのかは皆目見当も付かないが、目の前のマスターをこんな欲望に塗れた殺し合いで死なせたいなどと、キャスターである前にエミヤ・シロとして到底思えるはずがなかった。

唐突にキャスターは、ふと脳裏を過ぎる既視感めいた閃きに思惟を向けた。

彼女とともに聖杯戦争で戦ったセイバーも、当時の衛宮士郎にこんな気持ちを抱いたのではないか、と。

なにせ“赤いあくま”にさんざん言われた通り、当時の己は誰が見てもへっぽこ魔術師であったのだから。

そんな士郎に、あの潔癖で高邁な騎士はよく、本当によく尽くしてくれた。

まさしく衛宮士郎には過ぎたサーヴァントであった。

皮肉にもこの身はあの時のセイバー同様、未熟なマスターのサーヴァントとして弱体化した状態で現界している。

これは試されているのだろうか？　何に試されているのかはおいておくとして。

もっとも、セイバーの肉体と因子を受け継いだエミヤ・シロが取るべき方針は決まっている。

――セイバー。俺も君みたいに、一人の騎士として主に忠義を尽くしてみるよ。

摩耗と劣化を免れた記憶の中の騎士王の面影を脳裏に浮かべ、キャスターエミヤ・シロは心の裡でウェイバー・ベルベットに彼のサーヴァントとして、改めて忠誠を誓った。

二：誓詞（後書き）

お待ちの方々申し訳ありません、ようやく二話を投稿させて頂きました。
一度完成したのですが「展開急すぎね？」と思って一旦削除しまして、それから書いては気に入らなくて書き直したりを繰り返していたらこれだけ牛歩に……一応原作一巻分までは台本形式で書き上げているというのにぃ。
それでもマシというだけで満足の域には至っていないというオチ。
ゼロ二話のウェイバーで癒されなければっ！！

※感想の方でご指摘された誤字脱字と、自分としても「ちょと言葉足りないなぁ」と思ってた部分を修正させて頂きました。稚拙な文章と構成ですみませぬ……汗顔のいたりであります。

三：抱負

——魔術師。

一般の人間がそういった名称を聞いてまず最初に思い浮かべるのは、杖を持って呪文を唱え、火や雷を発したり水や風を操ったり、はたまた箒に乗って空を飛翔する、フードで顔を隠したローブ姿を思い浮かべるのではないだろうか。もしくは舞台で観客を魅了する奇術師か。

昨今のサブカルチャー業界にのめり込む若人や趣味人ならば、また違った現代風のイメージを思い浮かべるであろう。それでなくとも、世界中で出版される某有名児童文学のおかげで、国家・人種・階級・年齢にある程度差別されず——無論、貧富の層の差で別されるだろうが——容易に想像することができるはずである。

ゆえに実在する魔術師というものを偶然知ることができた者や、または魔術師の家系に類する血筋の者として生を受けた人間の場合、概ねそうした固定観念的な魔術師像を真っ先に思い浮かべるのは無理のない話だろう。

もっとも、この世界の本物の魔術師という種類の人間たちにとっては、そうした“いかにも”な事象を起こすのは飽くまで手段、延いては手慰みの余芸に過ぎない。

彼らの最終的な目的とは、『根源』と呼称されるものに辿り着く

ことである。

“根源”とは、この世界の外側、次元論の頂点にあるとされる究極の”力”、万物の発端にして終焉、一にして全、そこは悠久の過去から遥か未来まであらゆる記憶を内在し、意のままに今ある全てを破却して新たに一から作り出せるという、神ごとき力威が存在する座標である。

『根源』という呼び方から、その意味するところは想像するに難くない。ただし、字義以上に途方もないスケールでその意味は機能する。

すなわち『根源』とは、世界の始まりの源泉であり、根のごとく全ての事象の出発点であり、つまりは初めに始まる一の場所。

そこには力があるとされる。そこには知識があるとされる。そこには何も無くて、全てがあるとされる。

その形而上の座標を目指す者たちを魔術師という。魔術師という名称も、『根源』へ辿り着くための最も近い道筋――「神秘」が「魔術」と呼ばれるために、それを扱い、探求する者として付けられた呼称に過ぎない。

もっとも、神秘を扱う彼らの中には、その呼び名に絶対的な価値と矜持をもつ者も少なくはない。

ウェイバー・ベルベットは魔術師である。魔術師と呼ばれる人種の例外に洩れず、『根源』を目指す学術の徒だった。

母や祖母はそうした魔術師の目標へ真に興味を抱かなかったが、彼はベルベットの家で初めて魔術師たらんとした人間である。

しかし、そもそも魔術におけるベルベットの始祖である祖母からして、愛人関係であった魔術師から多少学んだ程度であり、ウェイバーに魔術を伝えた母も祖母との思い出を受け継がせるという意図以上の熱意と意欲をもっていなかった。

それゆえ、スタート地点からしてウェイバーは苦労を強いられることとなる。乏しい魔術回路、それに比例する魔力保有量、浅い歴史ゆえにあまり蓄積されていない刻印、家格も資産もないない尽くしである。

それでも時計塔に招聘された時は己の才能を認められたと欣喜雀躍としたものだった。もっとも、当初のその感慨も、時計塔入りしてすぐに裏切られることとなったのだが。

ウェイバーを待っていたのは、血統・家格至上主義という、隔絶した閉鎖社会における前時代的な既成概念、文字通り、歴史という重みそのものだった。

数年経っても改善されることのない冷遇の日々。周囲から当てられる劣等生の烙印。

ただでさえ魑魅魍魎が跋扈する魔窟においてこれでは、ウェイバーが先を目指すことの妨げにしかならなかった。

その後、幾つかの恨み節を沸き上がらせる出来事を味わい、一方的に仇敵と定めた元講師と戦うためにウェイバーは聖杯戦争に参加した。

常軌を往く魔術師としては、急がば回れとばかりにかなりの遠回りをしてしまっているが、自身の真価を不当に貶めた全ての者たちへ知らしめるためには必要なことだったのだ。

自分を信じ続ける彼が求めるのは、己の手に掴み取る勝利のみ。

聖杯というトロフィーもそれなりに魅力的ではあったが、誰よりも魔術師たらんと息巻く彼はあくまで己の力で『根源』を目指すのが至上目標である。

そんなウェイバーに、全ての魔術師の悲願にして通過点とされる願望機など、当然ながら必要ない無用の長物だった。

であるからこそ、食後のコーヒーの後にささめかれるキャスターの、

「私のことを話す前に聞き忘れていたことに答えてもらいたいのだが――。

ウェイバー、君は聖杯を手にして何を求める？　何を願ってこの戦争に参加するんだ？」

という問いに対して、

「……別に聖杯になんて興味ないよ。僕が望むのは、ひとえに正当な評価だけだ。終ぞ僕の才能を認めなかった時計塔の連中にっ、考えを改めさせることだっ！！」

言葉を連ねることに悔しさが沸々と募り声高になるがまま、ウェイバー・ベルベットは聖杯戦争に参加する動機を己がサーヴァントに威勢をのせて語った。

そして語り終えてから、キャスターがどういった反応をするか、ウェイバーは不安げな面持ちで返答を告げた相手の顔を凝視する。

馬鹿にされるだろうか？　呆れられるだろうか？　下らないと一笑にふされるだろうか？

それとも、ただ沽券を示すだけといった目的を抱いて戦いに臨む己を嘲笑うだろうか？

目の前の少女の姿をした存在は、少なくとも魔術師の英霊として

召喚されるほどの超人の域に達している。
服装から神代の人物でないのは間違いないのであろうが、それでも時代を経るごとに神秘の劣化した現代の魔術師であるウェイバーからしてみれば、雲の上のような人物である。
そのような過去の偉人にとって自身の望みは、やはり取るに足らない小人の拘泥に映るのではないか。

しかしそうした被害妄想じみた彼の予想とは裏腹に、キャスターの表情に顕れたのは、その類希な妍を際立たせるあどけない微笑みだった。
ウェイバーは思わず喉を鳴らし、頬が紅潮するのを自覚した。

「それはまた難儀な雄図を明かしてくれたものだ。君はつくづく私の期待を裏切ってくれる。ああ、良い意味でだよ？――（一面においては凛に少し似ているな……）――そして聖杯自体はいらない、か」

「……あ……ぁ、ああっ。だから聖杯は、キャスターの好きにしてくれて、いいぞ？　僕のことは、気にしなくていいからさっ！」

動揺を抑えようとしても若さと経験不足がそれを邪魔するのか、ウェイバーはしどろもどろになりながらも押し切り、従者を篤く遇するマスターの気っ風の良さをキャスターに示した。
それを粛然と受け取ると、瞳の奥に荘重な光を灯し、キャスターは視線に献辞の意を乗せてウェイバーを見つめた。
そして、口角の片側が気持ちやや上に吊り上がる。可憐で小悪魔的な笑みだった。

「それは助かる。――まぁ、私の野暮用を少し叶えた後、最終的に冬木の聖杯は完全に破壊するつもりだったんだが。正直、マスターをどう説得するかが事前の悩みどころでね。まったく、気前の良いマスターをもって私は果報者だよ」

「な、ななな、なんだってぇぇえええええええええええええっっっ！！！？」

その叫び声のあまりの大きさに、客層柄、防音設備が過度に整った宿泊・休憩施設であったことを、主従ともに感謝するバカでかい大音声だった。

それほどの驚愕。その威力たるや、口にコーヒーを含んでいれば、対面に坐すキャスターの上半身へと霧状のコーヒーシャワーを浴びせたであろうほどである。

「お、おおお前正気なのかっ！？　聖杯だぞっ！　願望機なんだぞっ！？　魔術師だったら根源へ到達するために使うだろフツーっ！！？」

聖杯とは一種の奇跡である。それはあらゆる望みを叶える無限にして無色の力の塊。手に入れた者の願いの方向性を完璧に実現する万能の神の器。すなわち願望機呼び慣わす。

それを用いればあらゆる魔術師たちの悲願、『根源』への到達すら可能とされている。

しかし、キャスターの言い方から、彼女の願いは『根源』への到達ではないのだろう。確かに叶えたい望みにさえ使ってしまえば、あとは用済みというのも理解できないではないが、それでもあっさりと破壊――それも瞳に宿る決意が、完膚無きまでに絶対的な破壊をすると物を言っていた――すると言われれば、魔術師としてその利用価値を知るウェイバーは詰問せざるを得なかった。

そうしたウェイバーの慌てた態度をキャスターは涼しげに受け流すと、テーブルの上へとその繊手を向けた。

「正気であり、紛う事なく本気だ。ふむ――――時にウェイバー。君は聖杯がどこから来るのか知っているのかね？」

問いを投げかけると同時に、テーブルの上へ瞬きする間に物体が幾つか顕現する。

現れたのは、大理石より作り出されたチェス盤であり、横には大ぶりの黒檀の鉢が、盤の上には真鍮製の七つの駒がそれぞれ中央を向く形で円を描いて並べられていた。まるで己以外の全てが敵であるかのように。

大剣を構える騎士の駒。槍を掲げる槍兵の駒。矢を番える弓兵の駒。手綱を握る騎乗兵の駒。杖と魔導書を持つ魔術師の駒。曲刀を提げる暗殺者の駒。獣に変貌した狂戦士の駒。

七つの駒の意匠は、聖杯戦争に召喚されるサーヴァントのクラスを示していた。

ウェイバーは夕べより見続けたキャスターが虚空から具現化する器物について、生前の持ち物を肉体や衣服と同様に実体化させているのだと解釈していた。

しかし、サーヴァントとして召喚されたとはいえ、英霊であるキ

ャスターが生前に聖杯戦争に対応した物品を所持していたとは考えづらい。
それとも、キャスターはここ二百年以内の英霊であろうか？　そして初期の聖杯戦争に関わっていたとなれば、こうした駒を持っていても不思議ではないが――。
と、脱線しかけた思考を何とか軌道修正させ、ウェイバーはキャスターの問いを反芻した。

――聖杯が、“どこから”来るのか？

聖杯。元来その言葉が指す物は、神話の伝承や教会の教義、はたまた英雄譚や御伽噺でしか眼にすることがない奇跡の一つだった。
聖杯と銘打っているが、冬木の地に顕れる聖杯は、聖堂教会が聖遺物として認定するモノとは根本的に違い、その正体は手に入れた者のあらゆる望みを叶えし万能の釜とされる。
ウェイバーは時計塔で閲覧した資料の知識を紐解き、聖杯戦争の公開されている情報を記憶の淵より引っ張り出した。

そもそも、冬木の聖杯戦争とは聖杯降霊の儀式であり、二百年前にアインツベルン、マキリ、遠坂の三家が各々の素材・知識・秘術・領地を提供し合い、魔法使いの手を借りてようやく完成させた大規模な魔術システムである。
それゆえにこと聖杯戦争において、この三つの家系を“始まりの御三家”と呼ぶのである。
そうしたシステムがどういうものかは勿論公開されていないが、結果として聖杯戦争に参加する七組のマスターが最後の一組になった際に、アインツベルンが用意した依代に降霊する形で顕れる。
降霊という言葉が示す通り、聖杯それそのものは実体を持たない

別次元の存在とされている。
　参加マスターの手駒として喚び出されるサーヴァントは英霊の座から召喚されるが、では万能の釜、奇跡の願望機が降臨する前に在るとされる何処かとは、一体――。

「――――問い掛けをしておいてすまないが、話を進めるために答えを教えるとだ、現段階において聖杯とは、この世の何処にも存在しないものなんだ」

「……へ？」

「ああ、君たちマスターに令呪を授けるのも、私たちサーヴァントを召喚する際に補助をするのも、確かに聖杯の力だ。しかしねウェイバー、願望機としての聖杯は“今はまだ”ない」

　七つの駒の内、アーチャーとされる駒を掴み、片手で弄びながら、キャスターの緋色の瞳は猛禽のように鋭さを増していく。
　しかし眼光とは裏腹にキャスターの瞳からは威圧感の類は一切放たれていない。あくまで淡々と教え子に事実を講義するように、緩やかにウェイバーに語りかけてくる。
　それでも射竦められたと肉体そのものが受け取ったのかビクリと身体を震わせ、ウェイバーは言葉を発せずに、なんとか視線で続きを促した。

「この冬木の地のとある場所に、始まりの御三家が敷設した魔方陣

がある。これを大聖杯と呼ぶのだが、この魔術基盤こそ聖杯戦争のシステムそのものであり、冬木の地を聖杯の降霊に適した土地として整える機能を持っているんだ。令呪の作成とサーヴァント召喚の際に用いられる莫大な魔力の調達は、このシステムによって成り立っている」

英霊の座より英霊を召喚する魔力は途方もない規模の量であり、その英霊をサーヴァントとして三度とはいえ律する令呪も膨大な魔力を凝縮して生成される。

大聖杯は冬木の霊脈を決して涸らさないよう、六十年という時間を掛けて少しずつ霊地からマナを汲み上げ、聖杯戦争を行うための必要な魔力量を蓄えてゆく。

そして必要量の魔力が満たされた時、聖杯降霊の儀式の前兆として、マスターに相応しい人物を選別してその者に令呪を授け、聖杯戦争という降霊の前段階としての儀式を実行する。

常人の視点で見れば少々どころではない気の長い話であるが、魔術師にとって時間とは積み重ねて活用するものでしかない。でなければ子々孫々に成果を継承させるなどできはしない。

むしろたかだか六十年程度を待つだけで済むのは短いと言えるだろう。

キャスターの口から語られるこのシステムを開発した御三家の秘術には、一介の魔術師としてウェイバーも感嘆するほどだった。

「そして『大』聖杯などと言うからには、当然『小』聖杯も存在する。御三家の一角アインツベルンが用意した器におおよそあらゆる願いを叶えられるほどの無限に等しい魔力を注ぎ込んだものが小聖杯。即ち、聖杯戦争の優勝賞品がこれだ」

キャスターは盤の中央、七つの駒が囲む形となる位置に黒檀の鉢を置く。

「しかし、事前に知らされる降霊という言葉には少々の語弊があってね。正確には聖杯戦争を進めていく上で“聖杯を作り出す”のがこの儀式の正体なんだ。ウェイバー、そもそも何故御三家は外来のマスターを受け入れると思う？」

「それは……」

唐突に話題が脱線したように思えるが、キャスターの質問には意味がある。意図がはっきりと感じられる。

そこでウェイバーの総身が、先ほどとは別の意味で震えた。

考えて見れば不自然なのである。魔術師の悲願である『根源』に到達することができ、ありとあらゆる願いを実現させるほどの無限の魔力を秘めた万能の釜。そんなものを用意できるとなれば、それは魔術師として立派な成果なのである。

魔術師は協会のように横の繋がりを持つ者が多くいるが、それでも己の研究成果を他者に進んで公開する者など一人としていない。

魔術師は一般の人間に神秘を秘匿する以上に、己の成果を秘匿する。それを踏まえてキャスターの発言と時計塔の資料を合わせて考えてみると、聖杯戦争の異常さが浮き彫りとなった。

何故外来のマスターなどにチャンスを与える？　『根源』を目指す魔術師として考えれば自身の到達を脅かされる可能性を増やすだ

けの、矛盾した無意味な行為だった。
だが、本当に無意味なはずがあるわけがない。そこには何かしら意味があるはずなのだ。生成される令呪が三つではなく七つである理由が。サーヴァントとして英霊七騎を召喚する理由が。外来のマスター四人を集めるという理由が。

そこでふとウェイバーは気付く。話を始めた時にキャスターが用意した卓上の小道具を。
ヒントだったのだ、それは。思い至るべきだったのだ、話題の伏線となる小道具の意図を。

――まさか……聖杯の魔力ってっ！？

見開いたウェイバーの眼の奥に驚愕と理解の色が浮かんだのを見届け、キャスターは続けた。

「この聖杯戦争というシステムは本当によく出来ている。手にすれば根源へと届くこともおそらく可能だ。いや、前提を間違えているな。根源へ至る一手段として考案され、完成したのがこのシステムなんだ。公開されているルールが完全にバトルロイヤルをメインに据えているから気付きにくいのだが――。
君も気付いた通り、マスターとサーヴァントの数には意味がある。御三家が外来のマスターを呼び込む必要がね」

キャスターはひょいひょいと駒を摘んでは、鉢の内側にそれらを置いていく。

その行為が意味する事実を、ウェイバーは狼狽に呼吸を荒くしつつも、間違うことなく正確に理解した。

「察しの通り、聖杯は七騎のサーヴァントの魂を注ぎ込むことで完成する。この世界に呼び込んだ英霊の魂七つ分が座に帰る際に空く孔。それによって根源へ至ることが彼ら御三家の狙いだ。そして英霊の魂を魔力として換算すれば甚大な規模の量となる。それこそ七騎分ともなれば、無限に等しい魔力が、ね。そのための生贄なんだよ、サーヴァントという存在は。そして生贄を喚び出すための撒き餌こそ、マスターの存在理由に他ならない」

英霊が七騎喚び出される理由がこれでよく解った。単純に必要だったのだ。七という数が。そして御三家はその言葉が示す通り三つの魔術師の家系だった。七と三ではどうしたって数が合わない。

仮に御三家各家が二人ずつマスターを得るとしても、どうしても席が一つ余ってしまう。その余りを求めて聖杯戦争の本戦を控えた状態で、血みどろの抗争が勃発してしまうだろう。

ならばシステムとルールの作成段階で、下手に数の利を求めるのは愚の骨頂だった。協議の結果、御三家にはマスターとしての枠一つずつを得ることで落着した。

それに所詮は自分たちの陣営以外のマスターは、悲願成就を阻む敵性存在でしかない。

ならば数合わせのマスターの枠へは、欲望に駆られて参加する外部の魔術師を宛がえばいい。

どうせ己以外のマスターとサーヴァントは全て狩り尽くすのだから。そして、最終的には――。

ウェイバーは血の気の引いた顔色を繕う余裕もなく、力なく背も

たれに身を預けた。

これまでのキャスターと接した時間は短いながらも、心底で信頼を寄せるに足るパートナーであるとウェイバーは認識していた。

事前にイメージしていたキャスター＝先達にして遥か高みにいる魔術師、というの先入観を裏切り、所帯じみた言動やなんとなくそれを楽しんでいるような雰囲気から、マスターを意のままに操って主導権を握るような“魔術師らしい”人物とは到底思えなかった。

だからこうして説明されたキャスターの話も、嘘偽りはないのだろう。その人柄も考慮の内だが、何より矛盾の無い整合性の取れた言葉の数々に、それが真実であるとウェイバーを納得させていた。

ウェイバーはクッションの利いたソファに身を沈めると、力なく弛緩したようにゆっくりとした動作で右手を持ち上げ、己が手の甲に刻まれた翼を拡げる意匠の紋様を注視する。

「……じゃあ、令呪は……」

「先ほど根源へ至るには七騎が必要と言ったな。君も気付いているのだろう？　令呪の真の役目を。

御三家のマスターは勝ち残った後、最終的にその令呪によって自分が喚び出したサーヴァントを自害させる。そのために英霊すら律することができる絶対命令権を作成したんだろうな」

ウェイバーはこの時初めて、目の前の少女に対して良心の呵責を抱いた。

当初、資料によって得た知識で認識していた聖杯戦争とは、魔術師の純粋な実力勝負だと思っていた。

魔術師は魔術の腕を競い合い、喚び出したサーヴァントを使い魔として掌握して戦うのが正しい姿だと夢想した。

資料によれば、喚び出される英霊も何かしら願い事があって召喚に応じるとある。であるならば、利と理をもって説いてやれば、容易にこき使うことが可能であろう。

最終手段として、マスターには令呪というものまで与えられるのだから、大した心配はしていなかった。

しかし、ウェイバーは召喚前に触媒を失い、目当ての英霊を喚び出すことができなくなった。ゆえに触媒なしでの召喚を余儀なくされる。

そして喚び出した英霊の存在感は、彼を圧倒した。確かに英霊とは、人を遥かに超える超越の存在である。

こんな精霊の域に達した者を使い魔として使役する？　なんて馬鹿げた考えだったのだろうか。

真名から征服王イスカンダルのような知名度による地形効果も見込めないであろう、全くの無名の英霊でこれなのだ。

いや、自分が喚び出した英霊である以上、キャスターがイスカンダルに劣るハズレであるはずがないのだが。

しかるに彼ら英霊を使い魔として扱うのは、身の程知らずの世迷い言でしかない。誰が好き好んで己よりも格段に劣る弱者に道具のように使役されたがるものか。

それでも聖杯戦争の勝利とは、聖杯の獲得と同義である。つまりウェイバーとサーヴァントは見事に利害が一致していた。

それを理由に協力すれば勝ち残るのも夢ではないと、不安はあったが思うことにしたのだ。

さらに、もともとウェイバーには聖杯に願う望みはなかったため、賞品をそのまま譲渡すれば話は簡単にまとまるだろうという打算も

あった。

そして現在、その考えがいかに浅慮だったかを思い知らされていた。

聖杯戦争の実態は、英霊を用いた蠱毒の壺だったのである。のこのことやってきた外来のマスターであるウェイバーは、そのための単なる使い捨ての道具に過ぎず、ウェイバーが喚び出したキャスターはどこまでいっても生贄に過ぎなかった。

この事実に後ろめたさを感じずにいられるほど、ウェイバーは人間ができていなかった。そこまで達観していれば、そもそも時計塔を飛び出すこともなかっただろう。

ウェイバーは生気の薄れた様子で令呪から視線を外し、キャスターの方を力なく見遣る。視界に収まった彼女は泰然として動じた様子もなく、毅然と現状を受け入れていた。

それがウェイバーの心を無性に苛立たせた。そのまま歯止めが利かず、口はウェイバーの心情に忠実に言葉を紡ぐ。

「キャスター、お前なんとも思わないのかよっ!?　こんな、生贄として利用するような儀式に呼び出されたんだぞっ！　僕が、お前を巻き込んだも……同然なのにっ……」

ウェイバーの動機は偏に魔術師としての矜持――悪く言えば名誉のためである。

正当か不当かは視点によって異なるが、少なくとも彼の目から見れば間違いなく不当に軽んじられる現状を打破するために立ち上がった結果が、この聖杯戦争への参加だった。

だというのに、公開された情報を疑うこともせず鵜呑みにした結

果、全ては御三家の掌の上であり、英霊とはいえ赤の他人を己の身勝手な私闘に引きずり込んだのである。他でもない、ウェイバー自身の手によって。

恨み言の一つでも言う権利が、キャスターにはあるのだ。こんな真相を知らされれば、罵られでもしないとウェイバーは心の均衡を保つことができないほどだった。

だというのに、キャスターの表情に浮かぶのは、朗らかな微苦笑のみだった。

「ウェイバー、別に君が罪の意識に囚われる必要はない。私は真相を承知の上で召喚に応じたんだし、何よりこうして聖杯戦争にサーヴァントとして喚び出されることを目的に守護者となったのだから」

「……はぁあっ！！？」

そのあまりに突拍子もない告白にウェイバーは驚倒した。あまりの衝撃に数秒の間は完全に思考停止に陥ったほどの驚愕である。

仰天の叫びと同時に、ここではたと気付く。キャスターはサーヴァントにしては不自然なほど真相を知りすぎているという事実に。

何故聖杯戦争について、ここまで詳しいのか？　イレギュラーにすこぶる打たれ弱いウェイバーは、あまりにも驚天動地な事実を明かされたせいで、疑問に思う余裕がなかったのだった。

聖杯戦争に召喚される英霊には聖杯から現代で活動するのに支障のない知識が流れ込む。

そうした現世の知識が流入する前、現界を遂げるよりもさらに前、英霊の座から喚び出しに応じて招かれる前段階で、英霊には聖杯戦

争の概要と願望機の存在を報されるのだ。
だからこそ、英霊は生前の未練などを始めとした己の望みを叶えるためにサーヴァントとなるのである。
勿論、ウェイバーはキャスターの説明によって、その時点で与えられる聖杯戦争のルールが詐欺同然のお為ごかしであることを知ってしまった。
口当たりの良い情報のみしか与えられずに得難い好機と喚び出される英霊たちにとっては、本当にいい面の皮であろう。

しかしここに例外が存在する。聖杯に呼びかけられる前からウェイバーたち外来のマスターの知り得ない聖杯戦争の真相に知悉し、さらに聖杯戦争に召喚されるために英霊にまでなった規格外のサーヴァントが。

「改めて自己紹介をしよう。第五次聖杯戦争にセイバーのマスターとして参加したエミヤ・シロという」

「セイバーのマスターだった!?　いや第五次……第五次だってぇっ!?」

「ああ。要するに、私は未来の英霊ということなんだ」

本日何度目かになるウェイバーの愕然とした反応に、悪戯が成功したと言わんばかりに不貞不貞しい態度で、キャスターは満面に婉麗な笑みを浮かべた。
その笑みに釣られるように、疲れた顔を引き攣らせて笑うウェイ

バーは、目の前のサーヴァントがあらゆる意味で大当たりだったのだと確信した。

魔術師らしい先入観で完全に過去の故人、いや故人には違いないのだが、よもや未来人の類だったとは、その正体を正確に見抜くなどウェイバーだけでなく、他のどのマスターでさえ無理な仕事だった。

たとえ英霊の座が時間より切り離された座標であると知っていたとしても。

そもサーヴァントとして喚び出される対象は、必ずしも正規の英霊とは限らないのである。

この星に生まれ、集合無意識に記録された知名度のある存在ならば、純正の英雄やそれと対極を成す存在――俗に言う反英雄、さらに実在する歴史上の人物だけでなく、伝承にのみ伝えられ、人々の口端に昇った程度の架空の人物、娯楽媒体の中の虚構の登場人物ですら該当する。

聖杯がサーヴァントとして採用する許容範囲は、それだけ広範だった。

架空・虚構の人物に較べれば、目の前で意地の悪い笑みでウェイバーを眺めるのが未来、おそらく並行未来世界の人物だとしても何ら不思議はない。

だがこれは絶大なアドバンテージとなるのではないだろうか。

今回の第四次聖杯戦争の情報を持っているかは定かではないが、マスターとして参加した後に英霊――つまりは現代社会で英雄にまでなった人物なのである。

彼女が参加した第五次聖杯戦争で勝ち残ったにせよ初戦敗退したにせよ、生き残ったことには違いない。マスターの先輩として彼女の知識と経験は大いに役に立つはずだ。

実践の場において経験が何よりも大事だということを、その経験

に人より乏しいウェイバーでも理解していた。
もっとも、それが熟知の域には達していないために、ほとんど前準備なしの勢い任せの渡日だったのであるが。

――いや、安心するのはまだ早いか。それよりも先に訊かなきゃいけないことがあるだろ。

「なぁキャスター、お前が納得ずくで僕の召喚に応えてくれたのは判った。なら、お前が聖杯に願う望みってなんだんだよ？　こうして正体を教えてくれたんだ。ちゃんと答えてくれるんだろ？」

ウェイバー・ベルベットは、キャスターが胸に秘する願いを語ってくれるのだと信じて疑わなかった。
先ほどからの遣り取りでウェイバーをからかうのを面白がる傾向に少々あるようだが、それでもウェイバーに願いを訊いた以上、この質問を誤魔化したり、ましてや茶を濁して黙秘するような不義理な性格ではないと感じていたからだ。
そしてウェイバーの期待と信用を裏切らず、キャスターはその問いに答えてくれた。

「私の望みは――――そう、逢いたい人たちともう一度会いたい。ただそれだけだな」

紅いその眼差しには迷い無く、地震や嵐でも折れぬであろう鉄の意志が窺えた。

しかし、瞳の光と違って泣き笑いのようにも見えるその表情は、彼女の年齢を外見よりも数段幼く見せて、儚い印象をウェイバーに抱かせ、それ以上のことを彼に訊ねさせなかった。

その表情に、鍛冶師が丹精込めて槌で叩いた様な鋼を思わせる強さと同時に、触れれば壊れるほどの硝子細工のごとき繊細さを感じ取ったがために。

それは彼女と繋がるレイラインの影響なのか、それともキャスターがこの未熟なマスターに初めて見せたであろう隙から洩れた彼女の素顔だったのか、今のウェイバーには判じかねるものだった。

キャスターの会いたい人物。それは十中八九故人だろう。

根源に到達するつもりがないのなら、少なくとも魔法によって死者の蘇生を行うのではないのだろう。

となると並行世界の同位体たる人物と再会したい？　しかしこれはキャスターに抱くウェイバーの印象とはそぐわない動機だった。

全くの同一人物であっても、それは彼女の会いたい誰かとは完全な別人なのだから。

そうした詮のない思考に占められる中、キャスターの言葉は続く。

「あと、これは確認していない以上あくまで可能性なのだが、私の知識通りにこの世界も歴史を歩んでいるのなら、この戦いの終幕に顕れる聖杯は手にした者の望みを破壊という形でしか叶えない歪んだ願望機と成り果てているかもしれない」

可能性。あくまで可能性であるとキャスターは告げる。無色透明の力の塊、あらゆる望みを叶える聖杯が、そんな災厄の種に変貌しているなど、聖杯戦争の意味すら歪める大惨事だろう。御三家は元より外来のマスターやサーヴァントたちが納得するような話ではな

い。
しかし、並行未来世界でその事実を体験したキャスターの発言には重みがあった。
ウェイバーは聖杯を必要としないマスターとしては変わり種である。ゆえに、このキャスターの言葉にはさほどの衝撃は受けなかった。しかし、得も言われぬ悪寒を感じ、絞り出すような声で彼女に訊ねた。

「……そうなった原因も、お前は知ってるんだよな」

「あぁ、知っている。詳しく話――」

「いや、その前に訊きたい。そんな聖杯でお前の望みは叶うのか？」

「――っ」

キャスターの言葉を遮り、ウェイバーは問うた。
これは大事なことだった。並行世界の同一人物に会う程度ならば現界し続ければ可能であろうが、故人と再会したいと思われるキャスターは言ったのだ。聖杯を使用するのだと。
目の前のサーヴァントが、己の望みのためにそんな災厄の種を使うとは到底思えなかったが、それでも己の望みのために他の全てに破壊を撒き散らすような代物を使うというならば、それを律するのが彼女のマスターたるウェイバーの役目だった。

喚び出した張本人である者の責任とはいえ、返答次第では故人となってまで悲願するサーヴァントの望みを諦めさせることになるかもしれない。

それは圧倒的格上である英霊に対して、自殺行為に他ならなかった。

なにせウェイバーは魔術師といえども戦闘に関しては全くの門外漢であり、当人も頭脳派と自称する通り、実質ただの無力な一青年に過ぎないのだから、彼女の協力なしにこの聖杯戦争に生き残ることは困難――いや、彼女の不興を買うだけで、己の命が潰える未来しか待っていないのは確実だろう。

それでもウェイバーは、己の責任を放棄するという選択肢を断じて取らない。いや、ウェイバー自身も内心驚いたことに、取ることができなかったのだ。

おそらく、いや確実に後から己の言動を壮絶なまでに後悔することになるのだろうが、自分のサーヴァントが災厄を撒き散らすという可能性は、どうにも感情が我慢できなかった。

ウェイバーは場合によっては即座に令呪を発動できるよう、右手に刻まれた三画の刻印に意識して力を込める。

そうした悲愴感伴う主の覚悟を見て取ったのか、キャスターは揚々とした璃声を上げて大きく笑った。

「ふっはははは、あはははははははははっ！！」

呵々大笑と声を上げるキャスターの姿にウェイバーは不快感を感じなかった。

長らく周囲から侮蔑され、軽視され続けたウェイバーはそうした感情に敏感だった。

しかし目の前の少女の笑いに含まれるのは、今まで彼を嗤ってきた輩とは根本的に別種の感慨が感じられた。

そう、まるでウェイバーを拍手喝采で讃えるように彼女は笑い続けるのだ。

キャスターの歓呼の声は彼女の胸を沸かす熱が納まるまで続き、ひとしきりの笑いを終えると不意に凛然とした空気を纏い、改まってウェイバーに向き直る。

その空気に当てられ、彼は緊張と当惑の峠を越えていた五体を硬直させてしまった。

「我が主ウェイバー・ベルベット。私は君という人間に喚び出されて本当によかったと判断する。そうした矜持は私が最も好ましく思う在り方だ。まだ多少未熟ではあるが、その精神に敬服するよ」

掛け値無しの称賛とともに誉めそやされて、そうした経験を久しく味わっていなかったウェイバーにその言葉は、容易く彼の心の琴線に触れて音色を奏でるに至った。

気付けば、ウェイバーの頬を二筋の雫が零れ落ちていた。女性の面前で情けない有り様であったが、不思議とウェイバーは彼女の前で取り繕う気が起きず、暖かい微苦笑を浮かべてハンカチで頬を伝う液体を拭い続けるキャスターの行為を甘んじて受け入れていた。

「落ち着いたかね」

「あぁ……ありがと」

これも驚愕と同じく何度目になる遣り取りなのか、ウェイバーはキャスターにかけられた言葉へ素直に相槌を打つ。

その事実が示すのは、それだけウェイバーに落ち着きがないということであり、このサーヴァントを前にして幾度も取り乱した結果の反復だった。

なるほど、自分はマスターとして、人間として未熟そのものであると認めざるを得ない。

ウェイバーはやや鬱々とした溜息を吐くと、新たにカップに注がれたコーヒーのお代わりを飲み干した。

「結論から言えば、歪んだ状態の聖杯でもどうにかする方法を生前既に確立しているんだ。だから君の心配は杞憂というものだよ。そして最初に言った通り、そんな害悪にしかならない欠陥品、いや危険物はさっさと破壊するに限る、というわけだ」

「はぁ、よく判ったよ。でもキャスターっ、お前の説明はいちいち勿体ぶってるんだから僕が誤解しても――」

「なに、マスターならちゃんと精確に理解してくれると信じたまでさ。私の説明が下手というのもあるだろうが、それは主の器量に委ねた結果というもの。まあ何事も精進を怠らないことだな。人間としてもマスターとしても」

そう返されては文句の付けようもなく、ぐうの音も出ないウェイバーだった。

そこはかとない敗北感に押し潰されまいと、なけなしの反骨心で胃の中にコーヒーを流し込む。今の彼にはその程度のことしかできなかった。サーヴァントの助言通り、やはり精進は必要であろう体である。

主のそうした様子に構うことなく、キャスターは淡々とこの世界でもあったであろう過去の事象を語った。

「さて、聖杯が歪んだ原因だがね、発端は今回から見て前回、つまり第三次聖杯戦争にある。

御三家の中でも純血を旨とするアインツベルンは錬金術を得手としてはいたが、こと戦闘に関しては正直埒外としか言えない家系だった。そして第一次、第二次の聖杯戦争では早々に敗北を喫したそうだ。

そこで業を煮やしたアインツベルンは必勝を期してある英霊を召喚した。その英霊の名は〈この世全ての悪（アンリマユ）〉」

〈この世全ての悪（アンリマユ）〉とはゾロアスターにおける絶対悪の名前である。

最高善とする神アフラ・マズダーに対抗し、まさしくこの世の全ての悪を司る存在と定義されている。

人の身で神の領域に踏み込んだ偉業を成し遂げ、死後その存在を一段上の次元に昇華された英霊を喚び出すのとはわけが違う。文字通り格の違う神の領域に坐す存在こそが〈この世全ての悪〉なのだ。

「ちょ、ちょっと待てよっ！……幾ら聖杯でもそんなもの喚べるはずが……」

「無論、神霊級の存在など聖杯を用いても召喚なんて出来なかった。アインツベルンが喚び出したのは、ある集落の者たちに“悪であれ”と呪われた何の力もない一人の人間だった。

おそらく歴代サーヴァントの中でも最弱の英霊だったのだろうな。アインツベルンの期待も虚しく、わずか四日でそのサーヴァントは脱落した。おまけにとばっちりで依代となるはずだった聖杯の器も破損。これによって第三次聖杯戦争は無効試合と相成った。

だが、この時さらに予想外の事態が起こった。それが聖杯の汚染だ」

キャスターは部屋の備品であるポットを持ってくると、空のカップになみなみと熱湯を注いだ。そして告げる。これが聖杯だと。

なるほど、無色透明の液体が注がれている。文字通り無色の力を満たした聖杯の模型だった。

そこにポットの隣に置いてあったインスタントコーヒーの袋を破り、中の粉末をカップに注いだ。そして告げる。これが今の聖杯なのだと。

確かに、これを無色とは口が裂けても言えないだろう。湯に溶けた粉末はカップの中身を隅々までダークブラウンに染め上げていた。

安っぽいながらもコーヒーの薫りのする器を互いに見下ろす。一度混じり合った溶液を完全に分離させることは容易ではない。少なくともこの場では不可能な難業だった。

コーヒーが冷めたからといって、カップの中身が無色に戻ることはない。譬喩としてインスタントコーヒーを持ち出した以上、これは即ち、一度汚染された聖杯は今も無色の状態に戻っていないとい

う情況の示唆だろう。

「英霊としての力は末端の守護者にも劣る〈この世全ての悪（アンリマユ）〉だが、こいつはある厄介な呪いを持っていた。ただ“悪であれ”と生前かけられた呪詛がそれだ。

これによって無色の聖杯は無色であるために悪一色に染まりきってしまった。そして破壊という歪んだ形でしか望みを叶えられない代物へと成り下がった。

まぁ、根源に到達する程度の願いなら問題なく実行されるだろうから、御三家にとっては問題にならない問題なのだが――」

「それ以外の願いは災厄にしかならない……」

「ゆえに私の立てる大まかな方針を明かせば、まず、他のどの陣営にも聖杯を渡さない。そのために勝利を目指す。そして己の望みを果たす。しかる後に小聖杯と大聖杯を二度と使用できないように破壊する。と、この三つになる」

片手の人差し指、中指と、言葉の進みとともに伸ばし、目標となる行動指針として差し上げる。

その方針はウェイバーとしては文句の欠片もないものだった。

聖杯戦争での勝利は元々の彼の目的そのものであるし、たとえ根源を目指すと言われる御三家であろうとも、本当に根源だけを望むのかは大いに不安だった。

さらに自分たち以外の外来マスターたちの願いも、魔術師らしく

根源を求めて世界の外へ向けられるものであるなどと盲信することもできない。

やはり安全を期すならば自分たちが勝ち残るしかないだろう。仮に聖杯が汚染されていなかったのだとしても、それは憂いが多少減った程度のもので、やはり勝利を目指すことには変わりない。

キャスターの望みを叶えるという方針も忽せにするつもりはなかった。

少なくとも聖杯戦争が終わるまでは運命共同体であり、無二の相棒なのだ。その意思と願いはマスターの責任をもって最大限に尊重しよう。

そして最後の破壊というのも頷ける目標だった。この世界ではたとえ汚染されてなかろうとも、キャスターの生きていた世界で汚染されていたのは事実なのだ。

話を聞く限りほとんどあり得ない原因なのだろうが、そんなあっさりと危険物に染まるような代物ならば、今後も悪性の英霊が喚び出されただけで汚染される可能性が高い。やはり放置する手はなかった。

そんな代物をもし捨て置こうものなら、ウェイバーの蚤の心臓をして終生まで後顧の憂いとなるのは、火を見るより明らかである。

ならば勝ち取ってから後腐れなく潰してしまう方がいい。それが精神衛生の上で最も確実な解決策である。

ウェイバーは姿勢を正すと、令呪の刻まれた右手をキャスターに差し出す。

その意図を察して、キャスターはウェイバーの掌に右手を沿え、互いに固く握り合った。

当然キャスターの全力の握力ならばウェイバーの手など呆気なく圧壊するので、充分に手加減はしていた。

「あー……改めてよろしく頼む、キャスター」

「承った。こちらこそよろしく頼むよ、マスター」

やはりウェイバーは自身が未熟だと思い知る。理由はただ握手をしたという行為によって内心を気恥ずかしさに占められ、自覚するほどに赤面するのを止められなかったからである。

対するキャスターは故人であるがための年の功か、やはり余裕をもって涼しげに微笑んでいた。

ウェイバーは自分と違って動じることのないキャスターの爽やかな笑顔に、理不尽な悔しさを感じてしまう。

いつの日か、自分はこのサーヴァントに相応しいマスターになれる日が来るのだろうか。力量も大事だが、そうではなく主に精神的な面で。今の主従の関係を客観的に見るに、少なくともこの聖杯戦争中になれるかは甚だ疑問だった。

しかし、不安に苛まれようとも立ち止まってはいられない。へっぴり腰でも前へと進まなければならない。ウェイバーは取り敢えず、キャスターの笑顔や接触に免疫を付けることを決意した。

その決意の一歩が彼の思うより幾分重いものだとこの先さんざん思い知ることになるのだが、少なくともこれが成長へ向けた最初の一歩だと、その時彼は信じたのだった。

三：抱負（後書き）

うちのキャス子さんは面倒なのと義姉とセイバーのことが絡むのでウェイバーに元男だとは言ってません。
当初はお約束の「なんでさ……」と消沈してましたが、今は特に性別を気にしてませんので。まあ貞操の危機ぐらいは察知できますが。むしろ戦術的に油断を誘う要素としか認識してないかもかも……。

さて今回はわりと穴だらけのプチ暴露回でした。全然話が進んでませんね；　申し訳ありません。

※感想板で指摘して頂いた部分を幾つか修正させて頂きます。特にヨシユキ様、ルビについてまことにありがとうございました。

四：二槍

時計塔。そう呼ばれる場所があった。
ロンドンにおいて、時計塔と呼称する存在は二つある。
一つはテムズ川河畔に建てられたウェストミンスター宮殿――現英国国会議事堂に併設される巨大時計台。常の人種が思い浮かべるのはこれのみであろう。

では、常から外れた人種が思い浮かべるもう一つとは何か？
それは数多の魔術師たちが参加し、それを統括する組織たる魔術協会の総本山にして、参加する魔術師たちが日夜学び研究する、こと西洋魔術関連においては最高学府と称される施設の呼び名である。
時計塔の歴史は古く、ローマ人がブリテンに上陸した頃と同時期に設立されたと――真偽の程は定かではないが――伝えられている。

その時計塔において、ロード・エルメロイの名で持て囃されている人物がいる。
魔術協会のロードの一角である名門アーチボルト家九代当主、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。
彼は現在、己が参加する聖杯戦争の舞台となる冬木の地にいた。
魔術協会に要請して手配されたケイネスの根拠地は、エーデルフェルトより協会に寄贈された双子館。
この邸はケイネスが丸一日かけて結界を構築し、今や遠坂邸に負けない要塞のごとき魔城と化していた。

双子館の片割れの地下に設けられた自室の執務机につくケイネスは、知覚共有した梟の使い魔から伝わる映像と音声を視聴し、その情報を元婚約者であるソラウ・ヌァザレ・ソフィアリと、己が喚び出したサーヴァントたるディルムッド・オディナにも中継して伝えていた。

主従三者が揃って見たものは、黒く染まった皮膚に白い髑髏を模した仮面が特徴的な暗殺者の末路。遠坂邸を襲撃したアサシンのサーヴァントが、おそらく現当主である遠坂時臣のサーヴァントに撃退されるという内容だった。

閉じていた瞼の内片方を上げ、ケイネスは部屋の中央の円卓の席に坐る婚約者と、美姫に仕える騎士のごとくその背後に控える従者の方を見遣る。

急遽仕立てられたにも関わらず、一分の隙もない濃緑のスーツを纏うランサーは、“輝く顔”の二つ名に恥じない美貌と涼しげな雰囲気で、血の通った第二の皮膚とまで謂われるサヴィル・ロウの老舗の仕立てを完全に着こなしていた。

当世風とはいえ超一流の衣装に負けぬ風格を持ち、正真正銘の貴族令嬢であるソラウの側に控えるその姿は、非常に絵になる明媚なものだった。

ケイネスは完成した傑作絵画に稚拙な絵筆を加えるような、やや残念な心持ちで訊ねる。

「ランサー、この情況をどう見る？」

「はっ。私見を申し上げれば、アサシンが真っ先に脱落した、という結論に達するのは早計かと存じます」

騎士道に殉じる覚悟を完了して仕える完璧な従者は、ジョンブルの精神を表す三つ揃いの仕立てを損なうことなく、折り目正しく主に礼をし、己の意見を上奏した。

その意見に満足すると、ケイネスは言葉に敢えて含まれなかった意図を正確に見抜く。ランサーはケイネスが同じ意見を持っていることを察し、差し出がましい説明を語らず、ただ臣下の礼をもって投げかけられた問いに答えたのだ。

もっとも、仮にランサーが出しゃばろうともそれに気分を損なうほどケイネスは狭量ではなかったが、敢えて満足の笑みを浮かべて忠実な従者の言葉に応える。

「私もそう思う。気配遮断スキルを持つというアサシンが邸内に侵入してから、あれほどの短時間で迎撃されるなど少々出来過ぎだな。まるでわざと見せ付けるかのような一方的な殲滅だった。

もしアサシンのマスターが遠坂時臣の弟子だったという言峰綺礼であるのならば、袂を分かったという情報が偽りで今現在も彼らが内通していると見て間違いないだろう。

フッ。この戦端はとんだ八百長試合ということだ。この仮定が正しい場合、アサシン程度のクラスとはいえサーヴァントの一騎、その貴重な手駒をこれほど序盤に使い潰すというのも疑わしい。影武者か分身か、使い捨てにできるだけのスキルか宝具を持っているはずだ。アサシンはいまだ健在とみて動くべきだな――」

言葉を一度切り、ケイネスは両の眸でランサーを見据える。

「――ランサー。遠坂邸のあの黄金のサーヴァントに心当たりはあ

るかね？」

「残念ながら、あの英霊は今回が初見であります」

「ふむ。ならば先ほどの攻撃から奴のクラスをどう思う？」

「背後の空間より多種多様な宝具を取り出し射出する能力、魔術師にはないまるで王者のごとき堂々たる威風、狂戦士にはあり得ない不遜にして驕傲な言動、そして直接剣を取って戦う者特有の闘気の希薄さから、消去法でアーチャーもしくはライダーであるかと存じます」

生前は騎士であり剣士でもあったランサーがセイバーに非ずと見るのであれば、その意見は参考するに足る材料としてケイネスは採用した。

サーヴァントを現界させるクラスの縛りが一見して曖昧ながらも厳格であることを、時計塔の資料にてケイネスは熟知していた。

英霊ディルムッド・オディナがランサーとして召喚された際、彼の本命の武装である双剣が宝具に登録されていないのも、その知識を裏付ける結果となっていた。

そして百戦錬磨の英雄である彼のサーヴァントの視点で出された考えを無視する材料もまた存在しなかった。

「その二つのどちらか、だな。もっとも、イレギュラークラスであるならば無意味な予想だが、正純の英霊ほどクラスに当て嵌められ

るシステムである以上、あれは君の考える通りアーチャーかライダーで間違いないだろう。ランサー、アレに勝算はあるかね？」

「憚りながら申し上げます。私はケイネス様の騎士であります。その私が他のサーヴァントに負ける道理はございません。私の槍は主の為にいかなる難敵も駆逐いたしましょう。そして必ずやケイネス様に勝利の栄光を献上し、同時に聖杯を御許にお捧げいたします」

誇り高き騎士は己の主が聖杯戦争において最高のマスターであると心底から信じていた。

その主の騎士として槍を振るい、忠義を尽くすことこそが今のランサーの存在意義である。そしてケイネスに己の偽りなき忠誠心を認めてもらい、主の無尽の信頼を得るという目標を目指す。

意気軒昂に宣言するランサーの自信に苦笑し、その自信に自負が伴うことをマスターとしてよく知るケイネスは、己の騎士の決意を真摯に受け止めた。

ケイネスはランサーの求める主従像を叶えるために、鷹揚に彼の宣言に首肯し、主の威厳をもって言葉を発した。

「それでこそ我が無二の騎士ディルムッド・オディナである。これより臨む戦場でその忠義の真価と伝説に謳われし武勇を私に見せてくれ。ゆえに命じよう。ともに戦場を駆け抜けろと」

「はっ。謹んでお受け致します、ケイネス様」

ランサーは片膝を着くと、歓喜を噛み締めるように返答を紡ぎ上げる。

命じる形となったが、強要の意は含まれていない。あるのは主から寄せられる揺るぎない信頼、ただ一つのみ。

それがどれほど貴重で得難いものか、生前の境遇に不服がなくともランサーは思わずにはおれない。ケイネスこそ唯一無二の主であると。この主に仕えることこそ至上の歓びであるのだと。

そこには互いを信頼する完璧な主従の姿があった。その様子をじっと黙したまま眺めていたソラウは、愛しい殿方が元婚約者へ誠心誠意を傾ける姿に嫉妬せずにはいられなかった。

しかし、ソラウはランサーの生前の生涯がいかなるものかを知っており、そのランサーの願いを叶えるために、ケイネスがその理想の騎士の求める主たらんと務める意嚮も同時に認めているため、彼らのつくりだす忠節の一時を邪魔をする愚は冒さなかった。

何よりそんなことをしてランサーに無粋な女の烙印を押されるなどソラウには耐えられなかった。

しかし今すぐ二人の間に割って入りたい乙女心の熱は、沸々と勢いを増していき、彼女の胸を内より灼き焦がす。

自然、瑞々しい唇を引き結んでケイネスを睨み付けることとなった。

ケイネスはその視線に気付くと、軽く息を吐いて表向きは婚約者である女性のために、ランサーへ命を下した。

「ランサー、そろそろ夜も遅い。君のもう一人の主であるソラウの美容のためにも、彼女を寝室にエスコートしてくれないか。そして彼女が起きるまで警護を頼む」

「――はっ。ご下命承りました。ソラウ様、どうかお手を取ることをお許し下さい」

ケイネスを至上の主と仰ぐこのサーヴァントとはソラウに関して今までさんざんに話をしており、それにいまだ納得しきっていないのがわずかの逡巡から見て取れたが、ソラウはランサーと触れ合うことへの期待でときめいてそれどころではなく、ケイネスは時間が必要だと敢えて黙殺した。

「私は使い魔を用いて教会を見張る。アサシンのマスターが脱落者を装ってのこのこと現れるならば、それが一体誰なのかを見極めんとな。ではおやすみ、二人とも」

「おやすみなさいませ。ケイネス様もどうかご自愛下さいますよう」

「おやすみケイネス。さぁ行きましょうランサー」

ソラウはランサーの左手に“三角の令呪が刻まれた”右の繊手を触れ合わせ、彼とともにケイネスの残る部屋を辞した。

「恋にはしゃぐ大きな女の子のお守りをサーヴァントに任せるのも何であるが、ランサーのステータス維持にソラウは欠かせないパートナー。私たち三人が勝ち残るために、せいぜい私は二人の仲を応援するとしようか」

ケイネスはマスターが聖杯に与えられる透視力を使い魔の目を通しても損なうことのないよう、梟の眼球に高度な細工を施していた。

その工夫によって知ることとなった黄金のサーヴァントのステータスは、身体能力値がオールBという安定したパラメーターに加え、魔力・幸運値はともにA。宝具も滅多刺しとばかりに連射した中に高位の物が含まれていたのか、現在の表示はAとなっている。

最優のクラスであるセイバーを除いて、これほどの高いスペックを具えるなど、ライダーのクラスには心当たりのあることもあり、おそらく残る三大騎士クラスの一角であるアーチャーの可能性が高い。

見せ付けるように行われた処刑劇の一幕から、無造作に射出されたあの宝具群が唯一の切り札ということはないだろう。おそらくあの見せ札とは別に、計り知れない奥の手を隠し持っているはずである。

あの黄金のサーヴァントは、時計塔から姿を消して日本へ入国したウェイバー・ベルベットが喚び出すであろう、自身も必勝を期した征服王すら凌駕する英霊であると、ケイネスは持ち前の洞察力と降霊科の講師としての見識をもって確信していた。

つまり、遠坂時臣の喚び出した（と思われる）サーヴァントこそが、この聖杯戦争最強の英霊であるのは想像に難くない。

「全く、小細工は弄しておくべきだな」

ケイネスは脳裏に描かれるランサーのパラメーター表記を眺め、ランサーの忠道とソラウの恋慕を後押しする方針が正解であると、実感を込めて呟く。

足りない部分はランサーの誇りを穢さない程度に自分が立ち回ればいい。それぐらい出来なくてはロード・エルメロイの名折れだった。

明日には彼らの冬木入りに遅れて、ランサーの本来の得物も届く。その切り札の到着までの間、今宵のところは情報収集に徹するべきである。

ケイネスの考えが正しければアサシンの脅威はいまだ健在であるし、それ以上に“魔術師殺し”の異名を持つ者がアインツベルンの傭兵として参加する情報があった。

その手口に嫌悪と侮蔑を抑えることはできなかったが、それがいかに効率的で恐ろしいものかも理解していた。

本来ならば冬木の地に本拠地を置くことすら危険であったし、他のサーヴァント六騎が潰し合って数が絞られるまで、ひたすら待ちに徹するのが利口な戦略というものだった。

しかし、それで彼のサーヴァントが納得するのか、心に痼りを持ったまま十全にその全能全力を全開まで発揮することができるのか。

ケイネスは最善にして理想とする安全性の高い策を取った場合、生粋の騎士道を征くという精神的報酬を求めるランサーの弱体化は免れないと判断した。

たとえそれが微々たる弱みとなろうとも、英霊同士の殺し合いにはその微細な瑕瑾の隙間を縫うことで容易く勝敗が決するのだ。

であるからには、この並外れた槍兵とともに工房に閉じこもって守勢に回るなど論外であろう。

ならば明日以降はランサーとともに、それなりの積極性をもって動く必要があった。

「最速の英霊に相応しい戦場か。様子見も兼ねて、正攻法で行ってみるか」

ケイネスは己が改竄したサーヴァントシステムによって、ランサーのステータスを他のマスターがその透視能力で正確に看破できぬよう、パスを通して術式に偽情報を挟んだ。

これにより、敵陣営のマスターの誰もがランサーのスペックを低く見積もることだろう。そして彼のサーヴァントは見誤った敵手の隙を、必殺の突きをもって穿つはずである。

クラス：ランサー
真名：ディルムッド・オディナ
属性：秩序・中庸
マスター：ケイネス・エルメロイ・アーチボルト　＆　ソラウ・ヌァザレ・ソフィアリ

■ステータス■

【筋力】：Ａ　　【魔力】：Ｃ
【耐久】：Ｂ　　【幸運】：Ｅ
【敏捷】：Ａ＋＋　　【宝具】：Ｂ

※偽装後

クラス：ランサー
真名：ディルムッド・オディナ
属性：秩序・中庸
マスター：ケイネス・エルメロイ・アーチボルト

■ステータス■

【筋力】：Ｂ　【魔力】：Ｄ
【耐久】：Ｃ　【幸運】：Ｅ
【敏捷】：Ａ＋　【宝具】：Ｂ

◇◆◇◆◇◆◇

ケイネスは時計塔の中でも一際異彩を放つ人物だった。
魔道の名家アーチボルト家の嫡子として生を受け、血統に恥じない稀代の才覚とそれを発揮する能力を兼ね備え、“天才”という呼

び名を欲しいままにした傑物。

異例の勢いで魔術師としての格――位階を駆け上がった出世速度、名と実の伴う輝かしい研究成果、弟子たちを常に上へと導く講師としての手腕。それらは時計塔内で彼が脚光を浴びることを爆発的に促進させた。

誰もが“彼こそ天才にして神童”とケイネスを認め、名門の名にし負う彼を見やる視線に嫉妬と羨望を含ませずにはおれなかった。

綺羅星のごとく華々しく活躍する時計塔の花形講師、それがロード・エルメロイ、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトである。

しかし、当人からすればこの評価はまことに価値のないものだった。

誰も異論を挟むことなくケイネスを天才と称する。しかしそれは間違いだとケイネスは自嘲した。己が天才だと？　まったくもってモノを知らない節穴揃いどもめ。

ケイネスの才能がせいぜい秀才止まりであることを、他でもない彼自身が、誰よりも知悉していた。

確かに凡人ではないだろう。他者よりも並外れた才能を有するのも否定はしない。明らかに恵まれたものを天より与えられている。

それでも、本物の天才、いや鬼才を目にしたことのあるケイネスにとって、自分程度が天才と持て囃されることを認めることはできなかった。

人前では当然のごとくそうした評価を受け取るが、それは時計塔という歪にして闇の深淵のような環境で生き抜くためのポーズでしかない。

内心では相手の言動にも、否定せずに鉄面皮を貫く己にも、謙虚ではなく含羞の念から嘲笑する思いを抱かずにはおれなかった。

ケイネスがその鬼才と出会ったのは幼少の時分だった。

それまでの彼は常に同年代の者たちより一歩も二歩もその才能が抜きん出ていた。

同年代の誰も彼もがケイネスより大きく劣っており、当人にとっては出来て当然の課題にも四苦八苦する始末。その右往左する様を見て、彼は傲ることなくただ事実として、自身が周囲と比較して圧倒的に優秀であるのだと自覚した。

そして周囲は他の追随を許さない飛び抜けたケイネスの資質に天才の評価を下した。当時のケイネスはこの評価に何の感慨も持たなかった。彼にとってはできることをただしただけであって、別段努力をしたわけではなかったのだから。

しかし、ある日の朝、妾腹の義妹として現れた幼い少女によって周囲の評価は変わらずとも、彼の内面は大きく変針することとなる。

ケイネスはどれだけ時が経とうとも、瞼を閉じるだけで当時のことを寸分違わぬ視界で思い浮かべることができる。それほどに鮮烈だった。それほどに、愛おしかった。

名門貴族の家柄であるアーチボルトの家格に恥じない当主の執務室に電灯などというものはない。金色の燭架に聳える蝋燭群が暁のごとく部屋を照らし出していた。

徐々に刻印の移植を施されていた年頃のケイネスは、父である先代当主に喚ばれ一人の幼い少女と引き合わされた。

その少女の名はベアトリス。日本人の愛人に生ませたケイネスの異母妹だという。しかし、そんな説明は彼の耳朶から脳に届くことはなかった。

何故ならケイネスは棒を呑んだように微動だにせず、彫像のように佇んでベアトリスの容姿に目を奪われていたのだから。

幼いながらもケイネスは魔術師としての一等の教育を受けていた。その恩恵で外界の事物、特に魔力による影響などにも類い希な抵抗

力を持っていた。

そのケイネスが魅了されていた。ベアトリスの面貌を視界に収めた刹那、空前絶後の好意と恋情が彼の中に芽生えた。そう、偏にそれは一目惚れと呼ばれるものだった。

理想の美を追究する詩人の詩文も画家の画板をもってしても、ベアトリスの美の実在に及ぶことはないだろう。そうケイネスが断じるほどに、彼にとってその少女はひたすらに美しかった。

柔らかな濡れ羽の黒髪は艶やかに腰まで流れており、切り揃えられた前髪の下からケイネスを見返す黒曜の瞳は、王冠に象眼する象徴石を思わせる。

真珠のような歯が微笑む瑞々しい口から溢れて輝き、繻子のような頬が描く輪郭は高貴な血、アーチボルトの名に恥じないなよやかさと誇らしさを顕していた。

その身に纏う濃緑のドレスによって半ば露わとなった肩の滑らかな光沢は、鎖骨の生み出す陰影によって瑪瑙の光となってケイネスの眸を刺激した。

妾腹の、おまけに東洋人との混血児ゆえに他の弟妹たちはベアトリスを軽侮して拒絶したが、彼女に惚れたという自覚のあるケイネスは、なにかと彼女に世話を焼いた。

それは嫡子であり次期当主たるケイネスにとって余計なことだったろう。しかし、惚れた弱みというのもあるが、他の弟妹に可愛げを見つけることのできない幼いケイネスにとって、好いた少女――それがたとえ異母妹であろうとも、その不遇な仕打ちを見過ごすことができなかった。

ケイネスは目に入れても痛くないほどこの腹違いの妹を可愛がった。窘める周囲の意見も頑として取り合わず、その意見を潰すという目的によって彼は初めて威徳を得るべく積極的に努力というものを行ったほどだ。

無論、ただ甘えさせるだけではなく、年長者としての姿勢を崩すことなく時には叱り、時には厳しく接した。幸い、ベアトリスは物わかりが好く聞き分けもいいため、そうした機会は滅多となかったが。

ケイネスはわざわざ市井の本屋で調べ上げた“理想の兄弟像”というものを実現するために大いに励み、幼い妹の立派な兄たらんとした。

ある時、ベアトリスが魔術を学びたいとケイネスに頼み込んできた。

ベアトリスの魔術師としての素養は、魔術の才は不明であるがこと単純性能面においては、正直なところケイネスを軽く凌駕していた。

彼女は歴代アーチボルト家の血筋の中でも最多の魔力保有量を有しており、それを成す魔術回路は本数の多さもさることながら、さらに緻密な精度で形成される回路の優美な構造は、魔術協会のロードである彼らの目から見ても前代未聞の完成度だった。

その理由からベアトリスは妾腹とはいえ、アーチボルト家にとってベアトリスは無視できない貴重にして一点限りしかない財産として大事にされていた。当主が引き取ったのも間違いなくこれが理由であろう。

そのベアトリスが魔術を学ぶ。魔術の学ぶ危険性を魔術師であるケイネスは熟知していた。可愛いと思うなら学ばせないのが一番であろう。通常の家庭の感覚でいけば、そういう結論に達する。

しかしケイネスは名門アーチボルト家の嫡男である。当人の魔術の才を開花させることを至上の幸せと信じることのできる人種だった。

この時すでに刻印の移植は完了しており、名実ともにケイネスがアーチボルト家の若き当主となっていた。

また、魔術師としてベアトリスが力を得れば、彼女の境遇も多少なりとも改善されるのではないか。そうした意図をもって、彼はベアトリスにまず初歩的な魔術を享受した。

自分の慕う愛しい少女から先生と呼ばれることのなんと甘美で新鮮なことか。最初の内は純粋に教えることの楽しさを味わっていた。

そしてその至福の時間に少しの苦味が混じったのは、一体何時頃だったろうか？

ベアトリスは飲み込みが早い。それだけでなく、ケイネスには思いも寄らない視野と見識から彼を唸らせる応用技法を度々開発していった。

己では決してできない、いややろうとすら思えない発想力に始まり、綿が水を吸うがごとく速さで多種多様のカテゴリーの魔術を習得していく資質。

ベアトリスの才能はあらゆる面においてケイネス以上だった。先達であり師としての彼はそれを嬉しく思う反面、同じく魔術を学ぶ者として暗い劣等感を抱いていた。

もっとも、ケイネスは幼い義妹に自身のコンプレックスを見せる隙など一切作らなかったので、ベアトリスを始め全ての人間が彼のわずかな負の感情に気付くことはなかった。

そして劣等感を払拭するべくケイネスは奮起して修業し、自身もいっそう魔術の腕を上げていった。

相対的にベアトリスの腕も上がっていくが、それでも追い抜かれまいとケイネスは執念じみた向上心で歩みを速める。その師弟関係は、師による一方的で熾烈な修業競走に陥っていた。

それでもケイネスはベアトリスが愛しくて堪らなかった。彼女と

過ごす時間を大切にした。弟子として、義妹として。ただし愛する異性としての想いは秘して。

ベアトリスの才能はアーチボルト家の中でも次第に認められていき、その話は想わぬ形でケイネスの至福の時間を奪い取った。さる後継者不足に悩む魔術の家系へ、ベアトリスを養子に出すという形で。

ケイネスは一人の男として断固その話を拒絶するつもりだった。しかし魔術師であるケイネスの視点では、その話の正当性と魔術師としてのベアトリスの幸福を認めていた。

ゆえに、彼は先代当主のもってきたこの問題に対し、義妹の意向を尊重することにした。

そしてその結果、ベアトリスはわずか四代とアーチボルト家の半分の歴史もない新興の家系の跡継ぎとして、ケイネスと過ごした居城を後にした。

初恋は実らない。そんなことは魔術師でなくとも判っていたはずである。

しかし、この先もずっとベアトリスと同じ時を過ごすことに何の疑いも抱いていなかったケイネスは、この突然の別れに寂寞とした心境を打ち消すことができなかった。

恋心は家族の情に加えて“兄と妹”という体裁の壁に突き当たり、己より優れた才能と切磋琢磨したことで自身の限界に悩み、望んだ未来がその手から零れ落ちるという挫折に哀しむ。

こうしてベアトリスという少女との出会いは、ケイネスの心に傷を遺し、彼という人間を成長させる切っ掛けを作り出すこととなった。

ロードとして時計塔に入学し、破竹の速度で出世をしてもケイネスは何の感慨も抱かなかった。

降霊学科の主任講師となったことも、学科の最高責任者にして恩

師でもあるソフィアリ学部長の娘と許嫁になったことも、魔術師としてケイネスの栄華の経歴を築く上で欠かせない要素であったが、失恋の傷を宿して比較的真っ当な人間性を得てしまったケイネスにとっては、必要であっても渇望したものでは決してなかった。

魔導の秘奥という長途に臨む魔術師たちの中でも特に権威主義の温床であるこの魔窟において、ケイネスと許嫁ソラウ・ヌァザレ・ソフィアリの関係がどれほど嫉妬と羨望を浴びて輝こうと、あくまでロード・エルメロイの“立場”として満足するのみである。

そして、魔術協会のロードの一角を統べる者として、他者に弱みを見せることは絶対に許されない。ケイネスは魔術師らしい魔術師として、誰よりも優秀たらん魔術師として陰では努力を怠らず、時計塔の中を隙のない振る舞いで過ごしてきた。

そうして数年経ったある日、協会の最高幹部のみが出席を許される議事の場にて、冬木の聖杯戦争の話が上がった。

サーヴァントなどという死徒の祖を上回る兵器を得て、同条件の他六人と殺し合いをする儀式、それが聖杯戦争だった。

そんなものに出て確実に生きて帰れる実力をもつ者など、魔術協会の中でも数えるほどだろう。

名実ともに時計塔のトップ魔術師であったケイネスに白羽の矢が当たったのは、極めて自然な流れであった

ある並行世界――見方を変えれば本来の歴史――において、ケイネスは聖杯戦争に「勝って当然」の意気込みで参加する驕慢な男なのだが、生憎とこの可能性世界を生きる彼は己の力を盲信することはなかった。

ケイネスは傲らない。己が最高でないことを知っているから。

ケイネスは怠らない。己の手配と選択で未来が変わると知ってい

るから。

それゆえに、サーヴァントとして英霊を喚び出す際の触媒を、複数方面に働きかけて調達することにした。

不測の事態は予期せぬ形で必ず起こる。それが彼の持論であり、たとえ万全を期したとしても召喚するまでに何が起こるか判らないからである。

まず最初に優先して求めた触媒は、召喚されればクラスはおそらくライダーとして現界するであろう、マケドニアの大英霊の聖遺物。

次点で求めたのは限りなく最強でありランサーとキャスターの適性を持つ光の御子の聖遺物。

最後に求めたのが、セイバーとランサーの適性を持つ双剣二槍の騎士の聖遺物。

本命の聖遺物は滞りなく時計塔に届けられることとなった。

しかし、管財課の手違いによって聖遺物は不肖の弟子であるウェイバー・ベルベットの手に渡り、彼とともに時計塔から消え失せてしまった。

この報せにケイネスは泰然自若を崩さずに受け止めるも、胸の内では小さく驚いていた。

まさかあの見習いがせいぜいのウェイバーが、このロード・エルメロイに届けられた運搬品を奪い去る度胸があるなどとは。

ケイネスは時計塔のエリート魔術師である。そのエリート像を保つためにも、講師として弟子たちに接する時は、努めて魔術師の模範たらん態度で臨んでいた。

ウェイバーはそうしたエリート視点によって一魔術師として見た場合、非才で凡庸な少年であった。そのため、周囲同様に彼を軽侮した態度で恥辱を与えてきたことは、否定しようのない事実であった。

ただし、内心でケイネスはウェイバーのことを認めてもいた。無論、魔術師という観点とは異なるのだが。

まず目を見張ったのが書の内容を把握して明快な言葉でまとめる技術だった。

若いながらも熟練の魔術師が苦心して理解する魔導書のレポートをあっさりと提出してきたのが、その才能を知る最初の機会だった。

その後、こき使う形にはなったが直接や人伝に命じて様々な課題をさせてみたところ、人に教え導く講師としての才能はケイネスを上回るものをもっていると確信した。

そうと判れば、ウェイバーを講師とするためにケイネスが目論むのも無理はなかった。

いずれケイネスも講師を退く時がやってくる。ならば後継者として次代を育てなければならないのだが、その人選も容易ではない。

そこで魔術師としての前途がほとんどないであろう上に教え手としては逸材であるウェイバーへと期待は向かう。

そのためにウェイバーを陰ながら支援しようと画策した矢先の強奪と逃走であった。

ケイネスとて原因は理解している。ウェイバーのレポートを破り捨てたのが直接の原因であろうと。

もっとも、ウェイバーのレポートは着眼点は悪くはなかったが、肝心の術式など実践部分の構想があまりにもお粗末だったために机上の空論止まりの内容で終わっていた。

ケイネスは魔術師としてのウェイバーをその時完全に見限ってしまい、講師の道を歩ませるために、魔術師の道を諦めさせる腹積もりで、辛辣でいやらしく当たったのだが。

一応、流石に悪いと思って破り捨てたレポートは修復した後に添削して、次に来た時返すべく書棚の一つに挟み込んでいた。全く来ないところを見るに、やはり言葉が足りなかったらしい。

よくよく考えてみれば、ウェイバーを講師にしたいのはケイネスの都合でしかない。それも時計塔のエリート魔術師としての都合で、である。

この時ケイネスは、己が知らず魔窟の闇から滴る毒に侵されていたのだと気付いた。

ベアトリスと過ごした日々を思い出せ。彼女を失った反動でここまで耄碌してしまったというのか。

自らがウェイバーに取り続けていた態度と言動が、いかに相手の反感と憎悪を煽るものだったのか、ここに来てようやくケイネスは悟った。

そうなると、秀逸さを取り戻したケイネスの明敏な頭脳がウェイバーの気性を客観的に見ることとなり、聖遺物を強奪したウェイバーの目的をおおよそ看破してしまう。

ウェイバーの行動目的はおそらくケイネスと時計塔全てへの意趣返し、即ち聖杯戦争に勝利の栄光を得ることではないか。

ケイネスは難儀な仕儀となった事態に苦慮した。こんな殺し合いでせっかく見つけた後継者を失うのも馬鹿らしい話である。

しかし、その原因がケイネスの言動にある以上、彼が弱音を吐くことは許されない。

聖杯戦争におけるケイネスの役目に、ウェイバー・ベルベットを連れ帰るという目的が加わった瞬間である。

ウェイバーを確保したら、当然ながら罰を与える。なにせ聖杯戦争に赴くケイネスの生存率を著しく下げる所業をなしたのだから。その時、自分は生来のやや陰湿で執念深い部分を抑えることができるだろうか。

もっとも、ケイネスの責任問題とはいえ、師に噛み付いて殺し合いの戦争に参加するのだ。

敗北した以上は、ほんの少し生まれて来たことを後悔するほどの

責め苦を味わわせるなど、敗者の惨めさと合わせて甘んじて受けてもらおう。
その後は飴として待遇改善と後継者教育、さらに次期講師の地位を約束すれば問題はあるまい。

ケイネスの方針は決まった。あとは準備に励むだけである。
しかし、幸先の悪さを物語るように、本命と同じく次点であった光の御子の聖遺物を彼が手にすることはなかった。
こちらは単純に人脈の限界であったため、誰のせいでもない事態である。最悪触媒なしでも召喚はできるため、それに較べれば次々点の聖遺物が届いたのはマシと言えるだろう。

それにケイネスは正史とは違って用心深い。何より視野が広かった。そのために保険として聖杯戦争のシステムの改竄も、本来の歴史で行うはずだった『サーヴァントへの魔力供給を他者に肩代わりさせる』というものではなく、『バーサーカーとすることなくステータスを強化する』という方針を取っていた。
どうせ始まりの御三家それぞれも、何らかの反則を行っているのだろうと予測するケイネスは、長年の努力によって培ってきた手腕を、降霊学科の現最高術者として遺憾なく発揮することとなる。

◇◆◇◆◇◆◇

月下のアイルランド某所にて、許嫁であるソラウ・ヌァザレ・ソフィアリとともに魔方陣の前に佇み、互いに厳かな面持ちで英霊召喚の儀式の最終確認を執り行っていた。

唱和する二人の詠唱の完了と同時に、召喚陣の内側に破壊的な竜巻が吹き荒び、フィオナ騎士団最強の騎士がサーヴァントとして召喚される。

「ディルムッド・オディナ、聖杯の寄る辺に従いマスターの槍となるべくランサーのクラスとして参上いたしました。貴君が私のマスターに相違ございませんか？」

二人の耳に届く低い美声には、契約前の騎士に相応しい厳粛な響きをもっていた。

その声は召喚によっていまだ漂う白煙と魔力の荒れるこの場を荘厳さで浄化するかのようである。

煙が晴れると、眼前の陣中央では緑の槍兵が紅と黄の二槍を捧げるように手前に置き、一部の隙のない拝跪で返答をただ待ち続けていた。

「うむ。私が貴公をサーヴァントとして喚び出したケイネス・エルメロイ・アーチボルトだ」

「はっ。主のご尊名、しかと賜りました。このディルムッド・オディナ、全身全霊を賭して必ずや主の御前へ聖杯を捧げましょう」

臣下の礼とともに、聖杯戦争のマスターとサーヴァントというだけでなく、今生の主と騎士という面においても契約は正式に結ばれる。

人の域を遥かに逸脱した存在である英霊の恭しくも堂々としたその様子に、ケイネスは事前に調べ尽くした悲劇の騎士の忠義一徹の逸話が真実であると納得した。

確かにグラニア姫の聖誓（ゲッシュ）によって、主フィン・マックールと彼の率いるフィアナ騎士団を裏切る結果に陥ったが、ケルトの英雄にとってゲッシュがどれだけの威力を持つかぐらいはケイネスとて知っている。

ケイネスは自身の喚び出したサーヴァントが、己の手足の延長のごとく忠実に動く勝手の良い駒であることを実感する。

「まず貴公の主として問わねばならぬことがある。ランサーよ、貴公が聖杯に希う望みはいったい何だ？」

「恐れながら、私が聖杯に託す望みはありません。此度の召喚に応じたのは、生前貫くことができなかった忠義を貫き通すがため。ただ騎士として再び主を戴き、その槍となって戦い抜き、仕える主に最後まで忠誠を尽くしたい。そして今度こそ、騎士の誉れを全うできれば、これに勝る幸福はありません」

しかし、思惑は覆される。その言葉に偽りがないとすれば、これほど魔術師と相性の悪い英霊もいまい。

これならば陰働きに特化したアサシンか、同じ魔術師であるキャスターの方が使い勝手としてはマシというものだった。

ケイネスは内心の失望を、それが勝手な期待だったのだと自身を諫めることで、完全に捨て去ることに成功すると、気持ちを切り替えて眼前のサーヴァントに問い掛けた。

「貴公の悲願は、生前の悲運を贖うことか」

「はっ。御意にございます。理由はどうあれ、生前の私が主を裏切ったのは紛れもない事実。されど、今生にて貴方様という主を得られた今、騎士の本懐を遂げる最後の機会――」

「耳当たりの良い口上ばかりを謳うものだな？　ランサーよ」

哀愁と決意の込められた台詞を遮り、ケイネスはいまだ傅くランサーを見下ろして語りかける。

「伝承と実像をこの目にして、貴様の望みが真実であると私は断言する。認めるぞランサー。

だが貴様の言う騎士道とやらでは、何も知らぬ出会ったばかりの者を主と仰ぎ、無窮の忠節を尽くすというのか？　であるならば、それはこの私への侮辱と受け取ろう。

要は誰でもよいのだろう？　貴様を自己満足させるための御輿に担げるのであれば。

悪いが契約を破棄させてもらおうか。そんな騎士道ごっこの安い忠誠と命運をともにするのではかなわないからな」

「――っ！！　恐れながら主よ――っ」

「ケイネスだ。私を呼ぶ時は名を口にすることを許そう」

「ありがたき幸せっ！　ケイネス様、恐れながら申し上げます。まず私の言葉と望みをお認め下さり恐悦至極に存じます。
そしてケイネス様の気高き意志とご慧眼にお見それいたしました。仰る通り、私はただ忠節を全うする機会のみを望み、先ほどまでその悲願が叶ったのだと愚考しておりました。それがどれだけ不忠であったか、ケイネス様のお言葉で蒙が啓かれた思いです。
だからこそ申し上げます。ケイネス様こそ私の無二の主であると。何卒このまま御身の下で槍働きを全うさせて頂きたく願う所存。どうか、私にケイネス様のお力となる機会をお与え下さい」

ランサーは余計なことは一切口にせず、主を侮った大罪を雪ぐ機会をひたすらに懇願した。
そんな己のサーヴァントを見下ろすケイネスは、この英霊が死すらも厭わず自身にその忠節を尽くすことに関しては疑いを持っていなかった。
上下関係を明確にするために発言の粗を突いてやったりもしたが、そのおかげで悲運にして忠義一徹の騎士ディルムッド・オディナの真の忠誠を得る前段階までこぎ着けられただろう。
聖杯戦争を戦い抜く上で、彼はケイネスに認められようと必死にその槍を振るい、忠義の成果として聖杯を勝ち取るべく獅子奮迅に戦場を駈け抜けるはずだ。

最後の一押しは、ランサーの望む騎士道に相応しい主を演じることだろうが、それは中々に難業であるとケイネスはわずかに危惧した。

このサーヴァントの精神的報酬を支払うためにある程度は正道王道に則った戦略を練らなければならないし、奇襲や暗殺などの卑怯な畜生働きの封殺は、時にはそれが仇となって危難を呼び込む因となろう。

なにせ聖杯戦争に参加するマスターは海千山千の魔術師たちである。おそらく参加するであろうウェイバー自身はその限りではないが、不肖の弟子も喚び出す英霊によっては効果的な戦略で立ち回り、脅威足りうる戦術で翻弄すること請け合いだった。

そんな敵陣が六つもいるというのに、正統派の戦い方に拘泥するのは命知らずも甚だしい間抜けのスタイルであるが、それが結果的にこのサーヴァントの性能を十二分に引き出すというのならば、騎士の主という面倒な役目を担うのも吝かではない。

「よかろう、ディルムッド・オディナよ。貴公の忠義が本物であると私に知らしめてくれ。その槍で私に迫る敵の尽くを屠り、この手に勝利をもたらすのだ。そのための褒美として、私は決して貴公の栄誉と誇りを傷付けるような命は下さないと誓おう」

「おぉお……勿体なきお言葉を戴き恐縮でありますっ、ケイネス様」

拾われたばかりの人懐っこい捨て犬のように、ランサーはその瞳に歓喜を宿して再度頭を下げる。

それを眺めつつ、ケイネスは冷然とした観察眼でランサーのステータスを吟味し、この速度判定ならばそれだけで立派な武器となる

ことに納得した。

ケイネスが取った小細工は単純だが極めて効果的なものばかりだった。

まずサーヴァントを召喚し、契約する段階でマスターの権限を二人に分けることで、二人分の魔術師の資質をもってサーヴァントの初期ステータスを決定づける。

この策によって、ケイネスとソラウの両者の資質に見合ったパラメーターを得ることができる。

令呪にも工夫を凝らし、ケイネスの手の甲に描かれた紋様と全く同じものがソラウの右手にも刻まれている。彼女の右手のものこそ本物の令呪であり、ケイネスの右手に残った紋様は令呪とサーヴァントを中継するための基点でしかない。

小細工を弄したことによってソラウがマスターとして認識される可能性もわずかにあったが、結果としてランサーが問い掛けたのはケイネスだったことから、問題なく機能しているようである。

そしてもう一つの小細工は、初期ステータスの維持である。サーヴァントはその土地の知名度によって地形効果が得られることが報されているが、聖杯戦争の舞台となるのは極東の島国の一地方都市。そんな島国では、その土地の英雄でもない限り滅多に知名度の恩恵など得られようはずもない。ならばとケイネスが取ったシステムの改竄こそ、召喚時に得た地形効果によって得たパラメーターのプラス補正を永続維持するというものだった。

そのためにわざわざアイルランドくんだりまで来て召喚をしたのである。この二つの小細工による強化策を取ったことで、ランサーのパラメーターは生前とほぼ同等にまで高められたと確信し、時計塔で屈指の実力者であるケイネスはそれなりの満足と自負を持つに至る。

「面を上げろランサー。紹介しよう。私の隣に立つ女性の名はソラウ・ヌァザレ・ソフィアリ。彼女もまた貴公のマスターであり、私とともに貴公に魔力を供給するパートナーだ。そして許嫁でもある。私と同じく彼女も主として遇し、その槍で守り抜いてくれ」

「はっ。主の仰せとあらば、必ずやケイネス様とともにソラウ様をお守り通します」

「ソラウ、君もランサーに言葉をかけたまえ。沈黙は貞淑を体現するが、紹介が済んだ以上は言葉を交わすことこそ礼儀となろう。ソラウ、聞いているのかね？　ソラウ――――」

「……えっ！？　あ、うん、聞いてる。聞いてるわよ……？」

ケイネスは頬を朱に染めてランサーから目を離すことのできないソラウの様子にある確信を持ち、ランサーはソラウに様子を生前のグラニア姫を重ねて、またもこの顔の呪いによって主を失う未来が待っているのかと、その麗々たる美貌を青ざめさせる。

「驚いたな。ソラウの抗魔力ならばランサーの魔貌の効果を無効化できる。にも関わらず一目惚れとは、ランサー、君も隅に置けないな」

「ケイネス様っ！」

「構わんよランサー。ソラウ、婚約を破棄するから、君の思うとおりにランサーに求婚したまえ」

「えっ？　えぇえっ！？　婚約破棄？　いいのケイネスっ！？」

「元々私たちの間に愛はないし、幼少からの顔馴染みでそれなりに気心が知れているのとお父上の面子を潰さぬために諒承したが、君だって別に私のことを好いているわけではないのだろう？　望む相手と結ばれぬ不幸は私も理解しているつもりだ。

どうだろうランサー。君さえよければソラウの愛に応えてやってくれないだろうか？　無論のことこれは強制ではないし、君もソラウも出会ったばかりで彼女の気持ちに応えるのにも断るのにも、時間が必要だ。幸い冬木の地に赴くまでまだ時間もある。私のことは気にせず二人の時間をもってゆっくりと考えたまえ。結論を急ぐことはないさ」

心に癒えぬ傷をもつがゆえか、ソラウの様子から過去の己を顧み、その傷を刺激されたせいか、ケイネスは饒舌に二人に言葉をかけると、ソラウの背を後押しした。そして目線ではランサーに謝罪し、さらに無碍に扱わないで欲しい旨をパスを通じて念話で伝えた。

婚約者を奪われる形となったというのに妬心を微塵も見せず、本心から伝わった念話の言葉から、主の考えが言葉通りであるのだとランサーは悟る。

そして思うべきではないことを思ってしまった。もしもフィンが

ケイネスのような御仁であったならば、と。生前の主へ不服をもった覚えはなかったが、それでもその考えが黒い小さな棘となって胸の奥に引っかかった。

ランサーは二人の主を重ねて考えることはどちらの主にも許されざる愚弄であり侮辱であると自戒し、己の浅ましさを恥じた。

ケイネスはその様子に黙礼し、義妹であった少女の幼い容貌を思い浮かべた。

このベアトリスというイレギュラーがいなければ、ケイネスはソラウにこそ一目惚れしていただろう。

しかし、この世界ではその歴史を辿ることはない。そのため、彼はソラウがランサーに一目惚れをしたことにも目くじらを立てて嫉妬に怒り狂うこともなく、逆に極東の島国でいうところの月下氷人になったつもりで、二人の仲を取り持つことにした。

ケイネスはその場を辞すると、子供のようにランサーに求愛するソラウの声と、ケイネスの説明からそれを即座に拒絶するのもまた不忠であり礼を失すると考えるのか、ランサーの冷静且つ説得まがいの戒めの言葉で彼女に応対する声が聞こえてくる。

ランサーのサーヴァント、ディルムッド・オディナは、ケイネスとソラウが生前の主フィンとグラニア姫と違うことに理解しつつも、生前の最期からいまだ気持ちを切り替えることができないでいた。

それを尻目に、ケイネスは聖杯に願う望みをランサーの受肉にするべきかと、野次馬として面白がるように思案した。

四：二槍（後書き）

風邪を引いたり忙しかったりで書く時間があまり取れませんでした。しかしそろそろ新話ぐらい上げておかないと自分のモチベーションが完全にダレる可能性もあったので、急いで上げてしまいました。魔改造ケイネス（笑）と強化ゼロランサー。実は彼らが主役とかゆーことはないです、はい。ただ、あんまり不幸になって欲しくないとは思います。次回はランサーＶＳセイバーまで行きたいですがががが；

※意図と違う文章の間違いを指摘して下さった方々まことにありがとうございます。修正させていただきました。
というか、また「あ、直しとかなきゃ」って思って直すの忘れていた箇所……あぶぶぶぶ；
あと感想返しは次回更新時にでもさせて頂きます。ケイネス効果が予想外の反響で悲鳴を上げておりマスＤＥＡＴＨ。

五：準備

寒気が心身に染み込む真冬の昼下がり、山の稜線を下るからっ風は、大地を隠す落ち葉を舞わせて景観を刻一刻と変化させていた。抜けるような空の高さとその蒼さが、絶好の洗濯日和だと教えてくれる。事実、目の前では干された寝具や洗濯物が、山風によって緩やかにはためかせていた。

ウェイバーはフロントウィンドウの内側から揺らめく洗濯物を眺めながら、運転していたバンを地下一階の車庫に入れる。日の差さない車庫は寒く、車内のヒーターで弛んでいた身体を震わせながらバンのドアを全て開けて、荷物用エレベータに買い込んだ大量の食糧を積み込んだ。

買い込んだ量が量なためこの作業だけで数分を要し、運び終わる頃には肌着が汗で湿っていた。箱で購入したアイソトニック飲料の一つを段ボール箱から取り出して喉を潤し、一階行きのボタンを押した。

一応人間も乗り込めるしそのスペースも空いていたのだが、ウェイバーは自分の汗の臭いが篭もるのではないか、その臭いを同居人が嗅ぐことになるのではないか、と下らない心配をして、買い物で疲れた身体を叱咤して一階へと上がる。

「朝から行って半日近くかかるなんて……わりと人遣い荒いよな、アイツ……」

九時過ぎに車で出発したというのにも関わらず、ただの食糧調達でこれほどの時間を費やすことになるとは流石の彼も思わなかった。いや、多少の予想はしていたがここまでとは――。

なにせ本日ウェイバーが購求した物品は、日持ちのする保存食料だけではなかったのである。

キャスターの方針で日に三度は彼女が料理を作り、ウェイバーがそれを食べるという、まことにサーヴァントとしては呆れるほど食事にこだわりと情熱を見せてくれるのだ。そのために生鮮食品も大量に購入することとなった。

そのこだわりに正当な理由もあれば、ウェイバーも断ることはできない。

ウェイバーからキャスターへの魔力供給ラインのパイプは細い。必然、供給される量も微々たるものとなっていた。

この点に関して、キャスターは事実をただ事実として淡々とウェイバーに説明した。

確かにウェイバー・ベルベットの体内で生成する魔力の総量は少ない。そしてその少ない魔力はたとえ霊体化していようとも、絶えずキャスターに供給しなくてはならないのだ。

魔力が枯渇すれば、待っているのは死である。そしてキャスターには限界量ギリギリまでマスターから魔力を搾り取ろうという意思はなく、ならば食事の質と量、そして拠点とする土地の地形効果によってウェイバーの魔力生成を活性化させようというのが、彼のサーヴァントの目論見である。

パラメーターにこそ変動はないが、それでも魔力の供給量は概算で三倍近くに跳ね上がるのだという。それでも元の量が量であるから、まだまだ他のマスターより低いという見積もりだった。

ウェイバーはこの提案に思わず反駁した。魔術師として、マスターとしての己に致命的欠陥を突きつけられた思いだったからだ。

しかし、血気盛んに自己弁護する未熟な主に、当の彼女は苦笑して言ったのである。“私がマスターだった時はそもそも自分のサーヴァントに魔力供給することすらできなかったへっぽこだったのだよ？”、と。

そうして語られたのは、彼女がいかに己のサーヴァントに迷惑をかけたかという失敗談に占められた過去のエピソードだった。

己の恥部を赤裸々に暴露するその話は、ウェイバーの視点で聞いても惨憺たる内容だった。

素人同然の半人前未満という、三流どころか五流に位置付けられるであろう状態で、聖杯戦争のマスターとして巻き込まれたというエミヤ・シロ。

それが最終的には現代社会で英霊にまで上り詰めたとあっては、彼女のマスターとして負けていられないし、自分はまだ若く未来があるのだと信じることができた。

そして未来を得るためには、まず聖杯戦争に勝ち残り、生き残らなくてはならない。ならば彼女の提案通りに、己の現在の欠点を補う手段を取るのは必要なことだろう。

もっとも、互いに魔術師同士ということで、足りないならば他から持ってくればいい、という考えの下、冬木市の住民を襲って魂喰いをするという選択肢は、可能性として思い浮かびはしても、それを彼らが取ることはなかった。

ウェイバーはもともと身一つで冬木の地にやってきたとはいえ、当初は征服王イスカンダルという最強の手駒を召喚する腹積もりだったのである。

そんな姑息で面倒な真似をしなくとも勝って見せるという意気込みがあったし、魔術師として潔癖なきらいのある人格を有していたため、魂喰いという手段などそもそも選択肢の内に入ってすらいな

かった。
　また、キャスターも魔術師とはいえ英霊らしく潔癖で、魂喰いなどという下種な方法で魔力を得るなど思考の埒外であった。
　さらに他の陣営のサーヴァントがそれをするなら、ウェイバーが制止しようとも真っ先に止めに入るとまで宣言し、その情況で彼女を止めたければ令呪を使えとまで言われたほどである。
　そうした二人の方針から、ウェイバーは魔力を供給するために三食彼女の手料理を食べることになった。そして美少女を侍らせて世話を焼いて貰うという、恋人の一人ももったことのない少年にとっては過分なほど、男やもめが求めて病まない羨望の生活を送ることとなる。

　しかしながら、戦争に準備は付きもの。そして彼らの陣営は総合戦力で他に劣り、そして弱い。
　なにせクラスがキャスターであるのだ。その特典として保有するスキルは、まさに戦の前に準備を整えることに主眼を置いたものである。
　それゆえに、キャスターは開戦まで陣地作成スキルと道具作成スキルを駆使して出来うる限りの備えを進めなくてはならなかった。
　それでも食事に関してはキャスターが必ず用意し、拠点の清掃はキャスターが道具作成スキルで得た作り方で指示されてウェイバーが作り出した渾身作の使い魔に任せ、洗濯や買い物は彼自身が請け負っていた。
　そして本日、キャスター特製の魔力殺しの呪符を渡され、単独で買い物に出たのであるが。

――今日一日で食材の目利きのプロになった気分だよ。

栄養価の高い上にバランスの取れた料理を作るためには、まず食材ありきである。

ゆえに、生鮮食品を購入する際、ウェイバーはキャスターとの念話と五感共有によって徹底的な指導の下、己のサーヴァントが納得する食材を得るためにこき使われるハメに陥ったのだった。

キャスターのありがたくもない微に入り細に渡る一流シェフもかくやの視点からもたらされる指導の結果、肉や野菜、魚介類に果ては乳製品やワインのブランドまでを選び抜くこと丸四時間。ようやく帰宅を果たしたウェイバーは、随分と安請け合いをしたものだと軽くはない後悔をしていた。

しかし、彼女の料理は旨く、そしてウェイバーの心身の調子を整えるのに一役も二役も買っていたのは彼も身に染みて実感するところだった。

おまけに道具作成スキルで毎回それなりの量の魔力を消費するキャスターに魔力を供給し続けていても、日常生活が苦にならないほどのスタミナのつく料理の腕前には脱帽するしかない。

内容は成人病とメタボリック体型間違いなしの高カロリーなものだというのに、それで健康を損なうことなくしっかりと栄養バランスの取れたメニューの数々だった。

こんな生活を送っていたら、もし聖杯戦争が終わってイギリスに帰ってからは、日々の食事が地獄になるのではないだろうか。

ウェイバーは詮のない危惧を汗と一緒に熱いシャワーで洗い流すと、湯冷めしないように暖房の効いた脱衣所で頭を乾かして防寒着に着替え、購入して来た大量の食材の整理と保存を頼むために、離れの物置小屋へ続く小径に足を向ける。

暫く歩き、本邸から小屋へと続く中間地点で立ち止まり、背後を振り向いた。

――でも、ここまで助けてもらってると頼み事とか断りづらいんだよなぁ……キャスターの料理は本当に旨いし……。

ウェイバーの眼前に聳えるように建てられているのは豪奢な邸宅だった。

近代的で斬新なデザイン、それでいて郷愁を感じさせる落ち着きを与える建築物。なにやらフランク・ロイド・ライトのデザインに傾倒した日本人が設計したそうだが、あまり有名な人物ではないという話を聞いても、ウェイバーにとってどうでもいいことだった。

邸宅はこの国で一時期に実体経済から逸脱して資産価格が異常高騰したバブル期に建てられた別荘で、銀行に騙されて購入した中小企業の保養施設だったらしいが、景気の下がった現在では金喰い虫のお荷物物件となり売りに出されて久しく、なかなか買い手の付かないこの別荘を購入したのがウェイバー――ではなく、正確には彼のサーヴァントであるキャスターなのだった。

この邸とその周辺四方３ｋｍまでが、キャスターが聖杯より与えられた結界構築能力――陣地作成スキルによって形成された彼女の工房であり領域であった。

半径３ｋｍの結界内の各所には、柄頭と鍔元に宝石を象眼されたアゾット剣を始めとした多種多様な“剣群”を地面や樹木、湖の底や岩に法則性をもって突き刺しており、それぞれの剣が具える神秘と魔力が共鳴し、それが霊脈と干渉し合うことで異界じみた空間の歪みを発生させていた。

その歪みは膨大な魂の持ち主であるサーヴァントの侵入経路を限定させ、仮にマスターやサーヴァントがその隙間を通ろうものならば、処刑場もかくやの罠が発動する仕掛けを施していた。

魔術師の工房らしく、その結界の機能は決して守りのためのものではない。外敵を攻撃するのためのものだった。そしてその威力は、

エミヤ・シロの特異な魔術を用いているために他の英霊をして、決して侮れるものではなかった。

また剣群の用途は結界構築だけに止まらない。突き立てられた数多の剣は霊脈に負担をかけない量のマナを吸い上げ、大半を結界維持に消費しているのだが、剣の内部に構築した回路によって、結界維持分とは別にマナを魔力に加工する機能も付与されていた。

そしてそれらの魔力は緊急時の補給用として、ウェイバーに渡されたアゾット剣の柄頭に取り付けられたルビーに貯蔵されてゆく。

短時間で溜まる量は微々たるものであるが、それが四六時中ともなれば、日を追う事にそれなりの量が込められていった。

生前は彼女も試したことのなかった結界魔術らしいのだが、どうやらクラス別スキルの恩恵によって、目的や用途を定めた結界の必要性を思った瞬間に、自身でそれをなせる手段が浮かび上がってきたのだそうだ。

キャスタークラスの付加スキルとはいえ、同じ魔術師として反則という言葉を叫ぶのを我慢できなかったウェイバーに罪はないほどの利便性である。

そしてキャスターの手段というのが――。

――なんてったって投影魔術なんだもんな……。固有結界といい、ホントにアイツってキャスター（魔術師の英霊）だよ。

キャスターの結界の内側とはいえ、彼女の切り札ゆえに不用意に口には出さず、心中で独りごちた。そしてキャスターの武装と宝具の秘密を明かされた時の自分の狼狽え振りを思い出して、溜息を漏らす。

内心の決意も虚しく、あの後すぐにも彼女の前で醜態を晒したのである。大声を上げなかったとはいえ、無様には違いない。気鬱も高じよう。

反面、ウェイバーはあの時初めて見せられた“現実を侵食する幻想”という鮮烈な光景を思い出して、一芸特化型とはいえ究極に辿り着いたエミヤ・シロという魔術師への憧憬に胸の奥を火照らせた。

◇◆◇◆◇◆◇

「キャスターの考えは判ったけどさ。いい加減そろそろお前の宝具とかスキルについてきっちり教えてくれないか？　市街を練り歩くにしろ陣地作成した場所に誘い込むにしろ、サーヴァントの力量が判らなきゃ僕だってどうしようもないんだからさ」

一夜を過ごしたラブホテルを出る前、キャスターと握手を済ました後、ウェイバーはステータス情報からは知り得ない能力についての詳細を訊ねた。

現状は互いに聖杯戦争の目的と方針を把握したため、一応は落ち着いた情況と言えるだろう。

ならば、そろそろウェイバーが気になっていたキャスターの能力を話して貰うタイミングが来たのである。

ウェイバーの問い掛けに対し、小道具とはいえ粗末に扱う淹れ方をした責任を取って、安物のインスタントコーヒーを文字通り苦い顔で飲み干したキャスターは、口直しとばかりに紅茶の準備をしていた流れるような手運びを止めることなく肯くと、湯を沸かしながらテーブルの対面へと坐った。

主従の間を中心に室内は微妙な空気が漂うこととなったが、ウェイバーは彼女の外見年齢相応の拗ねた表情を見なかったことにし、キャスターは雑な入れ方で味を損なったインスタントの味を自戒のために噛み締め、そしてようやくウェイバーと視線を合わせる。

「――――おほんっ」

ぱちぱちと瞬きすると、主の視線からその意を読み取り、銀髪赤眼の少女は面映ゆさからコホンとわざとらしい咳をする。

そういった仕草を反応に困る表情で見られ、さらに余計に咳をすること三度、ようやく落ち着いたのか、時すでに遅い凛烈とした清廉さを伴ってウェイバーと向き直り、その瑞々しい唇を開いた。

「やれやれ、とんだところを見せてしまった。これでは今さら勿体ぶるのも見苦しいな。うむ、隠すと互いの信頼に要らぬ罅を入れるだけか――。

ウェイバー、君の見えるステータス情報の宝具欄は現在未表記かね？　何も情報が無いのならば、今から宝具欄の情報を直に渡すことができるのだが。まぁ、直接見せるのが一番ではあるのだがね、生憎と私の宝具はお披露目するだけで洒落にならないほどの魔力を消耗するという弱点を抱えている。無駄遣いは控えるためにも、私

はマスターの取得する情報の追加を提案する」

確かに戦争に赴くまでの事前把握は必要なこととはいえ、キャスターの具申するような方法で容易に知ることができるのならば、宝具の実体を知るためだけに魔力を消費するのは、結果として無益な損耗であろう。

ウェイバーが二つ返事で受諾するとテーブル越しにキャスターの右手がウェイバーの眼前に迫り、その人差し指が彼の額に触れる。

そして頭の芯で音叉が鳴動するような錯覚とともに、脳裏を占めるキャスターのステータス情報の不足分が一変する。

■宝具■

【全て遠き理想郷（アヴァロン）】
ランク：EX　種別：結界宝具　防御対象：1人

【無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）】
ランク：F～A＋＋　種別：？？？？（※形態：固有結界）　レンジ：？？？？　最大捕捉：？？？？

瞬時に列記される宝具の名称とその神秘の格。それだけに止まらず、さらに意識の奥へとある映像が流れ込んで来た。

視界を奪うようにウェイバーの脳裏で結ばれた像は、瞬きする間にも満たない短い時間しか見ることができなかった。

しかし、焼き付くようなその強烈な印象を、彼はおそらく死ぬま

で忘れることはないだろう。

墓標のように雪原に突き立つ無数の剣。聖剣、魔剣、霊剣、名剣、ありとあらゆる形状と種類の剣がその世界に果てなく乱立していた。

そして、その世界に存在するのは剣だけではない。雪原の中央、丘の頂に屹立する氷塊の中に見えるのは、剣身を鞘に納められた一組の至宝。それが夕陽とともに暖かみのある黄金の光をもたらして、銀世界を金色に照らし出していた。

血塗られし歴史の垣間見える剣群の禍々しさと、それに負けぬ最強の幻想たる黄金の剣と鞘の神々しさに打たれ、ウェイバー・ベルベットは理解した。

彼女こそ、限りなく魔法に近い魔術の一つ、心象風景によって現実を塗り潰し、結界内部を異空間へと変じる大禁呪、固有結界という究極に到達した最高位の魔術師だということを。

あまりの事実にウェイバーはいまだ眼前の少女の力を見くびっていたのだと自覚した。

聖杯を破壊すると宣言したサーヴァント、第五次聖杯戦争を生き抜いたマスター、現代という英雄を必要としない時代を生きたにも関わらずその身を英霊に昇華させた未来の偉人。

それらの情報で味わった驚愕すら凌駕する奥の手こそが彼女の宝具だった。驚き通しとはいえ、さらなる驚異の秘密に彼の常識の針は振り切り、一周回って元に戻るという、宙を浮くような心境で逆に取り乱さずに済んだ。いわゆる、驚き過ぎると反応すらできないという状態だったのである。

ウェイバーは背もたれに体重を預け、静かに、それでいて長い吐息を吐いた。

「……そう言えば、固有結界って宝具扱いになるものなのかな

？」

「こうして該当する以上は宝具扱いで問題ないのだろうな。生前の私にあったのはこの世界だけ、とは言わないが、宝具が英霊のシンボルであるのならば、この固有結界こそが私の宝具と称して間違いはないさ」

宝具とは、人間の集合無意識で総括された各人の幻想――その英霊の生前の得物や異能、逸話などを骨子に象徴的特徴として昇華された武装の総称である。

キャスターの固有結界は生前幾度も使用された切り札であり、一般に秘匿される裏の世界においてはかなりの知名度をもっていた。

そのためにエミヤ・シロという英霊の宝具にカテゴライズされる条件は揃っていた。

もう一つの宝具は多用こそされず知名度もほとんどなかったが、生涯その身と同化させた身体の一部であるためにしっかりと登録されていた。

未来の英霊であるエミヤ・シロは知名度の恩恵が一切得られない地形効果によって、ウェイバーの未熟という要因以上に弱体化している。

その証拠にキャスタークラスの影響もあって、本来英霊エミヤが持たないはずのスキルのせいか、直感・魔力放出・カリスマのスキルが全て生前より1ランクダウンされていた。

地力の弱体化に較べ、鞘と固有結界の二つが何の劣化もせずに宝具欄にある以上、たとえアーチャークラスであろうとも、仮に欲張ってセイバークラスで現界しようとも、これらの宝具を失うことはないだろう。

ウェイバーは表面上は納得の色を顔に浮かべると、彼女の奥の手が備えるその特性の説明を促した。

「そう、か。それで、キャスターの固有結界の能力やもう一つの宝具のことも、詳しく頼んでいいか？」

「諒解した。まず私の固有結界の能力だが、それは剣、また武具に類する物の複製だ」

キャスターは左の瞼を閉じると、右手の人差し指で自身の右目を指差した。

「この両の眸で一度でもオリジナルとなる対象を視認すれば、刹那の間もなくそれらの性能・構成・歴史などあらゆる情報を解析し、君にも見せた“剣の丘”へ登録・貯蔵される。そして登録した武器を魔力で編み上げ、物質化させることでオリジナルと寸分違わぬ贋作を複製する」

キャスターは鳥が左右に翼を広げるように、左右へ両手を伸ばす。そして、瞬きの間もなくその手には二刀の得物が出現した。

鍔元に拵えた対極図の意匠が特徴的な、鉈のごとき厚みと身幅を持つ白黒一対の夫婦刀。大陸は中原の地で広く名を知られる干将と莫耶がそこにあった。

少女の小さな繊手には不釣り合いな、無骨にして機能美を備えた二振りの中華刀がテーブルの上へと置かれる。

「これは干将と莫耶と言う。甚大な魔力を消費して固有結界を展開せずとも、こうして投影魔術という形を借りて心象世界から特定の武装を取り出すことができる。固有結界から零れ落ちた中で最も私の得手とする魔術だ」

白と黒に染まる刀刃の出現に見開いたままの両の瞼が限界まで見開き、ウェイバーは我が耳を疑った。

聞き間違いでなければ、このサーヴァントは、このキャスターのサーヴァントはこれを投影と言ったのか？

「投影？……これが投影魔術だってっ！？　あ、あり得ない……」

投影魔術とはマイナーな魔術である。マイナーにはマイナーである所以があり、まずその非効率さが挙げられる。

概要を端的に言えばこの魔術はオリジナルの鏡像を自身の魔力で複製するというものなのだが、投影された複製品は術者のイメージで作り上げるためよほど精確にイメージしなくては形を成さない。

そも人間のイメージなど穴だらけであり、矛盾も孕めば一貫性も無い。その時々の環境と心理状態にさえ意識・無意識に関わらず容易に影響されるほど変動しやすいのである。

そんなイメージでオリジナルを再現しようとしても、性能も格も本物には確実に劣る。さらに術の持続時間は短い上に、使用した魔力の半分に満たない力しか持たないため、変換効率も酷いものだ。

消費対効果は全く割に合わない。

そのくせ術の難易度は高く、お世辞にも使い勝手の良い魔術では決してなかった。

元々は儀式で使う道具や器物のための代用品を用意するという用途で使う魔術であり、それを魔術で代用するぐらいならば、材料を一から集めて時間と手間をかけて複製品を作った方がマシでさえあった。

魔術協会の総本部である時計塔でさえ、この投影魔術の使い手は数えるほど聞いたことがない。

それが、ウェイバー・ベルベットの知る投影魔術の知識である。他の時計塔の魔術師に訊ねても同じような内容が返ってくるはずだった。

であるというのに、キャスターが投影魔術で作ったのだと告げる干将・莫耶の二刀は一向に消える気配がない。まずそれがあり得なかった。

世界は秩序を乱す幻想や矛盾を嫌う。目の前のキャスターでさえ、その矛盾に連なる存在だった。

この聖杯戦争でサーヴァントとして喚び出す英霊とは、一種の幻想の塊である。その英霊を召喚するために大聖杯は七つの匣（クラス）を用意することで、ようやく世界が異物を握り潰すという修正作用を誤魔化しているのだ。

そして投影魔術とは、魔術師が通常行使する魔術とは違い、等価交換の原則に従うことなく行使することが可能な術だった。

投影で現世に実像を結んだ物体は術者のイメージという幻想によって編まれているため、場合によっては世界には元来あり得るべからざる物でさえ実体化させることも出来る。しかし、世界から見ればこれは立派な異物である。

そして外界に現れた人間のイメージは脆く、投影した物品が長時間維持できないのは、その脆弱なイメージが矛盾として世界より修

正された末の結果なのだ。
だと言うのに、眼下のテーブルに載せられた武具は、世界がもたらす絶対の修正作用自体にかかっていないのか、その内包する魔力が時間経過とともに損なわれることなく存在し続けていた。

「いや、固有結界から零れ落ちたって言ったな……じゃあ。こいつは現実を幻想が侵食した存在、なのか……？」

「正解だ。言ってみればこれは固有結界の劣化品というところだな」

才能と技量と違い当人の自信と自負を裏切らないウェイバーの頭脳はようやく合点がいったのか、自身が洩らした言葉が真実であると納得した。
あり得ないと思いつつも、固有結界という反則技の解答を先に知らされていたために、道を過たずにキャスターの投影魔術を把握することができた。
視認しただけで対象を構成する存在情報の全てを解析できるのならば、イメージが脆弱だということもないのだろう。現実を塗り潰すという固有結界の作用も合わさり、結果として彼女の投影品は比類なき強度と存在力を得たのである。
そこまで納得することで、ようやく目の前の事象は彼の許容範囲に納まることとなった。

しかし、当の反則技の塊はさらに札を切り始めた。ウェイバーの精神の熱は、すでに上下の変動に悲鳴を上げていたが、自身がキャスターにその能力を詳らかにするよう頼んだ手前、根を上げるわけにはいかなかった。

サンドバックにされてテンカウント前ギリギリで立ち上がるボクサー（挑戦者）の心境で、ウェイバーは、卓上から二刀を取り上げたキャスターの告げる続きに意識を傾けた。

「ランクこそ低いがこれは高ランクの宝具とも打ち合える強度をもった逸品だ。無論、君に見せた世界の中に存在する剣は例外なくこうして投影できる。宝具欄に表示されているランクＡ＋＋というのが上限値だ。

そしてあの丘に登録されている武装は、そうだな――千は軽く越えるか。それを適宜取捨選択して作り出すことで、私はあらゆる情況に応じた武装を用意することができる。

これに私の投影と同じく固有結界の能力から零れ落ちた解析の魔術を用いることで、この聖杯戦争中、相手サーヴァントの武器や宝具を見ただけでその正体を看破し、その弱点となる武装を取り出して使用するといった戦術も可能だ」

サーヴァントとして召喚される英霊はある程度の知名度のある神話・伝承・歴史の偉人である。彼らはその生涯を何らかの媒体で記されるほどの有名の存在であるために、その最期となる情報もまた現代に伝わっている。死因や弱点についてもまた然りである。

であれば、相手の名から天敵となるモノを用意するのは至極真っ当な手段だろう。そのため、英霊は現界した己のクラス名を名乗って真名を秘し、その弱点を極力隠すのだ。

しかし、キャスターの異能と称するレベルの武具解析能力は、その聖杯戦争の定石を真っ向から覆す反則に他ならない。

これならば、巧く立ち回れば簡単に他六騎のサーヴァントの弱点を知ることができるかもしれない。

「投影した武具にも使い方は幾つかある。まず投影した宝具を仮初めの主として担うことができる。真名の解放を始め、その宝具を担ってきた歴代の主の技術と経験を模倣することも可能だ。

この近間の戦闘方法に対して、完全に中・遠距離武装として用いる戦い方もできる。直接一度に大量の宝具や概念武装を投影して弾幕として一斉射し敵に撃ち出す、または矢として弓に番えて射ることもな。

この戦闘手段はどちらかと言えば得意技でね、現界するクラスもキャスターよりむしろアーチャーの適性があるぐらいだ」

ウェイバーは自身の読みが少し当たっていたことに嬉しくなり、小さく拳を握る。接近戦を苦にせず、おまけに遠距離戦すらこなせるのならば、あのスキル欄がおかしいということもない。

しかし、聞けば聞くほどエミヤ・シロという英霊は度外れた反則の塊と言えよう。

軽く語ってはいるが、投影した贋作宝具とはいえ、英霊がその用途として説明する以上、額面通りの威力とは限らない。

戦車や戦闘機クラスが装備する機関砲のごとき弾幕、ミサイルのごとき弓矢の狙撃といった具合に、ウェイバーがいまだ直接見たことのないような、馬鹿げた破壊力を秘めているはずである。

また、宝具を担い解放できるということは、対人だけでなく対軍・対城宝具でさえ使用が可能ということである。

その火力を発動するための魔力の心配をまずしなければならないのではないだろうか……。

「もっとも、投影した宝具は複製だから、どうしてもオリジナルより1ランクほど神秘の格が劣化してしまうのが難点だな。自動的に

その威力も落ちるし、担う場合も本来の主の技量を十全に模倣することはできない。

それに神造兵装の類は、流石に解析による貯蔵は不可能だ。投影出来なくはないのだがね。それでも完全な複製は無理であるし、真に迫れても劣化品として投影するに止まるのだが」

そして報されるキャスターが投影できる神造兵装とは、〈約束された勝利の剣（エクスカリバー）〉、〈勝利すべき黄金の剣（カリバーン）〉持ち主に不滅の加護と絶対の防御力をもたらす〈全て遠き理想郷（アヴァロン）〉の三種だった。

もっとも、自身の宝具にまでなった〈全て遠き理想郷〉も当然として、〈約束された勝利の剣〉と〈勝利すべき黄金の剣〉の二振りも投影した時点で神秘の格は格段に低下する。

それでも元がどれも最高位の宝具であるため、劣化品であっても剣の丘に登録された武装の中では不動の上位に位置するのだが。

また、〈全て遠き理想郷〉はランクＥＸの規格外宝具であるため、身体の一部と化しているのと同時に剣の丘に真作が鎮座している状態を加味して、ようやく投影できる宝具である。そして投影した鞘は世界の修正によって、短い時間しか保たない。

〈約束された勝利の剣〉と〈勝利すべき黄金の剣〉は、衛宮士郎と同化した“彼女”の縁が因となって、聖剣二振りのイメージが鞘からシロへと流入し、本来出来ない無茶な投影を可能としていた。

もしエクスカリバーの姉妹剣たる〈転輪する勝利の剣―（エクスカリバー・ガラティーン）〉や〈無毀なる湖光（アロンダイト）〉をその目で視認したとしても、中身を伴わない張りぼてとしてしか投影することは不可能である。

「こんなところだな。あとは実際にその目で確かめてもらおう。私

は未来の英霊だから知名度の都合で生前に比して幾分劣化しているが、その弱体化もクラス別スキルを活用してカバーできる。そう悲観することもないだろう。

さて、ウェイバー。ひとまず拠点を準備しないかね？　全能を駆使してキャスターらしく陣地を作成してみせようじゃないか」

確かに何時までもラブホテルに陣取るわけにもいかなかった。ある程度は自分のサーヴァントの能力も、多大な精神的（肉体的にも）疲労と引き替えに知ることもできた。

あとは行動するだけである。サーヴァントに全面的に頼ることになるが、拠点を用意できないウェイバーは己の準備不足を恥じると同時に、キャスターのサーヴァントの手腕をこの目にできるのだと期待に昂ぶってしまう。

そしてこれからまず向かうマッケンジー夫妻のことを思い、苦味の生じる奥歯を噛み締めた。

「わかった。頼むキャスター。あと、荷物を取りに行きたいから、ある場所に寄ってほしいんだ」

お安いご用と快諾し、主従はラブホテルから出発した。この時キャスターに霊体化させるのを忘れていたため、マッケンジー宅に向かう途中で少年は青臭い後悔を味わうことになるが、それはどうでもいい事柄である。

◇◆◇◆◇◆◇

ウェイバーは召喚して一週間以上経つキャスターの得意魔術を思い、いまだ衰えることのない驚きと呆れの心持ちを捨て去ることができなかった。

しかし、その独特にして類い希な投影魔術によって助けられた面は数知れず、いや、彼女の投影魔術なくしては、ここまで立派な拠点を手に入れることもできなかったし、ウェイバーと彼女以外は容易く出入りのできないこの結界を張ることもできなかったであろう。

拠点を手に入れるためにキャスターが行ったのはまず資金の調達だった。

現存しない日本刀の業物を投影魔術によって具現化し、思わせぶりに贋作であると嘯いて――事実なので間違いではないが、敢えてこう言うことで余計に相手の目利きに力を入れさせ、結果として本物と寸分違わぬ彼女の投影魔術の業に魅入られてしまうのを狙った一種の詐欺、もとい思考誘導である――、目利きのできる骨董屋に持ち込む。

また、暗示で仔細の追求を躱した上に、相手の欲を適度に刺激する話術を駆使し、まんまと日本円で八桁の軍資金を手にしたのだ。

壊れない限りは真作と寸分違わぬ逸品である上に事前に贋作と知らせているため、問題が生じた場合、そこは自己責任だろう。

さらに生前の未来で得た伝手だという相手に国際電話をかけた翌日、東京は羽田某所のホテルに到着すると、相手持ちで貸し切られ

た最上階屋上フロアのロイヤル・ペントハウス・スイートの一室にて、聖堂教会の関係者らしき人物に宝具の投影品十数点を売り払うこととなる。

こうして、何かと金のかかる魔術の道へその身を捧げるウェイバーですら、その短い人生では到底お目にかかったことのない桁数の金銭を手にするに至った。

それは時計塔でのさばる名家の御曹司連中であろうとも、小遣い程度の額とはとても口にできない莫大な金額だったのである。

具体的に言えば市井の一般人が人生を二十回遊んで暮らしても使い切れない額――であることは確かだが、普通の人間がその金額を見たらまず思い浮かぶ用途は「国家予算」の類だろう。

掛け値無しの宝具、それも聖剣魔剣の類の対価ならば、それがたとえ贋作といえどもこの規模の金額がつくのは納得であるのだが、小市民的な金銭感覚を持つウェイバーは卒倒しそうになったほどである。

一体どこの金満好事家に売り払ったのだと口角泡を飛ばす勢いでキャスターに問い詰めたら、聞かない方が良いと親が子を窘めるようにいなされそうになり、意固地になって聞き出した。聞き出してしまった。そして無理に訊ねたことをすぐに後悔することとなる。

苦笑するキャスターによって教えられたその買い手の名とは、《死徒二十七祖》の一角にして《埋葬機関第五位》などという、異色の肩書きを持つ吸血鬼メレム・ソロモンというものだった。

三流魔術師であるウェイバーでさえ聞いたことがあるようなあまりのビッグネームに、仮にも征服王イスカンダルという大英雄の召喚をなそうとしたにも関わらず、彼は血の凍る心地を味わって腰まで抜かしてしまった。

それを無理のない反応だと宥めるキャスターの言葉にも暫く落ち着けなかったほどに、目の前に積まれた現金ケースと小切手の額が地獄への片道切符に思えてならなかった。

生前の知己とはいえ、自分のサーヴァントの交友関係は一体全体なにがどうなっているというのだ。

恐懼と驚愕で疑問に思うと同時に、本気で彼女の波瀾万丈を臭わせる生涯に心配をしたほどだった。

最後に、あくまでメレム・ソロモンが購入した理由は彼の趣味が秘宝蒐集であるため、美術品目的だということを知らされた。

世界レベルの大吸血鬼があれらの宝具を使用する心配がないというのであれば、ウェイバーもこれ以上相棒の行動に悲鳴を上げる必要もないだろう。

また、この時点でキャスターに振り回されることに一種の億劫さも感じていたせいで、細かいことと流すことにしたのだった。それでも精神の揺れ幅が平常時に戻るには二日を要したが。

そして様々な感情が冷めやらぬ間に東京からとんぼ帰りで冬木の地に戻り、ジャパニーズマフィア御用達の不動産屋でこの別荘を一括払いで購入したのである。

おまけに新都にある大型ショッピングモール・ヴェルデにて、様々な生活用品と食糧を大量に購入し、チップを弾んで家具など嵩張る物もその日の内に宅配させてしまい、雨風を凌ぐには過ぎた根城を手にしたのだった。

二週間近く寄生状態で暮らしたマッケンジー宅とは較べるべくもない環境だろう。

それでも、こういう至れり尽くせりの情況変化の末に新たな拠点に住み込んで暫くした後、ふとあの家で老夫婦と過ごした時間も悪い物ではなかったのだと思うこともしばしばだった。

マッケンジー宅にはラブホテルから骨董屋に赴く前に寄って行き、ウェイバーが結局夜の内に帰宅をしなかったことを我が身のごとく心配する夫妻に謝罪すると同時に、彼は躊躇うことなく暗示をかけた。

その時、わずかに握った拳が震えたことを、霊体化した彼のサーヴァントは気付いていたが、決して口に出すことはしなかった。

しかし、マッケンジー宅を離れてから実体化し、言葉は発することなく軽く何度か彼の肩を叩いたのは、キャスターの余計なお節介だった。

互いにそれが余計なことであったことは判っていた。しかしキャスターは敢えてそれをし、ウェイバーは無言でなされた行為に、錘を呑み込んだかのような胸の重みが少し軽くなった気がして、キャスターへぶっきらぼうな礼を述べた。

それからキャスターが投影した何の魔力も感じられない短剣を非常時の警報代わりに設置するのを見届けると、マッケンジー宅の周辺には一切近づいていない。

巻き込むまいとそう決めた以上、少なくとも聖杯戦争が終わるまでは近付いてはならないのである。

もし無事に勝ち残ることができたなら、改めて謝罪をしに行きたかった。

この別荘に拠点を移した日に、そうキャスターに話したら、その時は保護者として一緒に謝ってやろうと、頭を撫でられた。

現状を客観的に鑑みれば、確かに従者ではなく保護者であるという彼女の言葉を否定することもできず、マスターとして少し傷付きながらも、一緒に来てくれるという宣言に感謝してしまった。

その時のことを思い出してさらに頬を火照らせると、誤魔化すように小径を駆け出し、物置小屋のドアを勢いよく開けて中に入る。

「キャスター帰ったぞ！　手が空いてるなら買って来た食材をどうにかしてくれっ！」

防音魔術の境界を抜けたため、製鉄所か鍛冶場のごとく鉄を叩く大きな音が小屋の中に響く。

その音に負けないように大声を張り上げ、ウェイバーは小屋の外観とは明らかに違う空間となり、広大な作業場と化した部屋の中央で熱心に槌を振るう作業着の少女に声を掛けた。

この建物の内部空間こそ、容積の歪みを用いた空間歪曲の魔術によって広々と確保された、キャスターの真の意味での工房だった。

ドアを開けるだけで入ることの出来る工房というのは、防諜面から見て非常に無警戒極まりないが、キャスターと彼女のマスターであるウェイバー以外が侵入した場合、工房を形成している剣群の全てが“壊れた幻想”によって尽く爆発する仕様なため、たとえサーヴァントといえども無傷では逃れられないトラップとなっている。

それにここまで侵入された時点で、この拠点は破棄することは予め決められていたのである。そのために第二第三の拠点も別の不動産屋にかけあって用意している。

所詮は仮宿、手放して惜しいものでもないのである。そういった理由のため、リスクに関しては度外視してこの工房は突貫工事で作り出されていた。

それでもキャスターは生前に得られなかった贅沢な工房を陣地作成スキルで手に入れるや、まず生前の所持品の実体化によって炉を始めとした鍛冶設備を用意し、投影した道具によって物作りに熱中するようになったのである。

そしてそのまま、調理と食事と風呂以外はこの工房に篭もりきりとなってしまった。

サーヴァントの身であるから睡眠――正確には食事も必要としないのだが、そちらは道楽でありウェイバーに付き合うという意味が強い――に時間を取られなくても済むため、スキルの恩恵と生前の経験によって、必要な道具や器具をあれよあれよという間に拵えて

はそれらを活用し、さしたる時間をかけずに鍛冶場としての体裁を整えていったのだ。

今ではマスターですら羨む魔術師の工房がそこにあった。もっとも、キャスターの得意分野が武具作りだったため、ウェイバーがそのまま十全に活用できる場ではなかったのだが、この工房ができてからは彼も一日の半分以上をこの中で過ごし、キャスターの道具作成の合間に彼女の技術を見て盗めるものは盗み、時にはともに作業をして物作りの教導を受けることとなった。

大声が届いたのか、それともラインによってウェイバーが工房に入ったのを知覚したのか、キャスターは槌を叩く手を止め、立ち上がってウェイバーを出迎えた。

「おかえりウェイバー。雑用を任せてすまなかったな」

まったくすまなさそうではない態度でそう言うと、被っていた頭巾を解く。すると、頭巾の中にまとめられていた白銀の髪が零れ落ち、玉の汗が浮かぶ頬にかかって淫靡な雰囲気を醸し出す。

そもそも、ウェイバーにとって物作りをしている間のキャスターというのは、総じて艶っぽい雰囲気を持っていた。

本当に作るという行為が楽しいのか、嬉々として槌を叩き、弾むような視線をかけて彫金を施し、謡うような明るさで細工を組み上げていく。

形成す物を作り上げることに喜悦を感じるその様は、さながら秘薬を精製する魔女のごとく妖しく、また趣味に傾倒する数寄者か、命を懸けて作品を仕上げる芸術家か、面白い玩具をいじくり回す幼子のいずれか、あるいはその全てを思わせた。

さらに汗を吸った作業着も隙間なく肌に貼り付いて、少女が女へ

と成長してゆく貴重な一時を現す肢体のラインが容易に見て取れる。思わず生唾を呑み込むほどの扇情的な姿だった。

入り口から向かって右側の炉から洩れる熱で温まった室温と、“女”を感じさせるキャスターの艶姿に動悸が速まり顔中に血の上るのとが相まって、ウェイバーはシャワーを浴びたばかりだというのに総身に汗の浮かぶのを止められなかった。

後者の後ろめたい原因を決して悟らせまいと努めて平時の態度を取りつつ、それでも首から下を見ないようにキャスターの顔を見つめ、誤魔化すように文句をつけた。

「キャスター、考えたんだけどお前が行けば一時間で帰って来れたんじゃないのかっ？」

「否定はしない。が、先ほどまで本当に手が放せなくてね。悪かったよ」

財布の紐と胃袋を握っている保護者であり、現在のウェイバーは頭が上がらないキャスターだったが、四時間も指示通りに買い物をさせられたウェイバーの身になって考え、流石に悪いと思ったのか今度は頭を下げるなど謝意の見て取れる態度で謝った。

そして完全に作業を終えると目線でウェイバーを促して、奥で白い布を被せた“作品”の方を向く。

「ついさっき組み上がったところだ。見るかね？」

その顔には見覚えがあった。ウェイバーに紅茶を煎れた時に見せる顔、料理をウェイバーの前へ並べる時に見せる顔、そして自身を生前はマスターであったと明かした時に見せた顔。つまりは、ウェイバーの反応を楽しもうとする際に見せる稚気の篭もった表情だった。

「――見るよ。っていうかお前、見せたいんだろ。はぁ……」

「む。ウェイバー、見せたい見せたくないに関わらず、これは君が私の隣を離れず戦場へ赴く際に必要なものであって、決して見せびらかしたいというわけでは――」

「あー判った判った。じゃあ勝手に見るよ」

「待てウェイバー、君の私に対する認識には明らかに誤解があ――」

「あぁ待たない聞かないちゃんと見るから静かにしてくれっ！」

こういう時のキャスターの扱いに多少慣れてきたのか、ウェイバーは彼女の言葉を馬耳東風に聞き流して身の丈を越す白い小山のような布の前まで近付くと、それを引き剥がした。

そして息を呑んだ。呼吸すら止め、目の前に鎮座する存在に目を奪われる。

ウェイバーはキャスターの固有結界こそ魔力消耗の都合で未見であったが、投影魔術によって宝具の現物をその瞼に刻みつけ、さらにキャスターと一緒に工房で作業をすることで、彼女が作る剣の意匠を施された魔除けの護符や魔力殺しの呪符が生み出される様をつぶさに観察していた。

しかし、これは瞬時に投影された彼女のみが創り出すことを許された物品ではなく、ウェイバーでもやがて熟達すれば真似のできる魔術を用いたアイテムとは違う、とにかく別格の魔導器であった。いや、器具の類と言っていいものだろうか。礼装の類には違いないであろうが、これはもはや立派な武器、でも言葉が足りない。兵器の類だろう。

キャスターの属性が“剣”であることは聞いていたし、生前の趣味が魔剣鍛冶だというのも知らされていた。この工房自体が武具を作成することに特化していることもまた、ウェイバーは識っている。だからこそ思う。これは剣の範疇に入るかもしれないが、絶対に剣ではあり得ない。いや、キャスターにとってはこれも剣の一種なのであろうか。

「気に入ったかね？」

布を引きはがしてから目を奪われ、暫くした後に横から声がかけられる。

我が子の出来を訊ねる親のように、隣に立つキャスターはウェイバーに意見を促した。

その自信と期待が滲み出る声音に振り向くこともせず、眼前の物体から視線を逸らすことができなかった。

「こんなの、僕に扱えるのか？」

武闘派とは程遠い半生を過ごしてきた経験から来る不安と、それでもサーヴァントのマスターとして恥じない相棒として、キャスターの隣に立つことができるのかという期待の混淆する質問だった。

その問いに対して素直に肯定するだけでなく、キャスターはあからさまな挑発をもって己の主に訊ね返した。

「まだ開戦前だ。一日もあれば扱いこなせるようになるだろう。それとも私のマスターは従者の献上品をお気に召さないのかね？　試してもいないのに到底扱いきれないと泣き言を仰るというのかな？」

そもそもウェイバーの方から戦場について行くと言い始めたのである。

キャスターとしては陣地の結界内で投影した宝具と概念武装、スキルで作成した魔導具で防備を固め、そこにウェイバーを避難させている方が危険も少ないと、多少は言葉を選んで具申したのだった。

しかし、ウェイバーは命懸けの殺し合いを覚悟して聖杯戦争に赴いており、サーヴァントだけに戦闘行為の全てを丸投げして自身が安穏と陣地に篭もるを由としなかった。

実力が伴わないその発言に、生前の我が身と重ね合わせて微妙な既視感を味わったキャスターは、説得しても譲らず諦めないウェイバーの決意を翻させることは断念し、ウェイバーが戦場でも死なないように手を尽くすと決断したのである。

そのために作り上げた物を見せたのだ。主の最終的な結論は疾うに判っていた。

「……わかったよっ！　やってやる、やってやるさ！　お前がビックリするぐらいこいつを使いこなしてみせるさっ！！」

「その意気やよし。それでこそ私も苦心して作った甲斐もあるものだ。期待はしない。何故なら私は確信しているからな。君がそれを扱いきるのだと」

微笑みとともに言葉を紡ぎ終えると、再び布を頭に巻き頭巾の中に髪の毛を仕舞い、彼女は興奮するウェイバーを置いて作業に戻った。

彼が買い込んだ保存食料や生鮮食品の方は家事用に作った等身大の甲冑細工の使い魔、俗に言う自動人形に任せることにする。

そのヒトガタは家事スキルの豊富なキャスター手製の使い魔だけあって、買って来た主よりも食材の扱いは心得ていた。

その使い魔のように片手間に作ったものとは違い、魔術師の英霊が精魂を傾ける作品が台の上に横たわっていた。それは紅い金属で頭から胴を組まれた鷹の彫像だった。先ほど叩いて仕上げていたのは、これの部品の一つである。

さらにこれから数千という刃を用いて羽金を成し、その鷹を天空へ舞わせる二枚の翼を与えるのだ。

体は剣で出来ている。その言霊が示す通り、キャスターの皮膚に生み出した“剣の鱗”。

その剣鱗はこと魔術で剣を鍛える素材として考えるならば、現存する中では至上別格の特殊金属なのだった。

固有結界《無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）》は

あらゆる剣の要素を内包している。
ならば彼女の実体化した肉体を通して生み出され、現実世界に発現した金属は、固有結界の内包する可能性を具現化した結晶体であり、宝具の材料にすら適応を見せる無類にして万能の原材料となっていた。
用途は剣製に限られるが、これは一種の賢者の石と言っても過言ではない。

結界を構築している剣群とウェイバーのアゾット剣は投影物であるが、この工房内にで道具作成スキルと生前から活用する異能――固有結界内に登録した各聖剣魔剣の製作手段を活用して拵えた護符や呪符は、紛れもなく彼女の剣鱗を素材とした魔導具である。
創造の理念を鑑定し、異なる基本となる骨子らを想定した上で取捨選択した後に巧緻に合一せしめ、構成する材質を魔術と錬金術で加工した剣鱗にて代用し、製作に及ぶ技術を精妙に模倣し、尚かつ道具作成スキルの恩恵によって得た知識で補完する。
こうして作成した道具の威力は凄まじく、ウェイバーに持たせた護符だけでDランク相当の対魔力を持つに至る。
物理防御に特化させた礼装も考えており、それらを重ね合わせれば武闘派の魔術師相手や対物狙撃銃による凶弾にもやすやすと殺されることはないだろう。

そして台の上で製作途中の鷹の用途は、拠点を定めてからウェイバーとキャスターが放った使い魔たちで張り巡らせた間諜の網の補強である。
冬木の空へこの刃金で構成された鷹を幾十、幾百も放つことで、彼女たちの陣営の監視網は一応の完成となろう。
剣鱗で作成した道具は剣の属性から逸脱していない。そうなるべくキャスターが心血を注いで作り上げたのである。であるならば、投影による魔力変換効率も最大にして、消費も最小で行うことがで

きるのだ。
百羽二百羽程度、切り札レベルに用いる高ランクの宝具を投影するのに較べれば、問題になる消費量ではなかった。

すでに開戦の狼煙は上げられている。そして偽りの戦端も開かれていた。
ウェイバーが作品の慣熟を終えるまでの間に、魔術師のサーヴァントは戦略の上でも最後の仕上げとするべく、作業に取りかかった。

五：準備（後書き）

な、何やら書いてる内に時間の経過が凄まじく、気付いたら五日も……。お待ち下さった方々申し訳ございません。セイバーＶＳランサー前にちょろっと主人公陣営のことをかいつまむつもりが書けば書くほど何故か増えて伸びていく文章量……そして気付いたら一話分。あばばばば：

もしかしたら次話をアップする前に誤字脱字直しのついでに少しだけ修正するかもです。

六：交刃

時計塔でアーチボルト家と政治的対立をするロードの妨害によって、一日遅れでその荷が双子館に届けられたのは、太陽が丁度南中する時刻だった。

ケイネスが当主として取り仕切るアーチボルト家の使用人――違うことなく一流の魔術師であり、その荷を届けるに足る屈指の実力を備えていた――は、サーヴァントを側に置いたケイネス当人の様々な探知魔術によって、何らかの暗示・意識操作、呪詛や現代機器による仕掛けがないかを精査され、ようやく本国より持ち込んだ重厚なケースを届ける任を全うした。

使用人は聖杯戦争に巻き込まれないよう、即座に冬木の地を離れ、夕方の海外便でイギリスまでとんぼ帰りをする。

戦力は多いに越したことはないが、サーヴァントという超絶の使い魔からすれば、一流程度の魔術師は常人とそう差があるわけでもなく、対峙すればその命を無為に散らせることとなろう。

それはマスターであるケイネスらにしても例外ではない。サーヴァントが相手となれば、ランサーに魔力を供給し適切な機を見出して令呪を使用するため、ケイネスとともに冬木入りしたソラウの身を守ることさえ困難だろう。

ソラウを時計塔に残したまま渡航し、この冬木の地でケイネスが令呪を使用できるようにすることもできたし、再びソラウからケイ

ネスへ移植することも可能であったが、ランサーと出会い初めて本物の恋の熱情を抱いた乙女の心を説得することはケイネスにも出来ず、そしてランサーの帰りを待つような聞き分けもまた見せてはくれなかったため、元婚約者を同行させたのだった。

ケイネスは恋というものの捉え所のない形而上の質量の大きさ、その勢いを自身の苦い経験から熟知しており、彼の観たところソラウの一途な恋の炎は、利得や理性だけでなく下手をすれば己さえも周囲ごと焼き払う厄介さが見て取れた。

彼女の安全を期するならば、魔術で意識を奪い、身動きを取れなくした上で聖杯戦争が終わるまで、どこかに軟禁するのが好ましいが、彼女の今後に悪影響を及ぼさないレベルでの魔術行使では、ソフィアリ家の令嬢に流れる血とその抗魔力によって、それらの行為を容易ならざるものとして阻まれていた。

魔術を使わずに取り押さえるのは当然可能であったが、強硬手段にはどんなしっぺ返しが来るか判ったものではない。

恋する乙女の刹那的行動力、瞬発力、執念、何より恋の成就を脅かされた時に見せる理不尽な思考はケイネスをして読み切れるものではなかった。

下手を打てば内部崩壊によって、最終的にランサー陣営は全滅の憂き目に遭うだろう。

彼女の魔力を無駄にしないため、そして彼らを取り巻く諸事情のためにマスターとしたのは、サーヴァントの性能という点を抜かせば完全な失策だったと言える。しかし、後悔しても後の祭りだった。

そのためにケイネスは人脈を駆使して、当人よりもソラウの無事を図るために算段を立てることとなった。魔術師として、そしてランサーの気性を忽せにしないよう手段を執ったのである。

そもそも、ケイネスやソラウをはじめ、本来魔術協会そのものが聖杯戦争に関与する必要は無いのである。

無論、冬木の地で行われるこの儀式は根源へ至る滅多とない好機であり、願望機という特性には無限の用途があるためにその価値は計り知れない。

しかし、それでも閉鎖的且つ排他的で、利己に長けた魔術師たちの相互扶助組織である協会がいちいち手を出す案件ではない。

また、外道働き専門の封印指定ハンターなど、協会が武力として抱える魔術師には枚挙に暇がないほどだ。

それでもケイネスが選出されたのには当然ながら理由がある。

封印指定ハンターと較べても確実に勝ち残るだけの実力を周知されていた、ロード・エルメロイである彼ならば見事聖杯を持ち還るに違いない、などという巫山戯た評価があったのは否めない。

時計塔で学ぶ権力闘争に疎い者たちならば、あっさりとそんな理由を信じるだろう。

もっとも、それだけである筈がない。ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが聖杯戦争に参加する裏の必然性があったのだ。それは偏に、時計塔での政治的駆け引きに端を発していた。

時計塔では幾つものロードの家系が軒を連ねるように協会を統べており、彼らの実態は相手の裏をかき少しでも多くの権勢を奪い合う魑魅魍魎の首魁格である。そんなトップ連中は必然的に一枚岩であるはずがない。そして、互いに密に連携するアーチボルト家とソフィアリ家もまたその魑魅魍魎の跋扈する中で派閥を築いていた。

今回の聖杯戦争はケイネスの功績に武名を加える以上に、派閥の権威を増やさんがためのパフォーマンスに過ぎなかった。

武功を築く当人にとって甚だ業腹ながら、彼は否応なく聖杯戦争へ参加することとなる。その役目を辞退するなど、時計塔の魔術師が日々繰り広げる政治的闘争の世界においては慮外の範疇だった。

勿論ケイネスが負ければ派閥の威信は揺るぎ、その権勢の凋落は

アーチボルト家に止まらない。であるため、彼らの派閥は全面的に彼をバックアップし、反面、人的資源の消耗を避けるべく、余計な人員を排してケイネス個人のみが戦場へ赴くこととなった。

唯一随伴するのは、学部長より託されたソラウ・ヌァザレ・ソフィアリただ一人。結果的にサーヴァントの契約にその婚約者を巻き込んだのも、ケイネスに彼女を宛がったソフィアリ学部長の意向も大きく含まれていたがゆえである。

時計塔の権力闘争そのものに唾棄を見せるケイネスとはいえ、対外的には恩師となる者へ不義理を働くのは致命的な瑕瑾となろう。

そしてソラウ当人が拒否しない以上、彼女の魔力生成速度と貯蔵量は確かに魅力的でもあったため、強硬に拒絶するのは二つの意味で損であった。

父祖より引き継ぐアーチボルト家の当主として責任を全うする意味でも退路のないケイネスは、積極的に事前準備に精を出すこととなる。

聖杯戦争のために用意してきた各種礼装は、事前にアーチボルト家の信頼できる者を使って冬木の地に全て持ち込み、偽装と罠を施して街中に隠匿していた。

これらを再利用できるのは彼と同格の魔術師ぐらいであろう。それらが仮に敵の手に落ちたとしても、手元から離した礼装の対応策は知悉しているため、むしろ敵の手にある方が行動を読みやすいほどであった。

そのような資産の放出じみた真似も、必要を感じたために行ったに過ぎない。しかし魔術師としてのケイネスはどれだけ策を練り情況を整えようとも、薄氷の上を進む心地を拭うことはできなかった。

彼らが現在陣取っている要塞のごとき攻防性能を誇るこの双子館も、強いて言えば気休めでしかない。

ランサーが出陣する際は、下手に邸にマスターが残るよりも、二人揃ってサーヴァントを随伴させてともに行動する方がまだマシで

ある。

陣地に引き籠もって待ちの一手を決め込むなど逆に危険な選択だった。何より迎撃はどうしても後手に回る。情況に流されるよりも情況を作り出して展開を支配する方が、まだ生き残る算段が着くのだった。

ランサーの機動力とケイネスの魔術、そしてソラウの令呪が合力すれば決して不可能ではない。

無論、容易くはないだろうし、極めて困難と言わざるを得ないが、それでもやらなければならない。

そのような事情のため、たとえ対マスター戦において役立つ戦闘能力を有する武闘派の魔術師と言えど、冬木の地に遺すのはケイネスの感覚で言えば守るべき対象を余計に抱え込む行為にしかならなかった。つまり、必然として彼らの不利が増すだけである。

そしてケイネスはそのような愚は犯さない。そればかりか最悪、自身の命を擲ってでもソラウは生かさなければならないと内心で覚悟しており、死んだ場合を念頭に置いて予めサーヴァントシステムの契約術式に手を加えていたほどだ。

そう、この身が戦場で斃れるなど、彼にとっては前提段階で想定済みなのだ。

名残惜しげにする使用人に当主として労いの言葉をかけ、表面上は勝利を確信しロードの自負を崩さぬ態度を貫いて、余裕をもって見送った。

ランサーは既に楽器ケースに偽装された荷を持って館の中へ入っていたため、ケイネスも後を追う。進んで小間使いの役を担う騎士に遅れて応接室へ辿り着くと、ケースを厳かに抱えたまま主であるケイネスを待ち続けていた。

「ご苦労。ではランサー、そこへ置いてくれ」

「はっ」

部屋の中央に位置する長卓の上へ置かれたそのケースには、幾重にも物理的・魔術的に厳重な封印が施されており、時計塔屈指の魔術の腕前を持つケイネスと言えど、それに解くのには十数分を要する。

丁寧に連動する封印の順序を辿って解呪してゆき、ついに残る封が一つになったところで、指に嵌めた指輪型の魔導器を使用して思念通話を行い、自室で寛いでいるであろうソラウを呼び寄せた。

それに応じてすぐに応接間にソラウが現れ、ランサーの隣を陣取るように側に控える。

「お待たせ。ついに届いたのね」

「あぁ、これで我々の勝利はより確実なものとなるだろう」

ランサーは荷の中身について何も知らされていなかったが、ケイネスは元よりソラウもよほど待ち侘びていた品が入っているのだろう。

そして聖杯戦争での勝利に貢献するということは、二人のために用意した魔力を帯びた礼装か、大掛かりな大魔術か儀式に用いる祭

具か、ともあれランサーは開封されるケースは己の装具品ではないのだと推測していた。

そして、それは好い意味で裏切られることとなる。頑強なケースが開かれ、柔らかい内張に沈む厳重な呪符で梱包された物品。呪符の上からでも中の物の形状は見て取れた。そしてランサーは瞠目を禁じ得なかった。

「これは……」

「手に取って構わんぞランサー。これは元々君に渡すために用立てたものだからな。今日から私たちとともに戦場へ出向く君へのささやかな餞別だ。遠慮することはないぞ」

「っ、失礼いたします……」

敬愛する主から下賜されたそれは、望外の贈り物だった。若干固い仕草で慎重に手を伸ばし、手に触れた。それと同時に開封される呪符の束縛。融けるように空気に解け、中から現れたのは二振りの骨董品。しかし、外観が真新しいという、経年劣化を感じさせない異常な骨董品である。

長い年月の末に魂魄に重みが蓄積し魔力を帯びた器物。それは現代の神秘を扱う世界においてこう呼ばれる。即ち、概念武装と。

「……よもや、我が剣を再びこの手にすることができようとはっ！」

感極まったランサーの歓喜で明快に打ち鳴らされた音声が室内に響き渡る。

彼がその両の手に掴み上げたのは、生前は槍以上にその剣の腕で武名を馳せたディルムッド・オディナが携えし双剣――〈赫怒の轟剣（モラルタ）〉と〈痛憤の烈剣（ベガルタ）〉だった。

〈赫怒の轟剣〉はともかく、〈痛憤の烈剣〉は生前彼の死因となった魔猪の前にその剣身を砕け散らせたが、今その刃は傷一つない姿を眼下に顕示している。

ランサーは感慨と欣幸に耽るのを踏み留まり、疑問を抱いた。そして生前その手で数えきれぬほど振り続けた〈痛憤の烈剣〉の神秘が幾分劣化していることに気付く。

「どうやら君の死を悼んだ騎士たちが墓前へ供えるために破片から鍛ち直すことで復元したようだ。もっとも、一度壊れその逸話が出来上がった以上、それその物の強度は格段に下がったろうが、神代から存在し続けたことで我々魔術師から見ても脅威的なまでの概念武装と化している。

墓所を暴かれ長らく行方知れずとなっていたが、今こうして君の下に戻ったのは私の立場で言うのも何だが、正に奇蹟と言えよう」

主から知らされた死後の愛剣の来歴に胸を打たれ、その双眸に止めどなく熱い雫が溢れ出るのを美貌の騎士は抑えることができなかった。

主に奉じた忠義を蔑ろにしてゲッシュの重さに逆らうことができず、美姫の手を取って悲恋の逃避行を駆けた不忠の騎士は、己の不明を恥じ入るとともに男として仲間の厚意に無上の歓びを得ていた。

無言の慟哭。声を上げるよりもその心に染み渡る重さと深さが、

側でその姿を見守る二人のマスターの心すら打っていた。
得物とともに真に誇りを取り戻した英雄が落ち着くのを待つこと暫し、ケイネスは慈しむように得物に触れる騎士へ声をかける。

「気に入ったようで何よりだ。方々の伝手に声をかけた甲斐もある」

「――っ」

声をかけたなどと、何気ない、軽い言葉で包み隠しているが、ケイネスは時計塔屈指の実力者にして権力者であるロード・エルメロイの権限で様々な方面に掛け合い、必要とあらば等価交換と言うにはあまりにも不利な条件で懇望するなど、彼の沽券と資産を半ば切り売りするように手を尽くして用意していた。
ソラウはいまだ体面の上ではケイネスの婚約者であるゆえに、ランサーの召喚からイギリスを発つまでの間に幾度もそうした光景を隣で目にしてきたため、その言葉に目を瞠った。
そしてランサーは主であるケイネスの態度や言動から気付くことはできずとも、氷解した春の萌ゆる草原のごとく感情の出やすさを見せるソラウの表情、そのわずかな変化から彼女の心中を洞察し、その手に戻ってきた剣の柄を握る力が強まる。

――この身がセイバーのクラスを得て現界しなかったがために！
俺という奴はっ！　主に気を遣わせあまつさえ余計な骨を折らせることになろうとはっ！！　なんたる不忠……そして我が身の不甲斐なさに較べてケイネス様のなんと寛容なことか――っ！！

「――気高き主よ、私は果報者です。この身に過ぎたる厚遇と恩義に報いるためにも、必ずや勝利の栄光と聖杯を御身に捧げて見せましょう」

ケイネスの前に恭しく跪き、ディルムッド・オディナは一人の臣下として改めて、その無比なまでに輝ける忠義を主へと捧げたのだった。

◇◆◇◆◇◆◇

冬木市新都の郊外に位置する教会堂の地下、その一室には一人分の人影が床を這っていた。

暗い室内を幾つもの洋燈に火が灯されており、その灯りが室内に設置された蓄音機に類似した真鍮製の朝顔に鈍く照らし出す。

洋燈の暖色の光によって部屋には幾重にも影が生じ、揺れる影が交わる部屋の中央には、僧衣を纏う男が敬虔な聖職者として黙祷を捧げるように、静かに佇んでいる。

されども男が醸し出す空気は、教会堂という場所と僧衣という衣服をもってしても打ち消すことのできない血の匂いが混じっていた。

アーチャーのマスターである遠坂時臣の陣営に組するアサシンの

マスター、元代行者である言峰綺礼がそこにいた。
綺礼は伏した瞼の裏に自身のサーヴァントの一体の視界を映しつつ、蓄音機にしか見えない通信用の魔導器に向かって報告を行う。

「ただいま邸よりロード・エルメロイとその婚約者、そして長身の男が出てきました。サーヴァント越しとはいえ、マスターの透視力が機能したことから、この男の正体は紛れもなくサーヴァントです。正体までは判りませんが、パラメーターの敏捷値が突出していることから考えて、クラスはおそらくランサーだと思われます」

『――そうか。よもや戦場に伴侶を伴って赴いた上に、非戦時にも関わらず実体化させたサーヴァントを随伴させるとは、己とサーヴァントによほどの自信があるのか、あるいは聖杯戦争の定石を弁えぬただの愚者か。時計塔での彼の評判から、前者か、もしくは後者を装った擬態だろうな。どうだ綺礼、そのサーヴァントについて何か解らないか？』

魔導器からは、高所より見下ろすような余裕に溢れた言葉が返ってくる。声の主は現在も遠坂邸の地下室に待機する綺礼の師、遠坂時臣だった。
聖杯戦争はバトルロイヤル制を敷いてはいるが、現状、時臣の喚び出したアーチャーは完全に別格の存在であり、彼の余裕は全く自然なものとなっていた。
もっとも、アーチャーとして現界した英雄王はその別格の強さに比例して非常識なまでに気位も高かった。一昨日に行った茶番劇のように、瞬殺が目に見えている程度のサーヴァントを相手にさせては、驕慢な彼のプライドに泥を塗る行為と激昂される可能性は極め

て高い。
　そのために、ある程度は英雄王の獲物となるサーヴァントが勝ち残るまで時臣の陣営は静観を決め込む腹積もりだった。
　そしてそれを補佐するために暗躍するのが綺礼とアサシンである。
綺礼は師の問いにすぐさま答えを返した。

「白人で黒髪の美丈夫といった風情です。しかし出身地の特定に役に立つほどの特徴はありません。長身で細身に見えますが、当世風の衣服の上からでも発達した筋肉が見て取れます。
　また遠目越しにも重心の隙の無さと油断のない物腰が窺えることから、直接戦うことを本分とする者だということは間違いありません。私見ですが、ロード・エルメロイを下に置かぬ態度と威風堂々とした立ち振る舞いから、いずれ名のある騎士かと思われます。
　そして片手に大仰なケースが携えています。何らかの武具、折り畳み式か組み立て式でなければ、剣の類を入れるのに丁度いい大きさかと――」

『成る程。サーヴァントがわざわざその手に提げていることから、あからさまな偽装の可能性も拭い切れんが、最強クラスであるセイバーの可能性がなきにしもあらず、ということか。いや、パラメーターの構成はどうなっている？』

「敏捷値以外はさほど脅威とは思えません。平均してCランクといったところです」

『ということは、君の言う通りランサークラスが最も可能性が高い

な。戦うつもりで出歩いているのならば、今晩にも戦闘があるか。綺礼、引き続き監視を頼む』

「諒解しました。――それと、急ぎ新たに報告するべき案件と、それによって生じた問題があります。ロード・エルメロイのことがなければ、こちらを先に報告していた程です」

『ほう。順を追って説明してくれないか』

弟子の『問題』という言葉にも余裕を崩さない時臣は、それでも重要な報せであろうと傾注して報告を促した。

綺礼は父璃正が第八秘蹟会のバックボーンを使って急ぎ集めた情報を記した書類を取り出し、要点のみを口にする。

「二時間程前、ヴァチカンに残した父の部下からこちらへ連絡が来ました。十日程前に聖堂教会の、特に埋葬機関の予算に動きがあったのだと。それも莫大な額で、規模は小国を買える程のものでした。申請したのは埋葬機関の第五位、申請理由はただ“趣味”とだけ。東京で何者かから某かを購入したようです」

『埋葬機関の第五位と言えば秘宝コレクターと名高い死徒の祖か。この時期に、そして君が問題の原因として報告する以上、その売り手はよもや……』

「はい。どうやらこの聖杯戦争に召喚されたサーヴァントと思われます。そして同日、円蔵山で別荘を周囲の土地ごと購入した者がいました。

先程アサシンを向かわせたところ、柳洞寺並の対霊体用の結界とトラップが仕掛けられており、様子見で周囲を調べていたアサシンは設置されていた罠によって討ち取られました。死因は四方より無数に射出された短剣による串刺しの末に刺さった短剣が爆発し、霊核に致命的な損傷を被ったためです。

アーチャーの“王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）”と少々似ていますが、規模はあらゆる意味で格段に劣ったものでした。それでもあの物量、速度、爆発の特性は、たとえサーヴァントといえど侮れるものではありません」

綺礼の裡に残る視界はその光景を容易に思い出すことができる。いや、共有していた五感で味わった総身を貫かれる激痛、そしてその身が爆ぜるという悪辣な攻撃によって被った断末魔の瞬間、そして現界の力を失い存在が消滅するという死の感覚、全てが鮮明に五体に残っていた。

あれほどの罠ならば、数体に存在密度を戻した潜入技能に特化したアサシンでなければ突破はできないかもしれない。

しかし、綺礼はその考えは早計だと頭を振った。入り口“付近”の罠程度であのような罠が発動するのだ。別荘まではそこからかなりの距離があった。辿り着くまでどれほどの罠を掻い潜らねばならないことか。

アサシンの用途と利点を考えるならば、この序盤に潜入させるのは困難である前に割に合わない。あまりに愚策であると言えよう。

そして、キャスターの陣営にはアサシンの存命が曝かれた結果となった。せっかくの優位性も陣地作成スキルを持つキャスターに知られたのは痛恨のミスだった。

『……キャスターのサーヴァントか。時間的猶予は充分あった。分体とはいえアサシンを迎撃する殺傷力……陣地は盤石なまでに築き上げていると見た方がいい。

アサシンの秘密が漏れた可能性もあるが、迂闊に手は出せんか。だが、それと引き替えにキャスターの根城を早々に割り出し、その危険性を知ることができたのは不幸中の幸いかもしれないな。

綺礼、聖堂教会の調べで何か解らないかね？』

「導師の仰りたいことは重々承知しております。しかし、第五位は売り手に肩入れしているのか、どういった相手から買ったのかを我々に教えるつもりはないようです。資金の動きと土地別荘の購入にしても埋葬機関からの手回しで我々に情報が来るのを遅らせていた程です。

ただ、今日になってあちらからの情報開示は第五位本人の指示となっています。全てはキャスターが工房を築くのに充分な時間を確保するための工作と見ていいでしょう。第五位からの言付けによると『これで条件は果たした』のだそうで、これ以上の情報隠蔽はないものと思われます。

そして別荘と土地を用立てた不動産屋にしても、暗示によってどういう相手に売ったのかは憶えてないそうで……」

その情報の少なさと第五位の作為を聴き、朝顔の奥から宝石の震動によって微小な呆れを滲ませた嘆息の音が発せられる。

綺礼はその声質から優雅さを表した時臣の顔に、正確には瞳の奥にわずかに渋いものが混じったのだと連想した。

しかしそれは深刻さを表したものではない。彼が徒弟として遠坂

邸で過ごした中で幾度も耳目に入れたありふれた嘆息の光景だった。最もよく目にし、聞く機会となったのは、時臣が愛娘のお転婆ぶりを窘める際に見せた目の色であり嘆息だった。

つまりは、時臣の余裕に罅など一切入っていないのだ。その予想を裏切らない力強い言葉が流れるように続く。

『まったく、長命を誇る死徒、それも祖であるのならば、生前の英霊と交友があっても不思議ではないか。そしてキャスターだけあって、下準備はそれなりに周到ではあるな――。

アサシンを失ったばかりですまないが、急ぎそちらへの監視に数体割いてくれないか』

「はい。既に三体向かわせております。遠目からの監視に留め、不休で見張らせます」

『結構。いずれ他の陣営にキャスターの居場所を流し、彼らに始末させよう。アサシンを無駄に消耗する危険を冒す必要はない』

「判りました」

魔術師の英霊の工房攻めすら容易にこなすであろうアーチャーが、キャスター相手に動く筈がないという共通の確信の下、時臣は指示を出し、綺礼はそれに無言で応える。

これこそが聖杯戦争が勝ち残り戦である利点と言える。獲物に手出しがし辛いならば、面倒事は他にやらせればいい。こうした策を

練ることができる以上は逆もまた然りであるが、時臣には綺礼が助力している。

何より、アーチャーこと英雄王ギルガメッシュは他五騎のサーヴァントをまとめて屠れるだけの力を秘めた最強の英霊である。

偽りの戦端とはいえ、あの遠坂邸での顛末を見た陣営ならば、アーチャーは迂闊に手が出せる相手ではないと悟るはずだった。もし残りサーヴァント全てで攻め込んで来たら来たで、令呪を使い一網打尽にすればいい。

負ける要素などありはないのだと、時臣は確信していた。

◇◆◇◆◇◆◇

慣熟訓練による徹夜明けで暁を覚えずに寝ていたウェイバー・ベルベットは、結界の警報である鐘の音によって、薄暗い地下室のベッドから叩き起こされた。

頭に響くその音量もとんでもないが、攻められているのだという危急の事実に気付いて、地下室から転げ出るように飛び起き、予め決められていた順路に沿ってひた奔る。

彼はマスターとサーヴァントを結んだパスを通じて相棒に念話を繋ぎ、声にまで出すのも気付かず急ぎ情況を訊ねる。

「キャスター！　敵かっ！？」

【ああ、予定通りだ。攻め込んできたのは読みが当たってアサシンだな。既に撃退、と言うより仕留めたから、そう慌てることはないさ】

返ってきたのは、聞き慣れるまでにその耳に届いた落ち着き払った宥める声音。それがパスを通じてウェイバーの身内に直接伝わり、言葉と一緒に不動の剛さを感じさせて、攻め込まれたという情況に対する焦りとわずかな恐怖が入り交じる彼の感情を鎮めてくれた。

そして寝呆け眸を擦りながら、昨夜にキャスターより聞かされたある情報を思い起こしていた。

キャスターの知る第四次聖杯戦争。生前の彼女は参戦していないため判明している事実は少ない。

セイバーであるアーサー王のマスターが――ウェイバーはそうした方面に疎いため名前を知らなかったが――魔術師殺しと悪名高い衛宮切嗣であること。

アーチャーである英雄王ギルガメッシュのマスターが元代行者である聖堂教会出身の言峰綺礼であること。

そして、その二人の魔術師と二人の王が最終決戦において聖杯を争奪したという、三つだけ。

しかし、ここに来てやはりイレギュラーが発生していた。遠坂邸で使い魔越しに彼らが目撃したアーチャーによるアサシンの迎撃、そのすぐ後に冬木教会に逃げ込んだマスターが言峰綺礼であったという展開から、彼女の生前の歴史とは既にズレが生じているのか、それとも最終的にサーヴァントを失った綺礼とマスターを失ったア

ーチャーが再契約するのかとウェイバーは考えた。
この考えを話すと間髪入れずキャスターは首を横に振る。彼女の知る言峰綺礼ならば、師を弑逆してサーヴァントを奪い取るなど平然とやってのけるのだと説き、そして英雄王ギルガメッシュはそうした危険人物ほど気に入る傾向にあると明かされる。
そして彼女の出した結論は、遠坂邸で行われたアサシン潜入とその迎撃は狂言であるというものだった。
聖堂教会から得た情報だと、時臣と綺礼の師弟は聖杯を巡って関係が決裂したとされていたが、この二人の師弟関係は今もなお継続中であり、アサシンを無為に散らしたのも何らかの秘密があるからであると推測した。
そのため、埋葬機関から監督役へ情報が流れるタイミングでアサシンが動くか待っていたのであるが、案の定と言うべきか、監督役と内通していると踏んだ言峰綺礼が読み通りにアサシンを送り込んで来たのだ。そのアサシンが結界の入り口付近まで近寄って来たため、罠を発動させて見事返り討ちにすることとなった。
ようやく落ち着いて来たのか、平常運転の思考を取り戻したウェイバーは、今度は口から内容を漏らすことなく念話のみで会話を続ける。

【やっぱりお前の言う通り死んでなかったんだな】

【あれほどあからさまならな。我々以外の陣営も気付いているだろうし、向こうもそうなることを承知の上で行ったのだろう。今のアサシンは手応えが無さ過ぎたから、これも本体ではないか、それとも存在を分化させているのか？　だとすれば、かなりの量になるはずだが。
やれやれ、常時実体化でもしていてくれれば一人ずつ狩っていっ

てもいいのだがな】

【おいおい……流石に僕たちが進んでそれをする必要はないだろ】

【確かに厄介事、面倒事は他へ回せばいいことだ。ならば今後はどうするのかね、ウェイバー？】

【え――――？】

今までの時間を全て聖杯戦争の準備期間として、ひたすら工房での作業や陣地内での教導・訓練に費やしていたため、戦略に関してはキャスターに丸投げしていたウェイバーは、今ここで話を振られるとは思ってなかったがゆえに返答に詰まる。

しかし、同時にキャスターに渡された物の慣熟が彼女の言う通り一日で済んだため、彼も戦場を出ることを一応納得してもらえたこともあって、こうして意見を訊ねられたのだろう。

いずれはウェイバーも戦場へ立たなくてはならないのであれば、今日これより打って出ても変わりはないだろう。時間が経てば要らぬ恐怖が湧き出るかもしれない。ならばと、彼はマスターとして意見を出した。

【お前の読み通りなら別のアサシンがやって来る可能性もあるんだよな。なら……アサシンがまだ来てないなら、あいつの試運転も兼ねて今日は様子見に街へ出ようと思うんだ。どうだキャスター？】

【そうだな。アサシン複数説が補強された以上、今後を考えれば戦場の空気を肌で感じるのも悪くない選択ではあるな――】

キャスターは主の攻め気を正負両面の視点で静かに黙考した。アサシンを罠によって始末して二分と経ってない現状から、今動くタイミングを逸すれば最悪四六時中監視されて穴熊を強いられるデメリットが発生するだろう。逆に陣地内での迎撃戦のメリットもあるが、いずれは突破されるものだと心得ているため守勢一辺倒というのも悪手だった。それに比して今ならばいまだ複数残っているであろうアサシンの監視を振り切って街へ出ることが出来、場合によっては貴重な実戦経験を得るというメリットもある。こちらも逆に敗北の危険性を孕んでいるが、心配の種だったウェイバーの無力は打開する目途が立ったため、捨て鉢にウェイバーのせっかくのやる気を殺いでまで翻意を促す必要性はない。

ならば、あとは自分の双肩にかかる責任を全うして動くだけである。

【接敵の末交戦するにしろ遁走するにしろ、情況は既に動いた。ならば、ここで安全策を執るのも憚られるな。仮に戦闘になろうとも〈鷹の眼（ホークアイ）〉の投影で消費した魔力は回復済みだ。油断しなければ支障はないだろう。

ではウェイバー、初陣となるかは神のみぞ知る未来だが、本日は私とともに直に偵察と洒落こもうか】

常からウェイバーの側を離れず、さらに監視網として大量に用意した刃金の使い魔〈鷹の眼〉の目と、自身の千里眼スキルがあれば

そう不利な遭遇に直面することもあるまい。今は意気軒昂であるウェイバーの勢いを見守り、それが破綻しないように補佐すればいい。少しずつ経験を積ませ、この未熟なマスターの生存率を上げなくては、聖杯戦争の流れ次第では生き残るのも至難となろう。そういう意味では戦場にサーヴァントと並び立つことを拒否しない姿勢は危うくはあるが、間違いではないのかもしれない。

キャスターは長期的思考から、ウェイバーの提案を是とし、陣地から出陣することを決断した。

◇◆◇◆◇◆◇

その気配を察知したのは絶世の美少年――ではなく、凛とした烈気を宿す男装の麗人だった。

鮮やかな金髪を後で束ね、首から下を漆黒で統一してコーディネイトされた当世風の衣装を身に纏うその少女の正体こそ、聖杯が設けた七つの匣（クラス）の内で最優最強と謳われるセイバーのサーヴァントだった。

セイバーは銀髪紅眼の貴婦人の二の腕を掴んで引き寄せ、気配の主から仮初めの主を守るためにさりげなく立ち位置をずらす。

そのセイバーに庇われるのは、彼女同様に絶世の美貌を誇る雪国の貴婦人、アイリスフィール・フォン・アインツベルン。彼女はアインツベルンの正式なマスターである衛宮切嗣の妻であり、彼の方

針によってセイバーともども囮となるべくセイバーの代理マスターの役目を担っていた。
艶やかに輝く銀の髪を海風に揺らしつつ、囁くようなアイリスフィールの言葉がセイバーに届く。

「……敵のサーヴァント？」

「はい。どうやら我々を誘っているようです」

「ふぅん。律儀なのね。戦う場所を選ぼうってわけ？　どうやら相手の思惑も、私たちとそう変わらなかったみたいね。これ見よがしに気配を振りまいて、噛み付いてくる相手を誘い出す……セイバー、あなたと同じ真っ向勝負のサーヴァントと見ていいんじゃない？」

「となると、クラスはランサーかライダーですね。相手にとって不足はない」

アーチャーならば遠距離戦、キャスターならば搦め手、アサシンならば暗殺、とこの三騎はそれぞれ得意な距離と戦法が特化している。そして残るバーサーカーは理性がないため誘い出すなどという真似自体できないため、消去法で気配の主は白兵戦を得意とするランサーか、宝具に騎乗するであろうライダーのどちらかで間違いはないだろう。
そして真っ向勝負であるならば、最優のクラスであるセイバーが後れを取るわけにはいかない。たとえ待っているのが罠の類であろ

うとも、その手に握る聖剣をもって両断すれば済む。巌もかくやの堅い決意を胸に、アイリスフィールに自負を事実として顕示した。

悠然と構える騎士の威厳すら滲み出る不敵な笑みに同質の笑みで返し、アイリスフィールはセイバーに訊ねる。答えは判りきっていたが、これを訊ねるのは仮初めの主の大切な役目だった。

「それじゃあ、お招きに与るとする？」

「望むところです」

剣の騎士の主従はゆるりと遠ざかる気配を追って海浜公園を抜け、魔術で人払いが施された埠頭の倉庫街に辿り着く。

左右にコンテナが積み重なる大路で彼女らを待ち構えているのは三人の男女だった。

一人はセイバーたちから見て手前に位置し、その出で立ちと膨大な魔力の内在する気配から、その人物がサーヴァントであり、さらに両手に握る右の長槍と左の短槍からクラスがランサーであることが容易に見て取れる。右の眼下に呪符が貼られているが、それが支障する様子もない。

彼のやや後方では金髪の男性と赤髪の女性が佇んでおり、セイバーは知らないことだが、アイリスフィールは夫の集めた資料に眼を通した時に金髪の男性の顔写真を見ていたため、その男が時計塔の名家アーチボルト家の当主であることに気付く。

主従三者は涼しげな空気を纏って彼女らに視線を向けていた。その眼はいずれも油断なく、そして屈託のない光を灯していた。

その印象を裏切ることなく、槍の騎士が低いながらも朗々たる美

声によって口上を述べる。

「よくぞ来た。今日一日、この街を練り歩いて過ごしたものの、どいつもこいつも穴熊を決め込む腰抜けばかり。俺の誘いに応じた猛者は、お前だけだ。その清開な闘気――セイバーとお見受けしたが、如何に？」

讃美と同時にクラスを誰何され、隠すことなく剣の騎士も宣言と誰何を返した。

「その通り。そういうお前はランサーに相違ないな？」

「如何にも。この身はランサーのサーヴァント。だが、このような肩書き、騎士の名乗りとは到底言えぬ」

そこで槍兵は二歩ほど横に移動し、セイバーたちが金髪の男性と対峙する立ち位置を取る。

それに肯く金髪の男性こそ、ランサーの態度からマスターであるとセイバーとアイリスフィールは確信した。

ランサーとはまた別種の美声が紡がれ、海風に乗って届く。長らく貴族社会で経験を積み重ねられた、礼を逸することのない潔癖な声音だった。

「私は魔術協会より派遣され、此度の聖杯戦争に参加するケイネス・

エルメロイ・アーチボルト。既に存じていると思うが、ランサーのマスターだ。

セイバー、御身が名高い騎士と見受けたため、私は我が無二の騎士に尋常の決闘を許す旨を決めさせて頂いた。

今より無粋な覗き見を阻むべく束の間の壁を造るゆえ、どうか見逃されよ。最優クラスの対魔力の前には文字通り霧散する程度の代物、そこな仮初めの主が備える抗魔力ならばそう危害もない。心配は無用だ」

ケイネスは外套の懐から掌にすっぽりと収まるほどの大きさの銀色の真球を取り出し、それを地面に落とした。真球は弾かれることもなく跳ね返ることもなく、そして砕けることもなくアスファルトの大地に融けて消える。

そして周囲の景色が一変した。視界の端に銀光が煌めく霧が立ち込め、それはやがて左右のコンテナごと1ブロック丸々覆い尽くし、彼女たち五人を完全に外界から隔離したのだった。

『――っ！』

ケイネスの言葉をすぐ鵜呑みにするほどセイバーもアイリスフィールも無警戒ではない。全面的に罠であることも考慮してアイリスフィールを引き寄せ、その手に武装を顕現させる――否、しようとしたところで一旦中断してしまった。アイリスフィールもセイバーと同じものを見ているため、驚きに呆けた表情を見せていた。

なんとケイネスは無造作にランサーの佇む位置まで近づくと、携えていたケースの中から二振りの長剣を取り出し、何時の間にか跪いているランサーに悠揚迫らぬ態度でその二振りを下賜したのだ。

それは騎士の任命式を思わせる厳かで神聖さすら感じ入らされる姿だった。

「ランサー、それなりの知覚系統の魔術を使われようと、暫くの間は中の様子が洩れることはない。騎士の栄誉、私に魅せてくれ」

拝領した長剣を左肩に、その長剣より若干短い剣を右腰へ、それぞれ鞘ごと装備したランサーは深々と主に頭を下げて万感の謝意を表する。

「痛み入ります、ケイネス様。そしてご覧下さい。我が力、御身の誇り高き決断と厚情に恥じぬ働きを全ういたします」

そして忠義と誇りの汪溢する双剣二槍の騎士は再び槍を持ち、右手の槍の石突を文字通り大地に叩き付けると、高らかに大音声で宣告する。

「――セイバー、興の乗らぬ縛りはこれより暫時無くなった。ゆえに矛を交える前に名乗らせてもらおう。聖杯の寄る辺より得た我が偽りの名はランサー。なれど、我が真名はディルムッド・オディナ！　生前の所属はフィオナ騎士団。されどこの身は今生の全てを主ケイネス・エルメロイ・アーチボルトに捧げしただ一条の槍なり。これなる槍を恐れぬならば、いざ尋常の合戦を所望するっ！！」

セイバーは敵ながらその潔い態度と騎士道に殉ずる主従の覚悟に、不覚にも感銘を受けていた。

これほど栄誉に輝く敵は彼女の生前でもそうはいまい。結果的に離散し崩壊したとはいえ、あの円卓の騎士たちに匹敵する直向きな矜持と誇りの下に名乗られ、その上で正々堂々と果たし合いの口上を向けられたのだ。

自身も名乗りを上げ、騎士として相手の誠意に応えるのがせめてもの礼だったが、彼女が今立つ場所は聖杯戦争の地である。迂闊に真名を名乗るなど愚の骨頂だった。何より守るべき主の命を軽んずる背信行為に他ならない。

しかし、これほどの相手に名乗ることをせずに刃を向けて死合うというのは、聖剣の主として、騎士王としての自身と相手に対する辱めに等しい。

そして彼女の愛剣である聖剣はそのような暴挙を許すであろうか？　よもや〈約束された勝利の剣〉も〈勝利すべき黄金の剣〉のように折れるのではないか？

こうした葛藤を抱く時点で、その危険性はすでに濃厚なものとなっていた。ここで名乗り上げ決闘を引き受けねば騎士の誇りが廃る……しかし、それを行うは騎士の誓いに反してしまう……。

同じ騎士の誉れであるのに、こうも相反することになろうとは。

ぎしりと食い縛った歯が軋み声を上げ、握り締める拳から布の擦れる音が洩れる。

そのセイバーの懊悩する様を見かね、アイリスフィールがセイバーに告げる。騎士の誇りを穢すことなく勝利するための魔法の言葉を。

「構わないわ、セイバー」

「っ！？　で、ですがアイリスフィール……」

セイバーは驚きを露わにわずかな狼狽を見せつつ、アイリスフィールの心遣いに反する言葉を口端より発してしまった。

だが、思い悩むというセイバーの年相応の表情に慈愛に満ちた微笑で応え、アイリスフィールも代理とはいえセイバーのマスターとしての覚悟を見せた。

「私のことなら大丈夫。それに、信じているから。だからあなたも我慢しなくていいのよ？　あそこまで堂々としているんですもの。あなたが名乗ったとしても外に洩れることはないのでしょうしね。そうでしょうロード・エルメロイ？」

律儀に騎士とともにセイバーたちの決断を待っていたケイネスは、その確認の言葉に揺るぎない寛厳さをもって返した。

「左様。だが急いで欲しい。宝具でも使われれば人の身で築いた結界など役目を果たさんのでな。探知妨害も用意した触媒の全力で維持したとて、もって五分といったところだろう。まぁ張り直せば済むが、それをさせるのならば、貴女方がこの場を退くことをお勧めしよう」

本来ならば四半日は持つ魔力を貯蔵した礼装だったが、時間毎の

消費魔力を引き上げてまで結界に多重機能を付加させて展開しているため、その維持で一秒一刻と過ぎる毎に凄まじい勢いで魔力が失われていく。

元々はランサーの〈破魔の紅薔薇〉と〈必滅の黄薔薇〉による一撃離脱戦法を繰り返すという長期的戦略も考えていたが、ランサーの人格を考慮して全ての戦闘を短期決戦にするという方針を固めたため、こうした礼装の無茶な使い方も採算が取れる見込みはあった。

さらに使い方如何に関わらず、この礼装は一回限りの使い捨てであるため、惜しいと思っていてはそも使えるものではない。

何より、今宵用意した礼装はこれ一つではない。既に起動している物と待機状態の物を合わせて二桁を越す量をこの場を取り囲むように配していたのである。

しかし、そうした保険をおくびにも出さず、ケイネスは現在発動している結界のタイムリミットを報せる。さらに相手が誘いに乗った以上、ここで逃げ帰ることはないと確信していたので礼装が無駄になる心配も杞憂であろう。あとはどれだけ魔力を温存し結界を長時間維持できるかが肝要だった。

この程度の腹芸、時計塔の政治闘争という化かし合いで培ったケイネスにとっては虚言を完全に本心として口にするのに造作もないことだった。

そして真実は話してないが事実は話しているのである。決して欺いているわけではないため彼の良心が揺らぐこともない。

「ご厚意ありがたく頂戴いたしますわ、ロード。――セイバー、誉れ高い騎士王の栄誉、私に魅せてくれないかしら?」

「……――諒解しました。あなたの騎士の戦う姿、篤とご覧下さい。

アイリスフィール」

剣の英霊は気付く。アイリスフィールの身体がわずかに震えていることに。しかし表情にはそのような気配を微塵も見せず、ただ信頼と覚悟をもってセイバーに微笑んでいた。

その姿にセイバーは胸を打たれた。心底から敬服の念が滾ってくるほどの昂ぶりを覚え、王ではなくただ一人の騎士として、主とともに立つ者として奮い立った。

このアイリスフィールの覚悟に応えなくして、何が騎士の王だというのだろうか。何処が究極の聖剣の担い手であろうか。

恥を知れ。その恥を雪げ。彼女の意志を汲めるのも、その命を守れるのも、今は己ただ一人しかいないのだ。

ならば騎士の本分を全うせよ。この身が騎士であると言い張るのならば。

セイバーはそれまで嵐の中の浮舟のように揺れ動いていた軟弱な己の精神を強く締め直すために、手袋で覆われた両の掌で自身の頬を強かに張る。

そして形式上は仮初めであり代理であろうとも、目の前の女性をこそ無二の主として定め、その信頼に応え忠誠を尽くす決意を烈火のごとく盛んに燃え上がらせる。

そこには先刻までの迷いと躊躇いは塵ほどの欠片もなかった。あるのはランサー同様に主の誠心に報いる騎士の闘志のみ。圧力の増した烈気がランサーを射貫く。

「待たせたなランサー。貴殿が所望せし尋常の果たし合いをお受けしよう。我が名はアルトリア・ペンドラゴン。ウーサーの子にして、ブリテンを守りし赤竜の化身なりっ！」

風が集まり、竜巻がセイバーを呑み込んだかと思うと、そこに男装の麗人はいなかった。

解けた大気の渦跡より現れたるは、その矮躯を折ることなく一国を治め、いかなる外敵からも祖国を守護した騎士の王、アーサー王の御姿である。

纏う空気は見違えるほどに輝きを魅せ、闘気はより清冽な勢いを増していた。その勇姿にランサーは打ち震える。紛う事なき武者震いだった。

「彼の騎士王の猛き武と刃を交わす栄に与るとは、恐悦至極だ。セイバー」

二槍の封が解かれ、石突から穂先までを覆う呪符が消失してゆく。

「私もフィオナ騎士団随一の英傑と死合えるとは、光栄の極みだ。ランサー」

具足が地面を踏み締め、右手が提げる不可視の柄に左の籠手が添えられる。

「ではお互いの名も知ったことだ。後は」

「あぁ、我らは騎士。そしてここは戦場だ。ならば互いの得物で語

るとしよう」

静謐なまでに純化された戦意が気迫に先んじて迸り、騎士たちの中間地点で火花を散らす。

次いで、両者の身内より百戦錬磨の峻烈な闘気が噴き上がった。闘気の裡に殺気はあるが、殺すことそのものは本命の意ではない。眼前の敵を斃すという覚悟、勝利の後に己が奪った相手の命と願いを弔う責と使命、それらが発露した闘気に殺気を伴わせていた。

セイバーは風の魔力で覆われた不可視の剣を青眼に構え、ランサーは体を半身にずらして小枝のように長短の二槍を操り、自然体に両の穂先を膝の高さまで下げた構えを取る。穂先と同じ高さの膝は柔らかく溜められており、いかなる間合い、距離、拍子にも対応できる歴戦の最適解が表れていた。

『――いざ』

申し合わせたわけでもないのに、そうであるかのように騎士たちの言葉が唱和する。

『尋常に――』

動かない。まだ始まりではない。魔力と気迫に空間が撓むほどに互いの攻め気が待ち侘びる。

『勝負っ！！！』

美声の和合する鬨の声が開始を宣言する。弾丸が銃身を奔るように、引き絞った弦より指を放すように、彼らは硬く待ちに待った総身に自由を許した。勝利を掴めと号令を下したのだった。

地割れのごとき極大の踏み込みで足下が爆ぜ、青銀の騎士が火箭となって吶喊する。

対する濃緑の騎士は紅黄の鋭い翼を広げ、羽毛を思わせる軽捷な足捌きで迎え撃つ。

秒より短い時の間隙を、人の身で精霊の域にまで昇華された存在が疾駆した。その初速は常人の眼で捉えきれるものではない。魔術師であろうとも視認しきれるものではないだろう。英雄と呼ばれた豪傑たちの全速はそれほどまでに迅かった。

研ぎ澄まされた感覚の中、剣の騎士と槍の騎士は相手の出す全力を肌で感じ取って、表面に一切洩らすことなく胸の裡にて笑みを浮かべた。

両者ともに相手の武勇は英霊の座と聖杯より得た知識で周知している。ならば小手調べなど騎士の英霊同士の初戟には不要でしかない。

円卓の騎士とフィオナ騎士団。どちらも劣ることなき栄誉を誇る最高位の騎士が揃った最強の戦闘集団である。

敵手が己に勝るとも劣らない勇名武名を持つとあらば、相手にとって不足などあろうはずもなし。伝承にて手の内の切り札が知られているというのも小気味よかった。警戒は無論解かないが、未知数の相手と戦うなど茶飯事のこと、互いの知名度も五分なら条件も互角、嘆くに値しない。

そう、これほどの猛者を相手にするのであれば、最初から全力で

武装を振るい、相手の全力に応えて真っ向から打ち破るのが戦の作法だ。それが互いに名乗り合った騎士の礼儀、決闘の誉れである。

背負う物がある。譲れない望みがある。騎士として仕えるべき主がいる。

セイバーは仮初めの主なれど、アイリスフィールへの忠義は紛れもなく本物だった。ならば眼前に立ちはだかる最高の主従に自分たちが後れを取るわけにはいくまい。

初戦の相手が斯様な者たちであることにセイバーは騎士として聖杯に感謝し、アイリスフィールを主と戴いて正々堂々とした決闘を行える今この瞬間に対し、それ以上に歓喜した。

ランサーも最初の相手が下らぬ浅知恵で奸計を巡らすような輩でないことに、武人として騎士として天井知らずに愉悦が高じる。まず主であるケイネスに感謝し、次に眼前の騎士とその主に感謝し、最後に聖杯と運命に感謝した。

両雄ともに己が振るう自慢の得物が相手の五体を狙い、さらに互いに相手の攻撃を迎え撃つことでそれらが交差した。

宝具という高貴な幻想によって象られる刃が激突し、刃鳴りの快音が舞台に谺する。

この音こそ、第四次聖杯戦争の戦端が開かれる真の合図となるのだった。

六：交刃（後書き）

すいません……書いてる内に二話分になりそうというか、なったというか……というわけで区切りの良い辺りで一旦切って、投稿させて頂きます；；

※１０／２６　０３：０３　セイバーの描写をほんの少しだけ加筆しました。

七：紛擾

その初戟はただ一度の攻撃の応酬、秒に満たない刹那の数十分の一の間で行われた一触の交叉だった。

しかし、その一合には互いの貫くべき信念と、幾星霜の研鑽の末に手にした武威――練磨の積み重ねの全てが込められた、正しく極限の激突だった。

セイバーは剣の道に捧げ、運剣に機能特化した小躯を魔力放出スキルによる噴射加速で膂力・速力の増幅を為し、それを一切損なうことなく神速の踏み込みをもって、加速時間ゼロで最高速度まで到達し、予備動作もなく肩に担ぐように愛剣を振りかぶった。

銀色の籠手に握られる愛剣は〈風王結界（インヴィジブル・エア）〉という風の魔力で構成された宝具で覆い隠され、不可視状態となっている。その、光を屈折させるほどの超絶レベルに凝縮された空気を剣身より後方へ解放することで、剣の英霊の突撃速度はさらに爆発的に上乗せされた。

透明化を解除された〈約束された勝利の剣（エクスカリバー）〉から溢れる黄金の光が閃き、燦然と戦場を照らし出す。

光明は超音速で水平方向へ移動し、立ち塞がるあらゆるものを両断せんと振り下ろされた。

その一太刀には、王として生きし一人の騎士の歩んだ道が顕れていた。

速きことは重要であろう。重きことは重要であろう。戦場でまず生死を別つのはただ純粋な“力”であるならば、これら二つは最重要の要素である。しかし、ただそれだけならばその身に宿る力が優れた方が勝つのが絶対不動の真理となる。

ならば、武の持つ意味とは何だと言うのか。それでは日々の鍛錬によって技芸を開発し、術理を編み出す必要などなかろう。

だからそれは真理であって真理ではない。真理を覆す真理こそ剣の道、武の道にはあるのである。

持って生まれた筋力は体格同様に人それぞれ異なる。そして弛まぬ努力で鍛え抜かれた肉体に宿る膂力と速度は、当人の意欲と気力次第で誰でも一定水準を獲得することができる。高みに“至れる”までに続く地道な積み重ねの道程は容易ならざるものであるが、決して踏破できないものではない。

だが、それは力が“強い”のであって、決して戦闘に“勁い”のではない。身体機能を鍛えただけで勝てるならば、元から膂力と速度に秀でた者が同じく鍛えれば、その者が圧勝してしまうだろう。

力の“強さ”は基礎であり土台であるが、決してそれが全てではない。蔑ろにするわけではない。ただ、それに比して重きに置くべきものがあった。

まず挙げられるものが、心胆の剛さ。戦闘において敵手と相対するのでならば、重要度は膂力と速度を発揮する肉体ではなく、それを操る精神力が身体能力より上に来る。

己を御する胆力すら持ち合わせない輩は、己の力を使いこなすことも出来ずに、容易く敵に己の全てを読み切られ、絶妙の呼吸で弱所を攻められて、相手に己の力を利用されて敗北してしまうだろう。

また、自身の心技体がいかに相手より優れようと、天の時、地の

利、人の和といった戦術・戦略を制する条件を相手により多く、長く抑えられては、やはり敗北は免れない。

このため機を見、間合いを計り、己が納得する条件を揃えることが、心の在り方以上に重要となり、彼我の情況を把握する能力は戦場に立つ前に備えるべき必須のもの。

敵味方の正確な情況を把握することが出来なければ、それを為す相手が格下であろうとも悪戦苦闘の末に敗北を喫するだろう。

まして、己と伍する敵手であるならば、その差は歴然、火を見るより明らかだった。

そして最も重要且つ至難なのが、己の力、心、そしてそれ以外の躍動する場の流れの全てを見切ること。

天を見、地を視、人を観、それら以外をも察る識域と眼力。

人の上に立つ者、人の命を預かる者、人の為に人の命を奪う者にはなくてならない世界の見方だった。

騎士道を征き、王として君臨し、民を治め続けたアーサー王である彼女は、その眼力を紛れもなく有していた。

それは生得の魔力放出スキルや、未来予知じみた第六感である直感スキルに比肩する、彼女の生涯を懸けて会得した“勁さ”だった。

剣の道を弛まぬ歩足でひた趨り、誉れ高い騎士の道をひたすら奔り込み、国と民を守りし王としての道を、ただただ駈け抜けたアルトリア・ペンドラゴンの踏破した一箇の道筋だった。

その道筋の全てが、一太刀に込められていた。まさに全身全霊の一撃。ブリテンを守護した赤竜の咆吼である。

対する騎士は双剣二槍という異色の騎士、ランサーことディルムッド・オディナ。

生前はフィン・マックール率いるフィオナ騎士団最強の武威を持ち、今生こそは無窮の忠誠と騎士道に生きることを望む忠勇烈士であり、武辺の雄でもあった。

彼には特別な超能の異才など一切ない。セイバーがその身に宿す竜の因子も、そこから来るほぼ無尽蔵の魔力を生み出していた炉心も、その炉心から供給される魔力を活用する能力も、未来予知じみた直感も、彼は何一つ持ち合わせていなかった。

否、ないとは言わないが、紅顔皓歯の美貌や女性を魅了する泣き黒子など騎士にとって、ましてや武人にとって重要であるはずがない。むしろ生前の非業の原因となったソレはおぞましき呪いですらあった。

彼が輝く貌以外に持って生まれたのは、武才ただそれのみだった。

もっとも、その武才は極めて非凡にして類希なものだった。彼は人たるその身一つと、その逸材たる才覚をただひたすらに鍛えた。愚直なまでに鍛え続けた。

己の見据える先にある理想の騎士像を体現するため、血の滲む修練をくぐり抜け、その果てに自身の肉体をフィオナ騎士団最強と謡われるまでに鍛え上げる。

それは彼にとって別段苦行ではなかった。彼はひたすら純粋に、ただ童心のままに努力を積み重ねただけであり、実戦でそれをより理想に近づけるべく昇華していっただけである。

ディルムッド・オディナはいかなる場でも義と徳を掲げる騎士たらんと、地獄のような戦場で己の信じる憧れの騎士を目指して己の“勁さ”を高めていった。

心身を鍛え、戦況の機微を把握し、戦場の全てを俯瞰する眼力までセイバー同様に会得し、それに加えて彼の保有スキルに列挙されるまでとなった真の心眼スキルは、天然の直感スキルに対抗するまでの戦闘論理として培われている。

さらに彼の膂力はただの片腕で他の全力と伍する腕力を発揮し、脚力は疾風迅雷、音よりも速い領域で戦場を睥睨し、他者の眼に映らぬ、捉えても惑わされる緩急自在の足捌きで敵陣を駛走した。

そのランサーが踏み込んだ瞬間、おもむろに左の黄槍〈必滅の黄薔薇（ゲイ・ボウ）〉を軽々と宙に放り、両腕より渾身の力をもって右の紅槍〈破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）〉を駆使した。

彼の生前蓄積した膨大な戦闘経験が、セイバーの初太刀と片腕で激突するを愚挙と判じたためである。

斬撃という動作に応じるのは、ただの一突き。何のスキルもなく鬼神の領域に鍛え抜かれた彼の膂力と踏み込みから生み出す速度によって紅き閃光と化した鋭鋒が、黄金に輝く至高の宝剣の軌跡、その未来線と交わる。そして二戟が一合した。

『――っ』

互いの両腕を強烈な衝撃が駆け上る。初戟の威力は武具を通って腕を抜け、胴を伝わり踏み込んだ両の脚に浸透する。

そして衝撃は足下を抜け、アスファルトの大地に四つの蜘蛛の巣状の罅を入れて、刹那の間もなく呆気ないほど簡単に粉砕した。

眼は口ほどに物を言う、と諺にもある通り、その者の心は瞳の色に表れる。無論、戦場でその色を見抜かれるなど致命の過ち、自殺行為に等しいし、顔色を変えるなど以ての外であろう。戦場を生き抜いた者ならば、瞳孔や瞳色に内心を洩らすはずがない。

だが、その瞬間において両者は互いに相手の瞳と視線を交錯させ、見えない相手の心中を瞬時に察することに成功した。そして互いに内心で不敵な笑みを浮かべる。

一流の騎士ならば、先の先を制し、後の先を制し、相手の思考を制し、戦闘の呼吸を制するのが最上手だというのに、彼らは互いの心に触れられようともそれが致命打にならない胆力と実力を兼ね備えていた。むしろ知られようと一向に構わなかった。

詰まるところ、英霊にまで昇華された武勇を誇る彼らが全力全開で対峙するこの場において、己の意思を知られるという稚児程度の間違いですら、何ら気負う必要のない些末事でしかなかった。

どころか、相手の戦意の一端を明快に知ることが出来て、己の戦意をさらに鼓舞する結果となる。

最優と名高い剣のサーヴァントは全力の一撃を受け止められ、その一合からランサーの武の遍歴を垣間見、感動を禁じ得なかった。

練りに練られ、磨きに磨かれ、研ぎ澄まされた肉体と技術によって天すら衝き穿つと錯覚させる見事な一突きだった。

聖杯を得るという大願を成就するために戦う争奪戦。その実質は欲に塗れた泥沼の殺し合いに相違ないはずだった。だというのに、その序盤にしてこれほどの猛者と、騎士として堂々と一騎討ちが叶うとは、剣の騎士にとってこの上ない誉れだった。

一合によって生じると音が大気を震わせる前に両者の極小の短い硬直が同時に解け、余韻に痺れる腕を体ごと引き、間合いを開ける。

ここでサーヴァントの一合によって粉砕されたアスファルト大地を地響きが伝播し、衝撃波とそれに一拍遅れて生じる颶風と吹き飛ばされる石片、さらに大気の鳴動が合わさり、観客である両者の主の身体を揺るがした。

だがサーヴァントたちは三者の息を呑む音を意に介す暇も惜しいと、対敵より眼を切ることをしなかった。

セイバーは後方へ跳躍し、着地した地面を具足で抉り、轍を作りながら下がっていく。

ランサーは滑るように優雅に後退して距離を開け、宙を回転する黄槍を視界に収めることなく掴み取り、最初の構えに戻る。そして、甘く魅惑的な笑みを浮かべ、その口角を獰猛に吊り上げる。

言葉は不要。始める前に確かにそう言ったのをセイバーもランサーも忘れたわけではない。ゆえに互いの舌が意味を成す言葉を紡ぐことはない。

だから、互いに賞賛の意を込めて眼光に煌めかせ、視線を交わすだけである。それだけで両者の意思は明確に相手へと伝わっていた。

――セイバーの名に恥じぬ見事な剣戟。眼福だった。

――貴殿もランサーの名の通り素晴らしい突きだった。お見それしたぞ。

得物を操る速度、セイバーならば剣速、ランサーならば槍速と称すべきその速さは両者ほぼ互角であったが、セイバーはサーヴァントとしてのパラメーターで眼前の騎士が自身のそれを凌ぐ値を秘めていると痛感していた。

筋力に劣る彼我の差は限界以上に放出する魔力と〈風王結界〉で補い、また彼女の霊的直感によって運剣の反応が遅れることはない。

しかし、地力の差で膂力以上に歴然と上下が生ずるものこそが、機動力（アシ）の差だった。

ランサーのクラスには最速の英霊が招かれると謂われるが、この第四次聖杯戦争で召喚されたディルムッド・オディナの敏捷値Ａ＋＋という数値は過去最高、歴代槍兵最速の判定値なのである。

――主の差に救われたか。もしセイバーが生前通りの剛力を発揮していれば、ともすれば先の一合、槍ごと両断されていたかもしれんな。最優のクラスで招かれたのは、断じて伊達ではない。

知名度とマスターの実力。この二つの要素がある以上、サーヴァントはまず十全に生前の能力を発揮することができない。それは聖杯戦争の知識のある者ならば自明の理だろう。

しかし、この四回目の戦争において、聖杯より令呪を授かったケイネス・エルメロイ・アーチボルトは別格だった。時計塔のロードたちの口端に昇る一説に依れば、魔術協会でも彼のバルトメロイの次なる力量を備えるとまで称され、あながち間違いではない実力を秘めるのがロード・エルメロイたる彼である。

令呪を宿したケイネスはサーヴァントを召喚する前に令呪を持てる知識と技量、機知によって徹底的に解析を図る。魔術協会の最高学府でも最高峰の位置に至った術者であるケイネスは、その術式から聖杯戦争のサーヴァントシステムを熟知することとなり、術式に干渉して様々な改竄を行うことに成功した。

マスターの権限を二つに分けることで二人分の供給と実力でパラメーター判定を誤魔化し、知名度補正は召喚地を優先して冬木市でも補正が継続するべく調整した。

さらにマスターの透視力によって不可視であるはずのサーヴァントの霊体状態や、マスターとサーヴァントの距離が至近であれば彼等を結ぶ経路（パス）の視認すら可能とした。

いかに優れたシステムであろうと、それが人の手によって編まれた代物であるならば、それを編み直すのもまた人の手である。

こうして、歴代全サーヴァント中最速の英霊としてランサーは現

界したのだった。
それは偏に彼のマスターの功績であろう。無論、その速さは生前のランサーが培った努力の賜物であるが、その生前の身体能力を聖杯戦争のサーヴァントの身に与えたのはケイネスの発想とそれを実現する技術によるものだった。
ランサーのサーヴァント、ディルムッド・オディナは誇張ではなく十全に生前の身体能力を発揮することができる現状を誇らしく思う。敬服する主の偉功の結果、今の彼の速度があるのだから。
そしてその速度は、対峙する騎士王をして戦慄を禁じ得ない、凄まじいまでの疾さだった。

ただ速いだけだと言えるのかもしれないが、必殺の領域にまで高められた敏捷性と駿足である。これほど単純にして破るのが困難な武器などそうはあるまい。
この速さに最も効果的な対抗手段は、より速きをもって対するか、自動追尾型の攻撃を放つか、攻撃の命中を理外の法則で確定させるか、思い浮かんでもセイバーのサーヴァントである彼女には実行不可能な手段ばかりであった。
狭い屋内ならばまだマシかもしれないが、それは相手も条件は同じであろうし、戦場は今、此処であり、決着はこの場で着けなければならない。無い物ねだりは出来なかった。

セイバーは刃渡りと形状がすでに露見している〈約束された勝利の剣〉を露わにしたまま〈風王結界〉を加速材として纏わせると青眼に構え、裂帛の気勢を剣身に漲らせた。
ステータスが相手より下回っていようとも、能力値の多寡が勝敗の全てを左右するわけではない。己の業で、この聖剣で、必ずや勝利を掴み取る。何より、背後に控えるアイリスフィールの覚悟に応えるためにも、この場で無様を晒すわけにはいかなかった。
これほどの騎士ならば、初戦の勝利を彩るに最上級の勲となろう。

斃し、勝利の栄光をアイリスフィールに捧げる。

そしてランサーもセイバー同様、眼前の騎士王が主に捧げる首級として望むべくもないアタリであることを実感し、より勝利への執念を燃え滾らせる。

互いに相手の力量を認め、その首級の価値が己と同等であると定めていた。

時空を超越してこれほどの相手と、主のためという大義を掲げた騎士として決闘することが叶うとは、ランサーが英霊の座で悲願した望み以上の境遇だった。

そう、彼の望みは半分どころか、願いのほぼ全てがすでに叶っていた。理想の主君たらんと在り続けるケイネスを主と戴くまでで、全てが満たされていた。そして、主の槍として戦場で戦える誉れは至上の歓びとしてランサーの胸の内で咲き誇っていた。

ならば、己の願いを早々に叶えてくれたケイネスのために槍働きをするのは、至極当然のことである。勝利を捧げ、主の恩義に報いる。

そのために対峙する剣のサーヴァントは障碍であり、同時に得難い好敵手だった。

――俺も剣を抜くか？　いや、不覚にもランサーとして現界した以上、ケイネス様の槍として何処まで通じるのか試してもみたいが……。

聖杯が何をもってディルムッド・オディナをセイバーとしなかったのか。枠を先に取られたなどというのは水掛け論でしかない。仮に運命とやらが彼をケイネスの槍と定めたのであれば、せめてその槍で剣の英霊となった眼前のセイバーに一撃を与えてみるのも一興

だろうか。剣を抜くのはその後でも遅くはない。しかし――

ランサーは主のための決闘でありながら、それを愉しもうとする己を度し難く思う。だが、難敵を相手に自身の術技の全てを披露したいという思いは否定できない彼の本心だった。そう、それこそが武人の本懐。決闘の場に立つ騎士の望みだった。

そんなランサーの心中をパスを通じて敏感に察知したケイネスの言葉が届く。

【好きなようにしたまえ。この決闘に勝つのは君だ。ならその過程を愉しむぐらいの余裕を見せて、ソラウを安心させてやってほしい】

ランサーは振り向かず、背に受ける真摯な二対の視線を感じ取り、その片方に自身を案じた淡い意心が込められていることに気付く。こちらは間違いなく彼を慕うソラウの視線だった。

そして、主であるケイネスの視線に一切の危惧や案じる意のないことに気付く。それは生前に味方の全てが彼の背に向けたものと一致していた。揺るぎない信頼によって勝利を確信した双眸。

言葉よりもその視線の方がランサーの琴線を掻き鳴らした。ケイネスに認められたと自惚れてしまうのも無理はなかった。槍を構える両の掌に喜びの感情が表れ、握る力が自然増していた。

そして主のお墨付きで槍兵として拘泥して挑戦する我が侭を許諾され、槍に闘気が漲った。

【ケイネス様、あなたという方は……真に、私には過ぎた主ですっ】

【戦場の武功で返してくれればいいさ。我が無二の騎士よ――私は

これまでの君の忠節ぶりからその赤心をもはや一片たりとも疑ってはいない。だから主として命じる。やるならばとことんやって、勝って来るがいいっ！】

【――御意っ！！】

ランサーは残像すら霞む速度で疾走し、紅と黄の二条の閃光を携えて、攻勢に討って出た。

ケイネスの横でソラウは愛する騎士の戦う様を見守っていた。もっとも、常人の視認できる速度を凌駕して余りある瀑布のごとき槍と剣の応酬では、箱入り娘である彼女に戦況が解ろうはずもない。

それはケイネスをしても同様で、二戟目移行の連撃から一合一合は繚乱に咲き乱れる無数の花弁のごとくセイバーとランサーの間、ややセイバー寄りの空間に舞い散るのを視るに止まっている。

この期に及んでサーヴァントと視覚共有をするのはランサーへの侮辱でしかないし、仮に視覚を共有したとしても、戦闘の視覚情報量は時計塔屈指の魔術師であるケイネスでも脳が処理し切れない膨大なものである。それを無心で処理することが可能なある種の畸形――それも英霊と同じ視点など害でしかない。

ケイネスとソラウはただランサーの主として、己たちのサーヴァントの勝利でこの戦いが幕を下ろすのを待ち侘びていた。

しかし幕は開けたばかり。英雄同士が奏でる戦場音楽は止まると

ころを知らず、猛烈な槍筋と剣筋は幾十幾百幾千と合戟され、刃鳴りの音が奏でられる度に大気を震わし、地響きを起こす。

両者の距離は開くことなくセイバーは前へ前へとより近間を得るために間合いを詰め、ランサーは横に躱すを由とせず、攻守ともに縦方向に移動する敵手の勇猛さを賞賛した。

セイバーは〈風王結界〉を完全に運剣の加速に徹せさせ、透明化による視覚妨害も、風切り音と気流を乱す聴覚・触覚阻害も何一つ行わなかった。

なるほど。最初に名乗ろうと名乗らなかろうとも結果は変わらない。そう悟る。

ランサーの紅槍は魔を断つ超能を秘めているため〈風王結界〉による剣の隠蔽など無駄でしかなく、どのみち〈風王結界〉を十全に活用しなければ勝利をもぎ取るのが困難な強敵、正体を秘して打ち勝とうなど甘い考えだったのだ。あの槍の前ではただの一合で真名を看破されていただろう。

ならばランサーのマスターが銀の霧で戦場を覆い隠さなくとも結果は変わらない。変わらないのならば、騎士として名乗り合っての堂々たる決闘というのは、極めて有り難いものだった。

どうせ曝かれるならば、事前に宣言する方が好ましいに決まっている。それに互いに主を戴き対等の騎士として迷い無く剣を振るえる方がより戦意が弾み、延いては勝利をもたらす最大の要素としてセイバーの剣の冴えを研ぎ澄ますこととなる。

セイバーは繰り出される無数にすら見える二条の槍を一本の剣と甲冑の装甲で弾いていく。紅槍は剣で弾き、黄槍は剣が間に合わなければ甲冑で。

現状、鎧を素通しに彼女の身を穿つ〈破魔の紅薔薇〉も不治の呪いを持つ〈必滅の黄薔薇〉も、厄介極まりない宝具だった。

その宝具をランサーは最優のクラスであるセイバー以上の膂力で

駆使し、巧みに緩急を付けて二槍の連携でセイバーを翻弄する。

セイバーは油断も躊躇も焦りもなく、片腕を犠牲に槍と動きを封じ、一太刀浴びせるべきか思案し、すぐに却下する。

ここでランサーを斃すのは彼女の中で決定事項だが、それは相手も同様のはずだった。ランサーの主従の態度から不治の傷を負わせてから敢えて離脱するような姑息な真似などしないと思われる。

そのため黄槍だろうと紅槍だろうと一撃を敢えて受け入れることで、ランサーへの攻撃の機を作るのは悪い考えではないかもしれない。

だが、そんな胸算用をするにはランサーの挙動は速すぎるのだ。攻撃を受け入れ、カウンターでこちらの攻撃を繰り出す前に槍を手放されては傷の負い損であるし、何よりディルムッド・オディナは剣の腕こそ本領である。下賜された剣がただの剣でないのはセイバーは勿論のこと、アイリスフィールの眼をもってしても容易に見て取れていた。

加え、ただの剣をサーヴァントに渡すはずがない。そして、ディルムッド・オディナがランサーとして現界した以上、宝具に双剣が登録されなかったのだという正答に行き着く。

ならば現在ランサーが装備する双剣とは一体――。可能性は低いが絶対ではない考えがセイバーの主従に思い浮かぶ。

順当に思考すれば双剣の正体は、納剣状態でも洩れ出るその神秘の格からランサーの生前の愛剣であろうと判じて間違いはないはずだ。

だが、内一本は死因となった魔猪に砕かれたはずである。複製品か、それに類する模造品であろうか。抜かれれば解るだろうが、彼女たちの考えが当たっていれば、槍と同様に厄介な能力を秘めている可能性が高かった。

ならば窮地の場では封じられた槍などあっさりと手放して抜剣す

ることは想像に難くない。腕を犠牲にするなどという後ろ向きな戦術は槍を使っている愚挙でしかないだろう。

そうとなれば小賢しい駆け引きなど捨て去り、ただ己の全てを懸けて剣を振るうだけである。

セイバーは一太刀一太刀に己の生きた時間と存在を込めて振るい、暴威の域で迫る二槍に対する。

ランサーも一突き一突きに己の生涯と存在を込めて放ち、いっそう苛烈に攻め立てる。

互いの全存在を懸けた必殺の嵐が、相手の急所に炸裂せんと宙を趨り、互いにそれをさせじと迎撃を繰り返した。攻撃こそ最大の防御と攻め手を弛めずに刃が交わる。刃は音速を呆気ないほど簡単に突破して大気を切り裂き、空気と湿気による減速ですらもどかしく、またものともせずに剣と槍の速度は一合を重ねるごとに増していった。

手数も膂力も凌駕して、闘気と術技が拮抗する。両者の英雄の伯仲する業前は、自然当人たち以外の周囲に災害のごとき破壊を撒き散らしていた。

すでに周囲は銀の霧が覆う中を限定して、現代の戦争による効率的火力の災禍に見舞われた直後ような、瓦礫の散乱する廃墟と化していた。

アスファルトとコンクリートの地面は無数の大蛇がのたくったような複雑怪奇な轍を無数に描き、左右に配されていたコンテナは無惨にも千々に千切れて崩壊している。

ほとんど変わりがないのは互いの主が立つ場のみ。それ以外は戦塵と破片が舞う危険地帯となっていた。

――ふむ。やはり来たか。だが邪魔はさせんよ。丁重に持てなそうじゃないか。無粋な暗殺者たちよ。

ケイネスは懐に収める魔導器から霧の外の情況を伝達され、短く明快な指示を周囲に配した礼装の全てに命じた。ただ一言、「殺せ」と。

衛宮切嗣は機械のような虚ろな瞳に幾ばくか焦躁の色を滲ませていた。

一般的な――つまりは大多数という意味で――魔術師は、神秘を操る魔術に固執する。そのために現代技術への警戒を怠り、切嗣は手に入る限りの最新鋭の兵器を活用することで虚を作り隙を突き、あっさりと魔術師たちを始末していった。

彼が殺してきた中には、少数だがそうした手段をものともしない常軌を逸した魔術師も存在しており、そうした相手でさえ魔術使いの業と秘術を用いて尽く屠ってきたのだ。

セイバーのマスターである切嗣は、弟子の位置付けとなる久宇舞弥を伴い、セイバーとアイリスフィールを囮に陰から影へその身を移しながら、聖杯戦争に参加する他のマスターを暗殺する戦略を企

てた。
そのため彼女たちの前に冬木の地に入り、道具を取り揃え、今こうして二人のいる戦場に辿り着いていたのだが、ここで一つの誤算が生じてしまう。

ランサーに随伴していたマスターの大掛かりな魔術の行使によって、戦場の様子を知ることができなくなってしまったのだ。
突然地面から湧き出すように発生した水銀の霧は流体操作によって内と外を隔てる壁を構築し、その維持を続けていた。
霧は暗視装置や熱感知装置の一切を無効化し、外から中の様子を窺うことができない。不規則に連続する地響きから、中ではサーヴァント同士が今もなお戦っているのであろうが、霧の中からは何一つ音が洩れない。発信機の信号すら拾うこともできず、大地を除いて戦場は完全に外界と分断されていた。

切嗣は霧が魔術の産物であることを鑑み、霧に起源弾を撃つか暫し迷う。迷う理由は、戦闘中にマスターがこのような規模の結界を張るだろうか？　という疑問のためである。
もう一人の随伴者が張っている可能性もなきにしもあらずであるが、戦闘に使用するために魔力を温存しておきたいというのは当然の考えである。
ならば、この霧は展開中にも関わらず術式と魔力が独立した礼装や魔導器によって維持されている可能性が高い。
もし起源弾が術者にフィードバックしないのであれば、下手に起源弾を撃つのは手の内を晒す浪費でしかない。
対抗策が他の陣営に漏れでもすれば、無駄撃ちどころの損失ではなかった。

しかし、現状は出し惜しみするを許される情況であろうか？　中ではどんな周到な罠が待ち構えているか判ったものではない。セイ

バーはともかく、中にはアイリスフィールもいるのだ。せめて中の様子を把握するのは焦眉の急であった。

切嗣はセイバーたちを誘い出し、サーヴァントとともに待機していたランサーのマスターであるケイネス・エルメロイ・アーチボルトの人物像を大きく修正する。厄介な獲物から、すこぶる厄介な敵として。

強い海風に吹かれながら、切嗣はインカムに呼びかける。

「舞弥、アサシンに変化はないか？」

『いまだ何も。こちらの位置も気付かれていません。向こうも侵入に手を焼いていることから、この霧にはサーヴァントの侵入を気取られる仕掛けも施されていると思われます』

「だろうな。でなければさっさと霊体化して侵入しているだろう。ロード・エルメロイか。神童の二つ名は掛け値無しのものだったか」

ケイネスはサーヴァントの性質から、霧として展開する水銀を錬成する際にエーテルを混ぜ込むことによって、霊体に対するセンサー機能を持たせていた。

その分コストは跳ね上がったが、アサシンの隠身という危険性を考慮すればコストの度外視は当然の帰結だった。

さらに粒子状に散布された水銀同士が互いに干渉し合うことで各波長の電磁波の通りを妨害し、魔術師殺しが用いるであろう現代兵器での狙撃にも対応していた。

『――っ！？　切嗣っ、警戒して下さいっ！　アサシンが斃されましたっ！』

「――っ！！」

インカムの向こうで荒々しい物音とともに届いた言葉に五体が反応し、転がるように待機していた場所より離脱する。

そして、それまで彼がいた場所を水銀の線が通り抜けた。もしその場を脱するのが遅れていれば、切嗣の胴は真っ二つの泣き別れになるところだったであろう。

融けるように地面に消えてゆく水銀に制圧射撃をしつつ、全速でその場を離れるべく疾駆する。周囲に次々と魔力反応が生じていくのを知覚に拾いながら、切嗣はインカムに向けて怒鳴るように言葉を発する。

「舞弥っ、そっちは無事かっ？」

『……無傷ですが、ライフルを失いました』

「そうか。すぐにその場を離れろ。僕は安全圏を確保すると同時にセイバーの眼を使う」

『――諒解。お気を付けて』

舞弥との通信を切ると、切嗣は固有時制御で移動速度を倍加させ、アメーバのように蠢く水銀の魔手から逃れるために脱兎のごとく夜の倉庫街を駈け抜けた。

「アサシンが消滅しました。おそらくロード・エルメロイが事前に仕掛けていたトラップが作動したものと思われます」

冬木教会の地下では、幾筋もの水銀が編み出す単分子カッターによって寸断されたアサシンの最期を味わい、すぐに追加で五体のアサシンを向かわせた綺礼が時臣に報告していた。

『戦場一つを丸ごと覆い隠す上、サーヴァントの侵入を感知する結界に、アサシンとはいえサーヴァントを斃しきるトラップとは、若いながらも凄まじい技量だな。流石はロードの一角』

「如何しますか導師。アサシン一体を潜り込ませますか？」

謡うように魔導器から賞賛の言葉が届き、巌のごとく佇む綺礼は

師の指示を仰いだ。

『キャスターに露見したことを考えると、アサシンの出し惜しみは誤謬かもしれないな。だが、まだ早い。この一戦は見送るとしよう。だが監視は継続してくれ』

綺礼は師の命に従い監視を継続し、霧の結界が展開する前に視認したセイバーのマスターであろう女性の容姿を思い返す。

アインツベルンは衛宮切嗣をマスターとして投入すると時臣も綺礼も予想していたが、結果は見た限り、再びホムンクルスがマスターとなったようである。であるのならば、衛宮切嗣は不参加なのか？

否である。まだ冬木の地で確認するに至っていないが、綺礼は確信していた。あの報告書から感じた衛宮切嗣という人物像が間違いでないのならば、アインツベルンのサーヴァントが初戦を飾っている情況で、魔術師殺しが戦場である冬木の地に入っていないはずがないと。その手口からサーヴァントの戦闘の裏で暗躍し、敵対するマスターを尽く葬る腹積もりだろう。

マスターかどうかは定かではないが、必ず綺礼の元へ現れる時が来るはずである。その時を渇望して胸を焦がし、綺礼はアサシン五体による監視態勢の下、球形に倉庫街に張られた銀色の霧を注視し続けた。

「ほっほぉ。ベアトリスよ、お主の言う通りセイバーとランサーの戦舞は酒の肴に持ってこいだわ。余の血も滾ろうというものよ」

マスターであるベアトリスの視覚を共有することで、ライダーとして現界した征服王イスカンダルはセイバーとランサーの一騎討ちを観覧しつつ、すでに十本目となる酒瓶を飲み干した。

冬木大橋のアーチの頂上で、そんな豪放磊落を絵に描いたように観戦するライダーの隣では、電気毛布とバッテリーで暖を取るベアトリス・クロフォードが、「でしょうでしょうっ！」とその眼で拝むリアル聖杯戦争にはしゃぎつつも、「あぁっるぇ～？　なんかケイネスさん原作とかーなーりー違くね？　これってバタフライ効果？」と胸の内で疑問を募らせていた。

サーヴァント六騎が同時召喚されたあの日から、ベアトリスはライダーに現代の娯楽を供給する傍ら、せっせと冬木市内に放った使い魔を通して情報収集に徹し、概ね原作通りであると結論づけた。

ベアトリスの征服王召喚の尊い犠牲となったウェイバーは諦めの悪いことにキャスターを召喚したらしく、お山の奥に陣地を構えていることまで確認済みである。

凡才が頑張るなぁ、と観測者特有の上から目線で感想を抱く辺り、ベアトリス――今のベアトリスの主人格は、まだこの世界で生きる実感が薄いのかもしれない。

ベアトリス・クロフォードが今の人格に目覚めたのは十年近く前になる。代替わりの特殊な儀式の副作用で前の人格が奥へと引っ込み、逆に奥底に抑圧されていた今の彼女の自我が主導権を握ることとなるのだった。

脳内の記憶ではなく“記録”を閲覧したところ、母親はアーチボルト家に引き取られる前に死亡、と言うか母親が亡くなったために

アーチボルト家に引き取られたとされる。
また、アーチボルト家には秘していたが、ベアトリスの母の血筋は宝石翁の弟子の家系で、完成間近まで至っていたらしい。
もっとも、母の死とともに全ては失われてしまっているので「なにその死亡フラグ」と億劫な心持ちとなる。
ベアトリスとしては「宝石剣欲しかったなぁ」ぐらいにしか感慨はないが、それらの記録を洩らす危険性は熟知していたため、記録から引き出した魔術によって魔術師たちに知られたら危うい情報は全てガード済みである。

ベアトリスは金だけもって綺麗サッパリ魔術と縁を切り、どこぞの封印指定の人形師のように日本で静かに隠棲しとうかとも思ったのだが、吸血鬼や魔術師が普通に存在する世界で平穏もクソもあるわけがなく、名門の血統に加えて卓抜した回路の本数と構造を宿すことから、ある程度以上の護身の術を得ないと安心なんてとてもできなかった。
アーチボルト家の一員となっていた時期もあり、原作キャラであるケイネスの義妹というポジションを得ていた記録も閲覧したため、護身の武器の最たるモノとして思い浮かんだのが聖杯戦争で召喚されるサーヴァントである。
ベアトリスはクロフォード家で魔術の研鑽と聖杯戦争への準備をこなしつつ、さらに自身の生きた時代よりも過去なので株や投資でクロフォード家の資産を百倍になるまで運用し、莫大な富を築き上げていた。中身の人格は残念なことになったが、当主としての力量は衰えることなく健在だった。

実家での準備を概ね終わらせると、ベアトリスは自身の容姿の雰囲気を誤魔化すべく変装し、偽名を使って時計塔に潜り込む。
そして、ケイネスやソラウ、ウェイバーなどの原作キャラを遠目に眺めるなど時計塔ライフをエンジョイしながら、何とか良い聖遺

物が手に入らないものかと思案に明け暮れる日々を送った。

『ｓｔａｙ　ｎｉｇｔｈ』・『ｈｏｌｌｏｗ　ａｔａｒａｘｉａ』ならランサーことクランの猛犬クー・フーリン、『ＺＥＲＯ』ならライダーこと征服王イスカンダル、『ＥＸＴＲＡ』ならアサシンこと拳聖李書文と、以上三人が男の趣味的な意味で彼女の理想だった。生涯サーヴァントの戦闘能力で守って貰いたいという打算も込みで、英霊の妻となるべくベアトリスは邁進する。

だが、早々彼等の縁の品が手に入るはずもなく、表の世界で金に飽かせてオークション会場や博物館を転々としてみたが、目当ての聖遺物を手に入れることはできなかった。

触媒なしで召喚など自殺行為も甚だしい。青髭の例もあるし、魂の性質が似通ったという曖昧なファクターでは、どんな地雷サーヴァントが出てくるか判ったものではない。そういう意味ではベアトリスは自身の存在を全く信じていなかった。

安全性を考慮すると、原作で登場し人格を事前に知っているサーヴァントを召喚するに限るのだが、アルゴー船の破片だとか、弓聖のクロスボウだとか、あまりアテにならない聖遺物ばかりしか手に入らない。下手に裏切りの魔女など召喚しようものなら、いろいろな意味で人生が詰んでしまう。

やはり征服王の聖遺物を奪取するに限る。そうと決めたベアトリスは入念にケイネス宛の荷に眼を光らせて狙っていたのだが、結果はウェイバーの幸運が勝り、先に持ち逃げされてしまう。

彼女は後を追うように冬木の地に足を踏み入れ、召喚間際にウェイバーをブッ飛ばし、見事聖遺物を奪取してベアトリスは征服王イスカンダルの召喚に成功した。

そしてその夜の内にサーヴァントとベッドインし、甲斐甲斐しく女として世話を焼いて日々を過ごし、初戦のこの日を迎えるに至った。

ライダーにはすでに未来情報を持っていることを打ち明けていたのだが、事前に全てを知るのを無粋と断じ、気になった時に任意の情報をライダーが訊ね、ベアトリスがそれに答えるという形に落ち着いていた。

すでにライダーに渡した情報は、

・ アーチャーの正体
・ アサシンの切り札
・ セイバーの正体
・ ランサーの正体

の四つ。

上二つは遠坂邸での茶番劇を一緒に観戦した時に、下二つは現在も彼女の視界の向こうで激突するセイバーとランサーの観戦を始めた時にそれぞれ訊ねられ、さくっと情報を献じていた。

肉眼では銀の霧に覆われる戦場だが、外の人は性能面でケイネスを圧倒するベアトリスの身である。遠見の魔導器の視界を経由して霧の結界を維持する魔術式に干渉し、中を覗くことにさしたる労力を必要としなかった。

戦場を斜め上の視点で眺望しながら、やはりベアトリスは原作との違いに意識が傾く。

ベアトリスは己がイレギュラーであることを知っている。記録にも曖昧な情報しか残っていなかったが、本来この肉体はアーチボルト家に入る前に死んでいたほどの大怪我を負っていたらしい。傷は残ってないが、魔術で精査すればダンプカーに一度潰されたような痕跡が発見できる。よく助かったものである。

それゆえ、本来の正史ではアーチボルト家に引き取られることも

なく、普通に死んでいたのだと予想される。自動的にベアトリスという要素によって、彼女と親しくしていたケイネスの内面が変化している可能性は大だった。

しかし、時計塔で眺めていた限り、原作通りの傲慢でいけ好かない青びょうたんだったはずなのである。その認識を裏切る眼下のケイネスはなんというか、まるで別人である。「なにあのイケメン？」と我が眼を疑ったほどである。

これはおかしい。

身を隠すことをせず、ソラウと一緒に観戦している。

これもおかしい。

ソラウがランサーに向ける視線は完全に惚の字なのにも関わらずケイネスが嫉妬していない。

これだっておかしい。

戦場を覆う銀の霧。解析結果は気配遮断したアサシンですら侵入を感知する優れものだった。

これも特におかしい。

ランサーが最初っから二槍の封を解いてるは、地味系のランサーがセイバーを圧倒するは、原作にはない帯剣までしている。

もう、絶対におかしいだろう。なんだこれ。

ベアトリスの知る原作知識はもしかして、あまり役に立たないのではないだろうか？　ここに来て聖杯戦争に参加したのはかなり危ない橋だったのではないか、という思いが脳裏を過ぎる。

しかし、そうした血の迷いは一瞬で終わる。ベアトリスは過ぎたことはしょうがないとさっぱり諦めた。

すでに自分は征服王の女なのだ。今さら「やっぱりやめました」と逃げ出すのは女の沽券に関わるし、一緒に過ごしてカリスマＡスキルに当てられたのか、本気で心酔している部分も自覚していた。

原作のウェイバーが惚れ込むのも無理はない剛胆ぶりである。イス×ウェイ本は間違っていなかったのだ。

「……いかんなぁ。これはいかん」

ライダーの思案げな唸り声に、ベアトリスは意識をセイバーとランサー戦に引き戻した。そして絶句する。どうやら考えに気を取られている内に情況がさらに未知のものへと変化していたようだ。あまりの内容に血の気が引くほどに。

ベアトリスとライダーの遠望する先の向こうでは、双剣を装備したランサーがどうやったのかセイバーに深手を負わせているのだ。そのことから、やはりあの双剣も宝具に相違ない。彼女の知る並行未来世界でヘラクレスとの初戦で受けたような重傷をセイバーは負っていた。

二人どもども臣下に加えたい征服王なら、せめて一度はスカウトしないと気が済まないのだろう。すでに巨体はマントを翻して立ち上がっており、見上げる形でベアトリスが問い掛ける。

「早々に勝負が着きそうですけど……やっぱり往っちゃうんですよねえ？」

「おぅ、判っておるな。ならば征くぞベアトリス、戦支度だっ！！」

ベアトリスの反応で説明の手間が省けたのか、ライダーはさっさと腰の剣を抜き放ち、虚空を切り裂く一斬を振り抜いた。

その斬撃によって何も無い宙に一本の線が生じ、そこからベアトリスをして馬鹿げた魔力を無造作に吐き出しつつライダーの宝具へ

神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）〉が現界する。
　ライダーとベアトリスは一秒だって惜しいとばかりに冬木大橋のアーチから戦車の御者台に飛び移り、いまだ銀の霧の晴れない倉庫街へ空中を爆走した。

七：紛擾（後書き）

皆様お久しぶりＤＥＡＴＨ；　風邪が治らないは五月病だは、プロットを変更させずにキャス子の粗い設定をいじってたりしてたら、何時の間にかこんなに期間が開いてしまいました。申し訳ございません。

キリが良いのでライダー乱入前に切りましたが、次回は五騎揃い踏みとなります。そこからがまた長いのですが……；

※キャス子の陣地作成スキルをＡ－に変更、感想板で挙がった指摘を取り入れて「アインツベルンの術」「赤いあくまの術」「聖杯からの知識」の総合的な力量で判定されたと設定を変えました。プロットには変更はないのでこのまま突っ走ってしまいます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1928x/

Fate/Zero -Irregular shuffle-

2011年11月5日06時44分発行